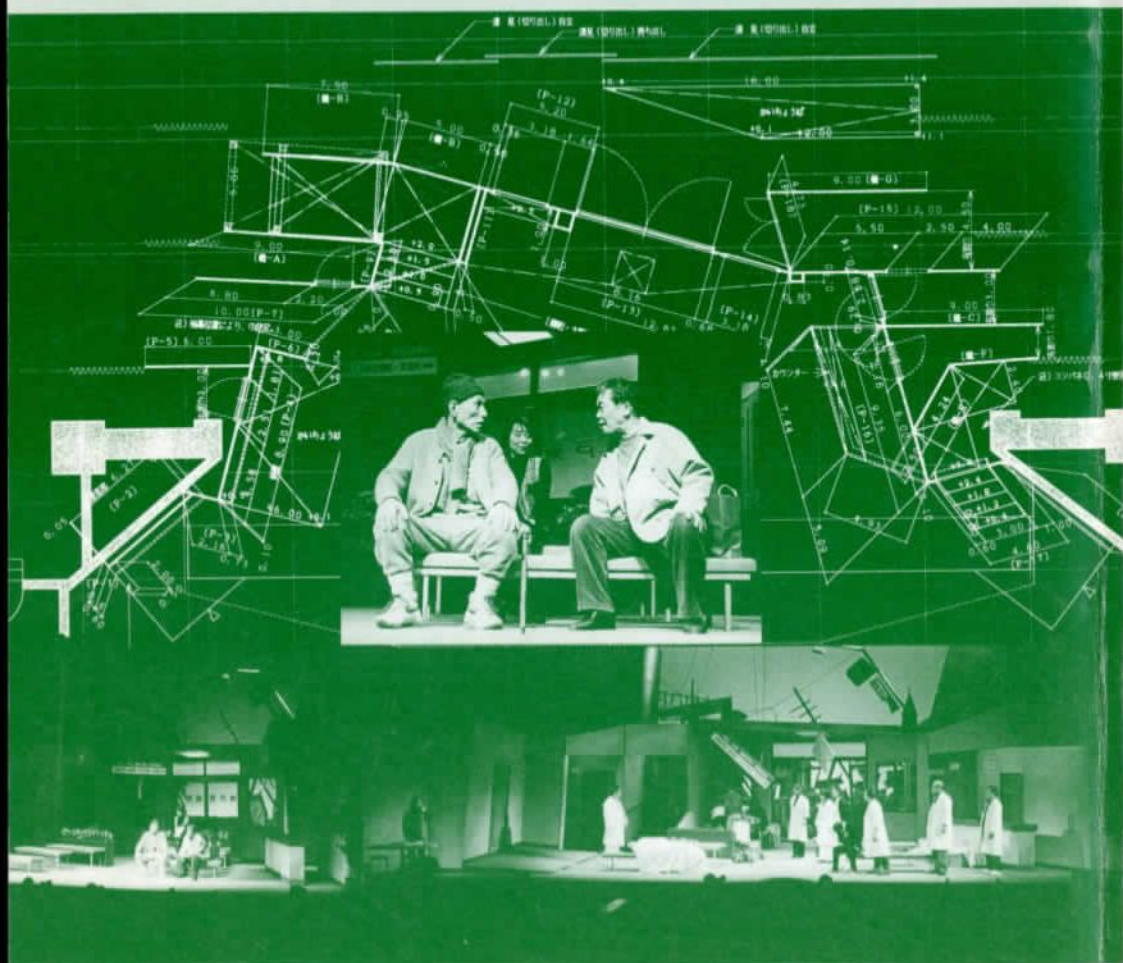


演劇会議

VOL.105 2001年4月



特集 さようなら、早川昭二さん
リアリズムシリーズを読んで 長谷川伸二
「郡上一揆」のロケに参加 松渡 治郎
東京働く者の演劇祭 山部 芳秀

岡田和義著

『演劇探訪』 北草社刊

A5判 165頁 1200円

全り演会員には特別割引 1000円(送料共)

(乞・個人でのご注文は劇団名を併記)

21世紀にはばたく全り演の若い書き手や会員の必見マニュアル!!
古今東西の喜劇の趣向、名作戯曲のシノプシス、90年代の舞台評……。

〒101-0061

東京都千代田区三崎町2-20-1

TEL 03-3264-3875

郵便振替 00160-2-106486

北草社

熱闘10分間芝居in京都・八瀬

西会議ゼミのお知らせです!この荒廃しまくった日本で、強く明るく素敵に
生き残る劇団・役者のために、今年のゼミはひと味違います。西日本劇作家の
会の全面協力を得て実現可能となったその名も、『2001年西日本オールスター
全員集合!!熱闘10分間芝居 in 京都・八瀬』皆さまフルってご参加くださいね♡

日時… 2001年8月25日(土)夕方~26日(日)昼すぎ

場所…京都市左京区・八瀬

本番までの流れ

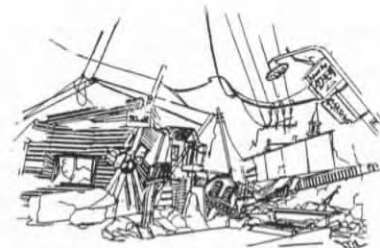
- ①西日本劇作家の会が「時間10分・出演者5人」の素晴らしい作品を2本ご用意します。
- ②7月上旬に各劇団に台本をお送りします。
- ③「よっしゃ!」と思った人は、すぐ応募してね。締切は8月10日です。
は・や・くう~
- ④8月25日、メンバーが集まって、その場で鬼のグループ分け♡ドキドキ。
- ⑤翌朝まで稽古しまくって、さあ本番一つ!
- ⑥優秀なプレゼンテーションのチーム・個人には、なななんと、ごほうびが
りま~す。

◇劇団だいこん座
『風の吹く家』
9月23日
高橋 寛／作・演出



◇劇団からつかぜ
『アンネの日記』
10月7日
フランセス・G・バケット／訳
アルバート・バケット／脚色 平井 新／演出

◇劇団久喜座
『秋黄昏で、暁の父』
10月8・9日
金剛寺照五郎／作・演出



大阪新劇団協議会プロデュース合同公演
大阪自立演劇連絡会議第8回合同公演
作／清水 巖 演出／森本景文

『1995こうべ曼陀羅』

(2001年2月16日(金)～18日(日)大阪エル・シアターで上演)

舞台美術 板坂晋治
照明 上畑裕俊・小道具 木田昌秀

表紙のことば

森本 景文

舞台美術作品数900、デザイン場面数6000という板坂晋治さんの作品である。この舞台は59の登場人物を51人が演じた。スタッフ28人、制作9人、8集団計88人が総がかりで手づくりで創りあげたものだ。大道具・小道具づくりも専任の8人を中心に、できるときには演技者も手伝った。舞台写真のバックに入っている図面は劇団息吹・江上岳志さんによるものである。このようにして、"お芝居は手づくりこそが原点"ということを改めて学んだ。

(演出・劇団未来)

舞 台

◇黒石演劇研究会

『帰ってきたオトウサン』

10月28・29日

北野ひろし／作 古川幸仁／演出



◇劇団はぐるま 合同公演

『円空になったババ』

11月17・19日

林 大輔／作 汲田正子／演出

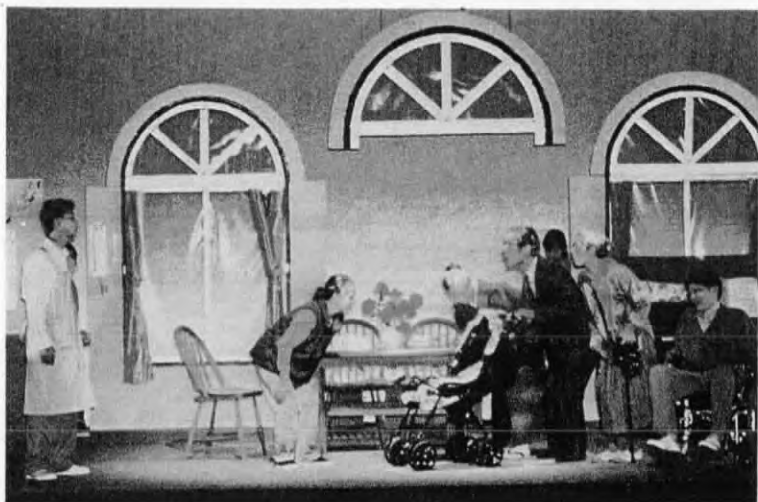


◇劇団上野市民劇場

『僕のメリーゴーランド』

11月18・19日

近石綏子／作 杉森正美／演出



公 演



◇劇団やませ

『九戸政実』

11月18・19日

梶谷伸夫／作 栗谷川洋／演出



◇福岡現代劇場

『夏の夜の夢』

11月25・26日

シェイクスピア／作 松岡和子／訳
猿渡公一／演出



◇劇団名芸

『米泣く村に米降る街に』

11月24・26日、12月2日

栗木英章／作 片野耕治／演出

公 演

舞 台

舞 台

◇劇団名古屋

『泣き虫なまいき石川啄木』

11月25・26日

井上ひさし／作 久保田明／演出



◇東京芸術座

『男の言い分』

12月16・23日

平石耕一／作・演出



◇テアトルハカタ

『アリババと40人の盗賊』

1月21日

北野ひろし／作 中村ジョー／演出



公 演

舞 台

◇劇団四紀会

『風にのれ、プッピー』

2月4日

清水章代／作 岸本敏朗／演出



◇青年劇場

『かもめ』

2月21・25日

チエーホフ／作 松下 裕／訳
セルゲイ・カルギン／演出



◇劇団すがお 桑名演劇塾公演

『桑名開城その前夜―戌辰物語』

2月24日

栗木英章／脚本 吉良史郎／演出



公 演

●劇団通信の中から4月中旬以降の公演や行事をまとめたので、都合のつく方はぜひ観劇しあってください。
●公演予定については、公演日・会場・タイトル・作・演出を劇団通信にはっきりとお書きください。

名古屋演劇集団	4/11～13	名古屋西文化劇場	ONとOFFのセリナーデ	古城十忍/作 狩野恭光/演出
京浜協同劇団	4/13～23	スベース京浜 (劇団小劇場)	とりあえずの死	藤田傳/作 内田勉/演出
劇団夜明け	4/19～22	中津川中央公民館ホール	闇に咲く花—愛敬稲荷神社物語	井上ひさし/作 鈴木弘文/演出
劇団テアトルヘカタ	4/21・22	ボンブアラザホール	楽屋	清水邦夫/作 野口ひろとし/演出
青年劇場	4/12～23	紀伊國屋サザンシアター	殞 (もがり) の海	島田九輔/作 松波喬介/演出
	4/25	前進座劇場	"	"
東京芸術座	5月	5月から全国巡演 (詳細は劇団通信を参照)		
劇団群馬中芸	5/5	"	勲章の川	本田英郎/作 高橋左近/演出
劇団だいこん座	5/12	あかぎ未来スタジオ	十二人の怒れる男たち	レジナルド・ローズ/作 稲垣純/演出
劇団やませ	5月	鶴岡市中央公民館ホール	コッペンはきつねいろ	松谷みよ子/原作 中塚一/脚色 脚色 ふじたあきや/演出
関西芸術座	5/16～20	二戸市	竜の子太郎	松谷みよ子/原作 新屋英子/脚色
劇団名芸	5/18・19	関芸スタジオ	九戸政実	榎谷伸夫/作 栗谷川洋/演出
劇団上野市民劇場	5/19・20	名古屋市民天白小劇場	わりかん	津々見俊文/作 梶本潔/演出
演劇集団あり	5/21	市文化ホール	十二夜	シェイクスピア/作 栗木英章/脚本 佐野秀明/演出
劇団きづがわ	6/9・10	クレオ大阪西	芭蕉翁桃青—その内なる枯野から	島田九輔/作 杉森正美/演出
劇団かすがい	6/9・10	尼崎ビッコロシアター	ザ・ウインド・フロム・サイレンス	結城翼/作 森山威比古/演出
劇団静芸	6/10	静岡市文化祭	月光の夏・挽歌	毛利恒之/作 林田時夫/演出
劇団あしぶえ	6/10	隠岐・西ノ島町	花吹雪花巻—ノ丞一座	仇情義信之花道
	6/24・7/1	しいの実シアター	紙屋悦子の青春	
劇団支木	6月下旬		セロ弾きのゴーシュ	
劇団はぐるま	7/20～22	岐阜市民会館	二十二夜待ち	伊藤一郎/作 中野健/演出
劇団海鳴り	7/		車輪のついた龍 (仮)	ミュージカル・魔の森の黒鬼と銀のシギ
			ユタと不思議な仲間たち	

演劇会議

2001年4月7日発行 第105号

◆ もくじ ◆

グラビア (舞台)	1
2001年4月中旬以降の公演	6
お別れのことば	8
特集 さよなら早川さん	
早川編集長を偲ぶ	赤松比洋子 10
「お父さん」と私	大 れい子 12
早川昭二さんの年譜と仕事	13
座談会「早川昭二さんを語る」	14
リアリズムシリーズ⑩ 「リアリズムシリーズを読んで」	長谷川伸二 23
「ハッカのまちの演劇祭」に感慨いっぱい	後藤 陽吉 30
第38回東京働くものの演劇祭観劇感想記	山部 芳秀 33
埼玉/麦の会/土くれ/石るつ/新芸座	
今、シニアの人が熱い (劇団あしたば)	山崎 三郎 38
映画「郡上一揆」のロケに参加	船渡 治郎 40
ロシア演劇レポート⑩ 世紀の境に立つて	桜井 郁子 46
アイルランド紀行—「夕鶴」の公演を中心に交流—	若葉 正則 54
北から南から (劇団通信)	58
劇評 劇団山形「峠」	高橋 寛 78
演劇集団あり「ぼっぱや」	菊地 照一 79
関西芸術座「余は危険人物なり」	建奈 智史 80
宇都市民劇団若者座「レンタルファミリー」	仲 武司 82
合同公演「1995こうべ曼陀羅」	栗木 英章 84
劇団コーロ「カモメに飛び方を教えた猫」	神沢 和明 86
人形劇団クラルテ「頼光・四天王伝説」	" 87
劇団大阪「海の沸点」	" 88
劇団道化「ボタ山に咲くムクゲたち」	今泉おさむ 90
劇団きづがわ「月光の夏」	" 91
劇団未来「茜色のとき」	" 92
神戸職演連「紙屋悦子の青春」	" 93
(投稿)「セイルスマンの死」と「ガ・ラスト・ヤンキー」	平林卓郎 94
情報BOX	98
全日演議長団 (東西合同) 会議の報告	98
西会議「次世代企画会議」を開く	99
西日本劇作家の会17回総会	100



1月18日、カトリック松原教会で
早川昭二さんの劇団葬が行われました
(岩田治彦氏撮影)

お別れのことば

全日本リアリズム演劇会議議長

こばやしひろし

早川ちゃん、早川ちゃんの前にこうした形で立つなんて、今まで考えもしなかったことです。しかし、早川ちゃん、あなたはよく生きたよ。率直なところ70歳を超すこの年まで生きるとは思っていなかった。70年

もたくましく生きぬき、日本の演劇界にいろんなものを残してくれたとは思ってもいなかった。知りあった当時の早川ちゃんは、今回の発病前の早川ちゃんと何ら変わらなかった。やせ細った顔も姿も。当時から

を信条に生きとおしました。

演劇は歴史の反映である。いかに歴史の停滞に社会が苦しみ悶えようと演劇はそれをとらえなければならぬ。そこに、生きる人間が発見されれば、舞台に感動ははじけるはず。それが早川昭二の信念でした。「そのためには身軽な方がいいんだ。大きな幟は身動きならないよ」

それからの早川ちゃんは自由にはばたいたのです。時流に右顧左眈することなく、社会の矛盾を、目に見えない生活の苦悩の舞台化を、彼は目指したのです。それは「燃える雪」となり、「西風に起つ」の合同公演となって結晶しました。とくに全日本リアリズム演劇会議(全リ演)関東ブロックを巻き込んだの合同公演「西風に起つ」は感動的でした。あなたが関東ブロックの仲間になつたのです。あなたあつての成果だったといつていいでしょう。あの感

動は関東ブロックの多くの仲間の胸に今も刻まれています。

その後、「演劇会議」編集長の萩坂さんが再起不能に陥りました。編集長萩さんあつての「演劇会議」です。いわんや、機関誌「演劇会議」抜ききの全リ演が考えられないだけに、私たちの動揺は大きいものがありました。「演劇会議」の編集の行方が見えなくなったのです。その時「だれかがいなくなったらだめになる組織ではだめだよ、それが軌道に乗るまで受けてもいい」

この一声、そうです。この一声で「演劇会議」は再生したのです。「だれかの力に頼らなくてはいけない組織からの脱皮」これこそ銅鑼を結成した時からの早川昭二の信念だったのです。それが「演劇会議」を見事に生き返らせたのです。次々と彼は企画を立て始めました。今日に生きるリアリズムとは？ そうです。停

不規則な生活で、珈琲を飲み、煙草を煙突のようにふかし、パンのかけらを口にただけだった。「演出の仕事は重労働、食べにやだめだよ」といっても「持つからいいよ」と笑っているだけ。口にこそ出さなかったが、こんな生活じゃ、もって10年か15年と、私はひそかに思ったこともあったのです。

その早川ちゃんが民芸を飛び出した。くわしい内情については知らないが、私にとってはそれは衝撃だったのです。私が推薦した「小さな駅の物語」を神戸労演の企画に取り上げてくれたことが、きっかけのひとつとなったからです。

ところが心配する私にケロっとして「寄らば大樹じゃだめだよ」といったのを覚えています。そして仲間とともに銅鑼を結成したのです。それからなんと30年。演劇界で早川ちゃんは自己の信念を貫き通し、それ

滞する今日、これを模索し、突破することが最後の最後まで早川ちゃんを持ち続けた夢といつていいでしょう。それを「演劇会議」の誌面で執拗に突き詰めたのです。早川ちゃんは、息を引き取る前日も、民芸以来の盟友鈴木瑞穂の手を何度も固く固く握り締め、目をらんらんと輝かして今年の芝居の話をし続け、話が合うやガッツポーズまでしたという。今もきつとその続きを話し続けていることでしょう。

私たちはこの早川昭二を受け継いでいかなくちやいけない。受け継いでいく。早川ちゃん、安心してくれ。みんな無限に受け継いでいく。受け継いでいくよ、無限に。

じゃ早川ちゃん。さようなら。友人として、また全リ演の仲間の代表としてお別れのことばとします。さようなら。……長い友情ありがとう。

2001年1月18日

早川編集長を偲んで

劇団きづがわ 赤松 比洋子

『演劇会議』前編集長の萩坂さんが、晩年「だれか編集の仕事を替わって、引き継いでくれる人はいないのか」と、事あるごとに言われるようになっていたそんなあるとき、私は電話をかけた。

「萩さん、あと2年待ってください。そしたら私は第一次定年になるので延長をしないで退職し、東京へ単身赴任(?)して萩さんの手足となつて『演劇会議』の仕事を引き受けます」と言った。黒さん(故・黒沢参吉)や萩さんには、劇団創立の頃からいつも励まされ支えてもらっていたので、恩返しのもりだった。萩さんは「えっ、本当に!あなたが継いでくれるの、うれしいよ、今まで頑張った甲斐があったよ」と手放

して喜ばれたことが胸に迫った。

その後、全リ演運動全体の発展を考え『演劇会議』の果たす役割が論議された結果、集団編集・発行体制をとることにになり、東会議、西会議双方から編集委員を選出し、私もその一員として参加することになった。早川新編集長とはその時からのおつきあい、1994年秋の86号からだった。

それからの3年間は、東会議が編集実務を負っていたので境野さんを窓口にすることが多く、年1回の東西合同編集委員会でお会いする以外は直接的な接触はなかった。ただ、早川さんが強調され編集方針の中心に据えられていたのは、

(1)リアリズムについているんな角

替えられないか」とか……。すでに最終校正に入っていたがグツと押さえて努めて明るく「いいですよ、なんとかやってみましょう」と言うのと、子どものように弾んだ声で「あっそうなの、頼むね」でガチャン。

その早川さんと長いおしゃべりをする機会が一度だけあった。亡くなる10ヵ月前、2000年2月の東西合同議長団・編集委員会が大阪であったときである。病院から外泊許可を取って出席された早川さんは、お酒も飲めないし、会議が終わると早めに自室に引き上げられた。私はその部屋におじゃまして2時間くらい話し込んだ。民芸を退団されたいきさつや自分の信条、今後やりたい作品のことなど……。

そして一番多く語られたのが、全リ演運動の発展のことだった。そのために『演劇会議』の果たす役割が重要であること、日本中の地域運動

度から追求していくこと

(2) 良い戯曲を紹介して新しい作家を育てること

(3) 若い人たちに読まれる内容であること

(4) 広く全リ演外の人たちにも読まれるように、またそのための紙面を割くこと

などだった。私たち編集委員もこれに沿って原稿依頼や取材、座談会や対談の企画、「職場と演劇」シリーズの発足などと多忙になり、その分紙面も充実していった。

1997年8月から編集体制が西会議に移行されることになり、私が実務の中心になったことから、毎号ごとに早川さんと接触することになった。早川さんは無駄なおしゃべりはしないで、短い言葉で端的に指示や希望を出される。「まだ間に合う?」「いつまで待てる?」「もう少し粘ってみるね」といった具合。とく

という観点に立ってそれをどう広げ深めるか、銀河ホールやしいの実シアターなどの突出した動きをどうみんなのものにし、全国の各集団の10年後の見通しになるような取り組みにできるか、行政との人的交流をどうつくっていくのか、全リ演運動と『演劇会議』を引き継いでくれる世代への交替を急がねばならない、そのためにも若い人たちに読んでもらえる魅力ある内容であり続けること……、矢継ぎ早に語られた。その話の中で、鈴木瑞穂さんの誌面登場も実現した。やりたいこと、やらなければならぬことをいつばい詰め込んだまま、逝ってしまわれた。どんなに無念だったろうと思うし、私たちも無念でならない。

全リ演運動の核になる『演劇会議』誌を、21世紀にふさわしい出版物へと飛躍させる責任が、残されたものたちに課されている。

にリアリズム論シリーズは多方面で活躍している人たちに原稿依頼をするので、粘りに粘って……といったふうで、相手の家の近くまで行つて喫茶店に呼び出したり、一杯飲みながら、何度も話し合つて書いてもらっている。『演劇会議』は原稿料ナシでただで書いてもらうんだから誠意を尽くさないかね」とよく言われていた。また、戯曲に対しても執念を見せられ、若い人の作品では、アドバイスしたり、テキストレジャーを依頼したりする。全リ演外の人々の作品を紹介する場合はその舞台を観に行ったり、観られないときはビデオを取り寄せ舞台成果をみる。

号を重ねるごとに細かい指示やわがまま(熱心さからくるものと承知をしている)が多くなり、期日が過ぎてても工夫のための粘りが続く。私の職場にもしばしば電話があった。「良い原稿が届いたので前のと差し

『お父さん』と私

創作バレエ作家 大れい子

この5・6年、私は彼を『お父さん』と言い、彼は私を『かあちゃん』と呼んでいました。病室の人が、今日はお父さんでしょうか、というぐあいに。

私たちが知り合いになったのは60年安保闘争の頃でした。66年中国文化大革命の真最中、私はバレエの訪中公演参加。帰国後、集団脱退があり、その翌年69年に一人でバレエ団をやめました。その間相談に乗ってくれたのが早川さんだったのです。水をぶっかける役目をしてくれ、「結論は自分で出せ」と言っていました。その後、71年に彼も民芸をやめ、住まいも北千束に引っ越しました。その頃から胃の不調を訴え始め、

私は私のアパートに帰らず、ほとんど一緒に居て、そこからバレエを教えに行き、彼の食事づくりはじめ、家事を手伝いました。

そして私は東京バレエセンターという振付者のグループをつくり、彼も「銅鑼」をつくったのです。

その後、彼は私の高校時代の友人の医者で紹介で女子医大で手術。大成功でした。元氣になりました。

その後、私が引っ越し、彼もバスで私の所から三つ目の所に引っ越しました。いずれ公表するから、といって日当たりが悪くても、せまくても、一時的なつもりで荷物を押し込みました。彼は自分の家を「仕事場」といい、私の所で世帯を——という感じで、私は、自分の家は休む場であり仕事の場でもあるので困ったこともありました。

70歳になった頃から、「疲れた」が多く口から出るようになり、心配

と共に叱咤激励してたことが少し悔やまれます。

私の友人関係にはオーブン、別荘に誘われれば一緒に行き、自分の方は、知る人ぞ知るで内緒。胃の手術から24年目。今度の病氣。食道癌。闘う敵が見つかったと、大はりきり。また私の同級生の紹介で、東京医大に2000年1月20日に入院。入院退院をくりかえし、2001年1月14日に亡くなりました。

お互いに創るという仕事では一緒にしてし、話し合ったり、ケンカしたり、でもさらけ出し合った生活でした。亡くなる数時間前に、「お父さん置いていかないで！」と言ったらゲンコツで私の頭を強くたたき「馬鹿もん」と言いました。彼らしい。よく、うちは二人で一人前だね、と言ってましたから。今となっては、『お父さんありがとう』のひ

早川昭二さんの年譜と仕事

1928年10月14日に東京都品川区東品川で国鉄技術者、保氏の次男として生まれる。

その後、千葉の幕張、江戸川区の平井に移る。少年時代の大半は平井で過ごす。長じて、松本高専（現信州大学工学部）に進む。

当時、長野に帰郷していた水品春樹氏（築地小劇場以来の舞台監督）の知遇を得、演劇への出発点となる。学生演劇、村芝居に打ち込む。

50年に上京、劇団民芸に演出部員として入団。10数年の間、多数の演出家のもとで演出助手として活躍する。

65年に『郡上の立百姓』（こばやしひろし作）を初演出し、群衆処理が高く評価される。続いて『ゼロの記録』（大橋喜一作）。

70年に劇団民芸を退団する。それまで、『あゝ、野麦峠』（宇野重吉と共同

演出）、『狼』『無頼官軍』『もう一つの歴史』等を演出。

72年、鈴木瑞穂氏、民芸退団の若者たちを中心に17人で「運営は民主的に、創造では客席と火花が散るような舞台」を劇団の理念として演劇集団銅鑼を創立。

『二つの月曜日の思い出』（アーサー・ミラー）旗上げ公演、73年6月。『明日を呼ぶ娘たち』（原作・前川清治／台本・吉川雅喜、早川昭二）73年9月。『雪の下の人たち』（大垣肇／小関智弘）74年10月。『橋』（マリオ・フラッティ）75年9月。『三十年目の幽霊』（立川雄三／早川昭二）75年11月。『イカルの冒険』—ナイヤガラ綱渡り—（アロンソ・アレグリア）76年9月。『狐とぶどう』（ギリエルメ・フィグリード）78年7月。『禁じられた遊戯』（リリアヌ・アトラン）79年9月。『夜明けのランナー』（藤川健夫／早川昭二）80年9月。『父さんと呼ばれたいパパ』（柴崎卓三）81年1月。『炎の人』

—ゴッホ小伝—（三好十郎）83年1月。

『天神さまのはそみち』（別役実）84年1月。『ナナちゃん』は宇宙人（大橋喜一）85年9月。『燃える雪』（及川和男著『村長ありき』より、台本・大峰順二）87年9月。『明日への出発』（ローソフ）88年9月。『されどわが町』（大峰順二）90年9月。『暮しの詩』（小山内美江子）92年9月。『橙色の嘘』（平石耕二）93年2月。『凍土の鶴』（平石耕二）96年3月。『らぶそんぐ』（大峰順二）98年9月。

創作としては、女たちの秩父事件を描いた『虹のゆくえ』等がある。

89年には全演劇東プロダクション10劇団合同公演（全演劇結成25周年記念）『西風に起つ』（原作・亀井淳・森住卓共著『ドキュメント三宅島』、作・亀井淳）4月〜5月、4会場、9ステージ、7412人の観客。

そして、94年11月号（86号）から『演劇会議』誌の編集長として貢献してきてた。

座談会 「早川昭二さんを語る」

1月27日(土) 劇団銅鑼稽古場

出席者

後藤陽吉(俳優・青年劇場)
菊地佐玖子(俳優・劇団銅鑼)
村岡 章(俳優・劇団銅鑼)
飯田信之(演出家・劇団さっぽろ)
川村武夫(俳優・劇団埼芸)
境野修次(編集委員・劇団石るつ)

早川さんの仕事と
果たしてきた役割

後藤 早川さんの仕事とこれまでに早川さんが果たしてきた役割は、ということでもみなさんに語っていただきます。が、実は早川さんのお通夜の後で編集委員を中心に議長団なども加えて早川さんの追悼集をどうするかということでした。合い、まして、ひとつの歴史的なポイントであり、銅鑼結成時については間において鈴木瑞穂さんに話してもらおうということにしました。で、ここではその辺のことにも念頭において早川さんがどのよ

うな創造的な主張と特徴、カラーを持っていたのか、みなさんの関わった舞台を通じて少しでも明らかにしていけたらと思います。
境野 そうですね、具体的には、銅鑼の初期ということで、旗上げ公演である『二つの月曜日』の思い出をめぐっての創造的役割、中期というか、節目としての『燃える雪』、そして全リ演関東ブロック合同公演『西風に起つ』をめぐって、おおまかにその三つを軸に話していただければと思います。
後藤 『二つの月曜日……』を軸にということでは、まずは、今や北海道で演劇の創造的中核を担っておられる飯田さんに口火を切って

ただけですか、飯田さんは早川さんとは民芸からのおつきあいでもあるので……
飯田 あの、民芸をやめる経緯から触れないとどうも。
後藤 どうぞ。

飯田 僕は62年から70年まで民芸で勉強させてもらいまして、66年か67年でしたか、辞って民芸の先輩

と大喧嘩いたしました。翌日住所も知らない早川さんの家を訪ね、辞表を提出するつもりだと泣きながら言ったんです。早川さんに「辞める時は一緒だ」と説得されたんです。それで早川さんがやめ、少し遅れて僕もやめました。それから、何かと声をかけていただいて、京都の合同公演『河ひらくとき』では演出助手、『二つの月曜日……』

では翻訳と台本づくり、『明日をよぶ娘たち』は山田善晴さんと共同演出で、実はこの作品は銅鑼より劇団さっぽろが先にやっているんです。この時は、早川演出で私は助手、北海道での仕事はこれが最初です、73年の公演ですか。
後藤 その時は、銅鑼に所属していませんか。



三宅島で現地調査(メガネの早川さん)

飯田 私はフリーで、民芸退団後、銅鑼の研究所や公演のお手伝いをしていたんです。当時、早川さんは、これからの劇団は「劇団連邦制の考え方が大切だ」と繰り返し主張されていたんです。道新編集局長の鈴木正人さんが、これに共鳴され、早川さんに劇団さっぽろに来て欲しいと交渉されたようだが、忙しい身で断られたらしい。
74年8月、真駒内で道演集・東リ演共催の「東日本演劇フェスティバル」で僕が北海道へというこ

菊地 民芸を早川さんがやめた時期、民芸の重要な俳優さんたちがぞろぞろやめていく状況の中で、私たちの中になにか動き始めているものがあったような気がするのね。お互いに、そんな話はしてないけど。それで例のアンケート事件がありました時、自分の態度を

決める時がきたという気がしましたね。私の中に早川さんも外（民芸の外）に在るなと感じ、あのひと一緒にやれると嬉しいなという気持ちがありました。ところが早川さんは劇場なんかで顔を合わせても声ひとつかけてくれない、冷たいもんでした。それは意図的だったんですね。要するに自分で考え決めさせようという考えを早川さんは持っていたんです。だれに対しても。

一人になった早川さんは劇団はぐるまをやめた田村さんと二人で信州でやるという案を持っていたんだって。ところがアンケートの提出の時にいたら民芸を退団する人がかなり見えてきて、これは、信州に引込んでいたわけにいかないと思ったそうです。

後藤 民芸をやめると聞いた時、早川さんと鈴木さんに電話したんで

す。「やめちゃだめだつて」。私はね、二人をやめるということは、日本の演劇の上での損失だという危機感すら持ったんです。まあ、事情は後で少しづつわかってきましたけどね。

菊地 アンケートの提出（8月25日）が迫ってる頃の私は、夜寝る時には退団しようと決心する。ところが朝、眼が覚めると、いや、退団しない、と。大きな揺れがありましたね。結局、あの二人がおられないところにいるのはつまらないな、と思いました。

後藤 二人とはもちろん、早川さんと瑞穂さんですね。

菊地 ええ。

村岡 あの当時、早川ちゃんも民芸の若者たちの精神的支柱であつた。民芸は多公演で実験的な舞台をも含めて、年間10本もやるような時期で、その中で、若手の俳優

たちは、早川ちゃんの公演につきたい、つまり、民芸の代表的なレパートリーは早川ちゃんがやる作品しかないだろうというぐらいの思いがあった。それだけ、早川ちゃんの存在は民芸の中でも期待されていたといってもいいんです。

だから総務や幹部としても活躍していたんです。それが、神戸の劇団で演出していた時に、宇野さんから突然、帰って来いといわれたが、本番三日前で、その要請を拒否したら、総務という大きなポジションを降ろされ、次第に劇団内での居場所を失っていったんです。

後藤 例えば、『郡上の立百姓』、中国訪日公演にも選ばれた作品ね、それから『ゼロの記録』、『あゝ、野麦峠』、『狼』、『無頼官軍』、こう見てくると、早川さんの仕事は民芸の代表的作品の一面を担ってき

ており、かつ民衆的な意味での作品を次々と創ってきたわけですよ。ね。

飯田 『あゝ、野麦峠』では、舞台監督をいただいて、台本作成の段階から早川宅と大橋喜一さんの家を往復して原稿を運ぶ役から、上演に際しては、九州から北海道まで丸一年巡演でした。民芸在籍中で、この作品が最高だと思っています。この時に、繰り返し言っておられたのは、群衆劇のつくり方で、『クボちゃん』はと親しみを込めてしゃべっていました。

後藤 「クボちゃん」とは『火山灰地』の久保栄ですね。

飯田 そうです。久保栄の教えを真に受けとめ、学ばれて来たんです。群衆場面をいくつかのピースに分けて細かく一つ一つ創っていく。あまりの稽古好きから早川ケイコフスキーと言われてましたね。『ク

ボちゃん』だったらこうやるとか手とり足とり教わりましたね。今だに私の財産になっています。

後藤 久保さんと早川さんはどういう接触があったんですか。

飯田 久保さんの演出助手をやっていたと、聞きました。

久保栄さんから引き継いだ「民衆性」

後藤 早川さんの芸術上の特徴の一つである民衆性は久保さんから引き継いでいるんでしょうね。

境野 吉田一さんの著で久保栄『火山灰地』を読むの中に、演劇が集団芸術であり、アンサンブルが必要。しかもアンサンブルを舞台の結果としてでなく、稽古の全過程のなかで要求し、スタッフなど劇場関係者のすみずみにまで、創造の仕事に不可欠な要素としての創



乾杯の音頭をとるありし日の早川さん
京浜協同劇団稽古場で

造的理論を求めたのも久保栄であるといえますね。

久保栄の作品（『火山灰地』など）に、集団場面が多いというところは、アンサンブルによってスペクタクル、ドラマが展開するといふ、彼の強い認識の証左である。と記しています。これは、「スタニスラフスキ・システムと久保栄」という表題ですが、みなさんの話で、ふっと思ひ出しまして、早川さんが受けた影響はこのへんにもあったように思いますね。

村岡 創造的精神的支柱は久保さんから来ている。それから粘っこい演出ね、これは岡倉士朗の影響もあります。

飯田 それから、台本が完成して、キャスティングが固まれば芝居づくりの8割方、出来上ったものだ。だから俺は本直しだ、と言って、劇団さつぽろの『明日をよぶ娘たち』でも、京都の合同公演の時も、助手の私に稽古をまかせて、台本直しに熱中してましたね。だいたい、稽古場で演技指導するとか、台本の解釈をしゃべるのは微微たるもんでいいんだ。役者が台本を読んで役を産み出すんだ。その役者の産婆役に徹すればいい。私は今でも影響を受けてますよ。

それとね、稽古場でなんでサングラスをかけてんだと言った時、俺がおもしろいとか、つまらないとやっていたら役者は動揺する、

だから表情を見せないようにしている、おもしろくても笑わないんだ。

菊地 笑わないわね、憎たらしいくらい（笑う）。

境野 『二つの月曜日……』では本直しはどのように。

飯田 訳本は僕と早川さんというところになっていますが、多少英語が出来るといって、翻訳をやれと、早川さんが横にいて解釈の違いなどを指摘されました。まア、ミラーの作品としてはおもしろいと思わなかったんですが、それが見事に青春ドラマとして、わかりやすい舞台に出来上っていたし、役者が立ち上がるなかでよりよくなっていたと思いますね。

境野 労働者の極めて日常性での人間の触れあい結びつきを描いているリアリズムな舞台だと思いましたね。

岩手県沢内村を描いた『燃える雪』で全国展開

菊地 当時、『炎の人』『円空入定考』の上演を終えて赤字でひっくり返りそうな状態になった。そこで、もう一度、劇団民主主義を考えなければならぬ段階だと。そのために読んでみないかと出されたのが岩手県沢内村を描いた『村長ありき』。

その時にはすでに早川さんも、同調した森幹太さんも劇化したいという下心があったんだけれど、今すぐという短絡的なことでなく、劇団の危機を乗りこえるために、もっと民主的な方法と考え方があるか我々は考えよう、その一つのヒントとして『村長ありき』を読もうと提案があり、みんな読んで読んで。それで一番熱心だ

った大峰順二が、すぐバイクを飛ばして沢内村に取材に入った。

若い人たちのなかには、今さらこんな貧乏話をやらなきゃならぬの、という声も事実あった。私なんかもなかなか答が出ないし、迷っていたけど、現代の日本にとつて、この村のことを広くお伝えしてまわれればいいなという気持ちが高まってきた。大峰さんの方は村の人たちと会ったりしながら、脚本を進めていった。それでもすぐに本が出来たわけではない、大峰さんから出された本をみんな読んで読み、きびしい指摘がなされ、改稿がかさねられ、おもしろいものになってきたんです。

日本中を上演して、どこの劇場も満員で、こういう展開になるとは思いもよらなかった。私たちこそ知らなかったけれど、沢内村から学ぼうという動きは各地にあっ



東会議ゼミ（創作部会）左端が早川さん

後藤 宇野さんのもとで培われた民衆性というか、その方向が、それがやがて銅鑼の創造路線に発展していったんじゃないでしょうか。そうになっている。一口で言えませんが、国民の立場に立った演劇……。そこで具体的には、『燃える雪』での創作過程を含めた話をお願いできませんかね。

たんですね。特に、生活協同組合医療部会では課題の一つとして『村長ありき』を必読本としてとり上げていたんです。もう一つは、劇団員の谷田川がバイト先に生活協同組合の人が来られるので、パンフレットにのせる文章を書いてくれる人をお願いしたら、医療部会の人に話が通り、そこから全国30カ所の医療部会に発信されたんです。民医連などを中心に医者や看護婦さんたちにも広がり、患者にもという具合に、その30カ所でも上演され、さらに口コミで広がり全国的上演（200ステージ）になりました。

飯田 今、菊地さんの話を聞いて、『あゝ、野麦峠』の時も感じていました。沢内村で起こったことは沢内村だけでなく、俺の所でも沢内村は存在していた、これは私のための芝居なんだという共感が

生まれたんです。こういう作品を生みだせるということは素敵なことです。

村岡 『燃える雪』は言ってみれば、雪、貧困、病氣、この三つを村人たちが力を合わせて乗りこえていく。これが沖縄に行った時、雪が「台風」に変わっていく。つまり、この機会に自分たちの立場、生活の場のなかで考える、そして共感が生まれる。それが早川さんの創造の質だと言える。さらに本質的な考え方として、中心には自由民権思想があったと思います。創造理念と劇団づくりが表裏一体である以上、組織・創造において民主主義であることの必要を一貫して強く求めてきた人だと思っています。後藤 さて、次に『西風に起つ』で早川さんの仕事について触れていきましよう。川村さんは村長という重要な役で活躍してきたわけ

ですから。この公演の創作過程とか、作者の亀井淳さんとの係わりも語ってもらえませんか。

『西風に起つ』での
早川さんの仕事

川村 創造的問題として、なにを得たかということより、120人の人たちが参加する合同公演ですから、各集団の違いがあり、いろんな価値観や方法がある中で一つにまとめていく努力と、作者とのくいちがいをどううめ、接点をつくっていくか、いくつかの困難を乗り越えていくための、早川さんの責任は大きかったと思つたし、その大変さが印象として強いですね。演出部会などを設けて集団討議を重ねてきたしね。専門劇団と地域劇団では条件が違ふし、フリーのプロの俳優さんたちも参加

していただいて、稽古もスケジュールの調整や分散稽古等、お互いにエネルギーが必要だった。

境野 早川さんが『ドキュメント三宅島』を出し、劇化を亀井淳さんにお願いと提案されました。

川村 劇化の段階で作品はどうなるか未知の問題を含んでいましたが、三宅島の人々の明るくたくましかったかと自然を守ろうとする生活観がこの本をやる一致点だと思ひましたね。

後藤 私は公演を終えてのまとめでも報告しましたが、三宅島のたかいは、平和を守り、自然を守り、自治権を確立するたたかいであり、つまりはこの日本、ひいてはその一自治体である三宅島を支配しようとしている日米軍事同盟に対する抵抗でもあったように思います。そこでは作者の亀井さんも早川さんも平和を希う島の人々の



『西風に起つ』の三宅島公演での舞台

現実生活をも真正面にすえて、しかも日本の国民的立場で闘いを闘くという、合同公演にふさわしい作品にしていたと思いますね。

村岡 『燃える雪』での、「村長ありき」の提起、三宅島の提起も早

川さんには一貫性がありますね。つまり、現実に生きた人間のたたかい、民衆を素材にしようとする志向があると思います。

境野 作者・亀井さんとのくいちが

いについてはひとことだけ触れまします。亀井さんが『演劇会議』73号(89年12月)で「……つまり三宅を守るカンパニアとしては一定の成果があった。けれども三宅の人々の「心」を深くとらえ、新しい状況の中で人間を描くという芸術的表現として非常に不十分だった、というのが私のいう「よかった」の内容である」と記しています。

亀井さんの思考は、自然体である三宅島であり、島のたたかひに万に一つの不利をもたらすことのないものの責任であるし、あまり演劇的な立ち入りをしたくない考え方だと思ふんです。その中で作者との接点を見つけようとする努力

と工夫が我々の側に十分であったかということは課題として残ったと思います。

後藤 いや、いろんなことは作者亀井さんとの間ばかりでなく、全リ演劇東ブロックの参加者の間でもそれぞれ劇団の成り立ちも、考えも、創造方法も個性ゆたかな人たち、劇団の合同ですから、実際のいろいろありましたし、次々と難題もおこりました。しかし、早川さんの偉いのは、困難がたちはだかれば、たちはだかるその困難に正面からぶつかって、三宅島の人たちが知恵と団結の力でそれをのりこえていった、その原点に、みんなを立て、島の人たちの闘いに学びながら、主題の積極性をみんなのものにしていく、そのパッションはほんとうにすごかった。だからあれだけのお客さんを集め、あれだけの公演がうてたのだと、

今も熱い思いが蘇ってくる。
境野 早川さんの人柄（笑わない、怒らない）でなければなせなかったらうと今でも思います。

後藤 いろいろと話していただきたのですが、ここで一つだけ。

いつだったか城谷事務局長から、今、東京へ避難している三宅の人たちを慰問できないかという提案があったんです。

境野 実は、石るつでは避難前に三宅の支援の意味で、「くさや」を仕入れて販売をしたんです。関東ブロックの人たちも協力していたきました。

後藤 私とこの青年劇場では、若者たちが、先日、三宅の子どもたちが集団で避難している秋川高校へ、カンパを持って激励にいったきたようですが、三宅の『西風に起つ』で大変お世話にもなった私たち、城谷さんの腹話術の相棒・

ゴローちゃんを先頭に何かやれないかねえ。

演劇人の戦争責任を常に考えていた

境野 そうですね。私たちにできることを考えていきましょう。それから最後に早川編集長の課した役割に少し触れたいと思います。早川さんは、戦前、戦中そして戦後にわたって演劇人の戦争責任を常に考えていましたね。それが戦後50年を節目に、私の戦争責任―敗戦50周年を迎えーのシリーズになったわけですね。戦後演劇史の中でこの問題が欠落しているという認識なんですね。これも久保栄に共鳴していた早川さんを感じます。とにかく、敗戦50周年というタイトルは、「戦争」が「風化」されつつある今日、早川さんの危機

意識として同時に重なってたように思えます。そして、リアリズム論シリーズにつながっていったといえるし、このシリーズの価値は大きいと言えるでしょう。それと全リ演外での地域演劇の掘り起しと、若い世代への広がりを見守って、若い世代への広がりを切望してました。

後藤 限られたこの時間の中では、語りつくせないとは思いますが、これで終わります。このあと、銅鑼の亡くなられた森幹太さんの偲ぶ会がありまして、この雪の中移動するわけですが、ともあれ、これを契機に、それぞれ、早川さんとかかわり合いの中で感じたもの、得たことを大切にして、今後の私たちの活動に大いに役立てていきたいものです。では皆さん、お忙しい中、大雪の中、ほんとうにご苦労さまでした。

（文責・境野）

『演劇会議』89号から104号の

「リアリズムシリーズ」を読んで

劇作家 長谷川 伸二

はじめに

K氏から年賀状を頂いた。昨年の活動状況を述べた後に「新しい時代に演劇は何ができるでしょうか？」と書かれていた。K氏は全日本リアリズム演劇会議（以下全リ演という）のなかでリアリズム演劇についての提言をし、また劇作家、演出家でもあり、特に地域における活動を大切にしている。わたしは瞬間「ドキッ」とした。21世紀のリアリズム演劇を悲観的か楽観的にみているのか、氏の日常活動からなぜこんな言葉が出て来たのか、不思議な思いと苦悩を感じた。45年前、プレヒトの「今日の世界は演劇によって再現できるか」という文と結びついた。大橋喜一（以下敬称を略す）と同じように、労働者出身で、しかも闘病生活を口実に創作や劇団活動も

ままならないが「リアリズム演劇」について考えを学んでみることにした。

37、38年前から西・東リ演、さらに81年に全リ演が組織されている以上、リアリズム演劇について論議するのは当然なんだが、95年から「今日のリアリズムシリーズ」（機関誌、『演劇会議』89号・95年発刊）として各氏各論が展開された。手掛りに通読、要約し検索してみるのも無駄ではないと思う。組織や劇団も30、40年も経てば政治、経済などの激変とともに、知らなかったこと、考え方や理解できないことが当然あり、若い劇団員もそうだろうと思われる。

幸い新劇の歴史やユニークな各論からリアリズム演劇を再認識し、現実を行動でいきいきと蘇えさせ得ると思われる。編集子もこのシリーズが好評だと自賛されてい

ることだから。

1. 新しい時代に演劇は何かできるか

20世紀は科学の発展や戦争による人間性崩壊の時代で、およそ文化であるとか自由、民主などなかったといえる。そのなかで演劇界はどうだったのか、特に新劇の経って来た道は極論すれば反体制ではなかったか。ソ連邦や欧州の影響を受け、社会主義リアリズム演劇を時代の変化とともに内部葛藤しながら歩んで来た。

「典型的境遇のもとに典型的性格を描く」というリアリスチックな態度によってブルジョアジーの勝利を描き出している批判的リアリズムを超える創作方法を規定したのが社会主義リアリズムといわれた。また進歩的演劇の内側は、戦前の世界観、芸術認識から一歩も出ていなかった、主題や題材ばかりに目を向けがち、テーマ主義というしろものである。リアリズム演劇のスローガンはイリユージョンでしかないと言います。問題はリアリズムか反リアリズムか、二元対立を説いて来たことにあり、むしろ積極的にリアリズム演劇なんものでは実は存在しないと認識すべきなのです」(91号野村喬)。

この意見にはさすがリアリズム演劇を發展させようという人たちから反論があった。現在の演劇界では、歌舞伎、

狂言、小劇場などが一部の新聞やジャーナリストにより喧伝され、新劇はおもしろくない、こむづかしい理屈を並べたてばかりだということを聞かされる。現実集客にも苦勞している。リアリズム演劇は演劇界の一派で主流ではないと言ええる。これでは明日(21世紀)どころかさらに衰弱しかねない。先輩たちや現在活動している人たちが必死になって活路を見出そうとしている、本来、リアリズム演劇は「混沌のなかに演劇芸術は生きた人間の葛藤を描きその背後に時代の歴史を具体的に表現させるものである」(89号大橋喜一)。今世紀は国際化、個性、人間の心、情報などと言われている。全リ演も総会での提言で、地域に根ざした活動や創作の創造活動の重要性を述べており、現に市町村ぐるみの活動に成功しているし、創造も実行委員会のもと地域の人たちとともに上演行動をしている、またその途上の劇団もある。こうした活動が真のリアリズム演劇を着実に發展させるものと言える。

95年東リ演総会の基調報告では次のように述べられている。われわれの文化運動は、①21世紀は国際化と文化の世紀といわれている。現代を抽象的にとらえるか、具象的にとらえるかは自分の劇団の観客との関係でとらえなければならぬ、他の流派のものから刺激を受け劇団

を支える地域の観客のためのリアリズム演劇を創りださねばならない。②劇団の中身が強くなり創造力を高め、観客に説得力ある本が求められている。文化フォーラムで「文化会館、公会堂など建物の中身は劇団関係われわれが主人公だ」と言うことだ(こばやしひろし)。また西リ演総会でも「リアリズム研究会」が提案採択された。

ブレヒトの言葉を付け加えるならば、「今日の世界、人間の今日の共同生活を演劇の視野にとらえる試みで叙事的演技方法が問題の解決をするとはいえないが、今日の世界は、それをひとつの変化する世界として記述する場合にのみ、今日の人間にも記述できる、それをとらえさえすれば、劇場においても可能だということです」(今日の世界は演劇によって再現できるか)(要約)。

2. リアリズム演劇を考えてみよう

「演劇会誌」に掲載された今までのシリーズを読むことによってある程度リアリズム演劇の輪郭がつかめるの

に要約してみようと思う。
リアリズム演劇とはなにか(99号市川明)。リアリズム演劇とは「現実の客観的な再現を目指す演劇である」。そのために4つの指標をたてそれを満たせば理想のリア

リズム演劇となる。①現実の客観的な再現、生き生きした形象、②作者の現実解釈と特徴描写、③民衆的視点で描かれた民衆の日常、④政治参加の志向、である。「あるべき姿ではなく、ありのままの姿」を描くのがリアリズムの基本であり、大切なことは現実を観察する力である。またリアリズムは抽象芸術を排除するものではない、作者の現代的視点が要求される。リアリズムは純粹芸術的概念でなく「政治的、哲学的、実践的概念なのだ。①②③の指標が満たされていれば、④はリアリズム演劇の特性でありリアリズム演劇にしか生み出しえないものである」と述べている。比較的まとまって理解できると思うがいざ実践となるとむづかしいのではない。現実には毎号掲載されている本なり、演目から伺いとれないものも見受けられる。

またこんな意見もある。

リアリズムも時代とともに(101号江原吉博)。「リアリティは日本語で、真実味、本当らしさ、現実性、迫真力でしようか、時代の制約を超え、絶対普遍の価値を持つ演劇があるとは思えないし、制約を超えられない。形式でなく、自分がその世界に、その人物に真実味を感じられるかどうかです。観客にどんな意味を持つのか、どんな効果を発揮し得るのかということです。芝居は時

代とともに消えていく消耗品だと思うとともに、いつの時代とも向き合い、時代と生き活きと関わっていてこそ存在意義も出てくる。心に真実を感じさせる演劇をリアリズムと呼びたいし、演劇にあえてリアリズムという呼び方はいらない。演劇はただ「演劇」と呼んでおけば充分なのだと思う。

われわれリアリズム演劇を志向するものにとって謙虚に受けとめるが、小劇場や現在話題の静かな演劇をリアリズム演劇とは思わない。リアリズム演劇が、多様な面を持つているが混迷のなかにいることは間違いないと思う。全リ演はあらゆる機会を通して飛躍しようと努力している。提言、提案をみてみよう。

「足下が崩れた時代のリアリズム演劇」(92号栗原省、西会議総会)。リアリズムは現実認識の視点で「手法は多様である。社会主義リアリズム論の誤りを明確にし、狭い政治、テーマ主義とは無縁有害でありその残滓は克服されていない、自然主義とリアリズムの違い、劇団の歴史に即し演出、演技でのリアリティ追求の方法を具体的に論議する、創造と観客の関係を芝居のおもしろさ、楽しさを両面から深める」。

また、演劇論、運動とリアリティについてのメモとして全リ演(81・8)は地域に根ざした国民の民主的な運

ている。「リアリズムを標榜している芝居や劇団では発想が縮こまり、現実には癒着しすぎている、事実に対する作者の解釈も浅すぎおもしろいとは思えない。テーマ密着しすぎ、現実を公式定義的に解釈していないか、事実を追いつき、受けを狙いすぎではないか、そういったリアリズムから、いかに自由であるか、むしろ自由であることよってのみおもしろい舞台は創れるのではないかと考えた。リアリズムを古めかしい言葉にしてしまったのは、せまい意味で方法論としてとらえすぎたからであるまいか、より広い思想としてとらえるべきではなかったか、思想は手法を選択する、しかし、芸術創造に決められた手法はないのだ、芝居を創造するというのはリアリズムする行為であり、自由と同義語なのだ」。

「リアリズムのテキストの問題」(102号岩淵達治)でこうも述べている。「最近ポストモダン演劇」という流行語からポストドラマの演劇「ストーリーをもつドラマ、作品のテーマ、性格を備えた人物、役、行動の動機づけ」などを一切否定するような演劇の時代が到来するということだが、これはもはやリアリズムだとは思わない。不条理劇とプレヒト劇の基本的な違いは、不条理劇に明確な時代設定や人物の職業、背景などが欠落していることだ、将来の演劇はプレヒトあるいは不条理劇(ま

動と結びついたリアリズム演劇の創造、普及を目指す劇団の集まりと呼ばれている。地域演劇を出発点としたことから、「リアリズム演劇と舞台創造でのリアリティの源泉は地域の人々の暮らし、生きてきた人生、環境、嗜好、身振り、演技など、地域の観客の現実こそが演劇行動をかりたて、この姿勢がリアリズム演劇を志向させている」「リアリズム演劇」の否定面が9項にまとめられているが、その一つを紹介すると「抽象的な作品は観念劇、具象ならリアリズムという思い込みはないか?」

リアリズムにこそ抽象行為が必要なのに」と述べている。「今、考えていることー広島とルネッサンス」(90号猿渡公一)の中で「近代国家と向い合うものは、理念に對して感性であり、国家に對して個性をもった都市あるいは地域である。地域において観客と演劇人が共同して生み出す濃密な劇場空間という生活空間における広場の存在が必要である。リアリズムは写実主義だけでなく抽象とリアリズムとの関係はどうなのかを深めていきたい。リアリズムの態度とは現実そのものの中から現実的に学ぶ態度が必要で、表現であるより、物の見方、認識の視点でリアリズムを考えてみたい」。

こう言ったリアリズム演劇の思考や現状認識を芳地隆介は(103号)「手法的思想と思想的手法」でこう述べて

たはその総合」という見取り図が示されているが、不条理劇はリアリズムではない。

今までいろいろとリアリズム演劇について各論をみてきたが、自分を振り返って、50年代から何らかの形で新劇と関わってきたりかかりはスタニスラフスキー・システム(以下スタ・システムという)であった。それを抜きにして芝居は語れないし、リアリズム演劇についてもそのなかから多くのことを学んだと思う。

3. リアリズム? 「スタ・システム」

「スタ・システム」の見直しから(93・95号中本信幸)の記述から要約したい。

「戦後のシステムは「近代俳優術」(千田)「俳優修業」(スタ)「叙事的演劇」(プレヒト)「不条理劇」となる。スタ・システムの演出、演技論は、演じてみせるものではなく舞台で生きるのだというリアリズムの基本理念を理論的実践的に体系づけたもので、近代写実主義の方法の集大成がリアリズム演劇発展に大きな影響をもたらした」(河竹登志夫)。を引用しながら、スタ・システムの到達点として「超課題」や「交流」とともに「身体行動」の原理をあげているが、主観的心理主義の残滓を洗いおとしていった。小劇場、不条理劇など最近では新劇との



略 歴

- 1932年 大阪市に生まれる
 1951年 都島工業高校で演劇活動、卒業後通信省（現NTT）技術員
 1953年 労働運動、演劇活動に入る。演劇集団「へちま」結成
 1958年 演劇活動（演劇講座開始—大岡欽治）
 1961年 でんでん虫（蝸牛）創作上演（以下同様）
 1962年 異常点物語
 1963年 零余子（むかご）共働きの記録（全電通文化、総評文化入選、関西新劇合同公演他）
 1964年 たいこ腹
 1966年 怒りのウィンチ（自演連合同公演）
 1970年 迂回路（テアトロ、シナリオ学校誌掲載）
 1972年 検査官（シリーズとして2本）
 1977年 よろしやんの山河（東京公演含む）
 1980年 井原西鶴より抜粋—幕劇
 1987年 NTT退社 病氣療養中
 1995年 一休外伝（プロデュース新劇合同公演）
 1996年 劇団大阪 劇団員（西日本劇作家の会会員）

「2000年総会にあたって」（104号仲武司）にこれらの活動指針が述べられている。小見出しだけを拾うことでその意をくみとってもらいたい。「豊かな物質文明と先の見えない不安」のなかで「人間の讃歌を共感しうる舞台創造」をつくらうのではないか、そのため劇団が地域住民の生きる姿を創造の土壌として自覚的にとらえる論議を積み重ねよう。「強固な創造主体が構築できるかどうか」と問いかけながら、「圧倒的な悪しき状況、条件の中で人間のあり方を舞台に託し、観客の共感を求める努力をしよう、地域における文化コミュニケーションや

パブリックシアターの構築に至る道筋には極めて困難さがつきまとう。さらに作家も劇団の創造的な関係も運動の柱として深め合いたい。最後になるが鈴木瑞穂の俳優人生（103・104号）から、彼のこんな言を伝えておこう。「人間がよく描かれたやりがいのあるもの、意味はあまりないが楽しいもので自分の幅が広がるもの、戦争を賛美したりただ現状を肯定して満足しているものや歴史の歯車を逆転させようとする意図の見えるものは絶対にやらない」。各論者の誤要約にはおわびします。

垣根が消え「リアリズム回帰」現象にあるが「徹底してリアルな緊迫した心理描写やすべて普段のままで話し言葉も日常の断片である印象を与える点では新劇とそれほど大きな違いがあるとは思えない。新劇自身が基本であるスタ・システム、を置き忘れていた。「身体的行動の方法」が忘れさられたのである。この方法は感情に働きかけ、この行動に相応する感情を呼び覚ますための鍵盤であるその根幹として「無対象行動」を重要視したことである。プレヒトも「身体的行動についてのスタ理論は新しい演劇に対するいちばん重要な貢献だといえよう、この理論をソヴェトの生活とその唯物論的傾向に影響されながら完成した」と言っており、スタ・システムを本気で読みかえし、舞台のリアリズムとはなにか、考えてみようではないか。と提言している。

4. リアリズム演劇の発展のために

東・西リ演が結成されて38年、全リ演となつて19年と

なり約69集団が参加する歴史をもっている。現在の日本の政治、経済、文化の状況は想像を絶する以上に深刻で世紀末を感じさせるような矛盾のなかで閉塞している。だからこそリアリズム演劇の果さなければならぬ場があるというものだ。全国の文化会館やホールが約1800カ所存在するがその中味は三分の一ほどだろうし演劇が上演されたのは微々たるものだろう。われわれがそれを埋め主人公になる日はかなり遠い。全リ演総会での基調報告や提言で地域に根ざした活動、そのための創作、真に民主的で豊かな人間生活を指向した上演活動を、と述べられている。そうした劇団は少ない。

「今日の創造のために」（97号早川昭二）。リアリズム、それは「現実とそっくり」ということから相当自由に飛躍できる。作者、俳優も主体的で自由な発想ができる。そこで観客との間に新鮮な交流が生まれるってことだ、また既成の枠から出ること、「芝居っぽさ」を逆に取る「捨象」するってことがリアリズムのもつとも素朴な第一歩だと思う。カラダを動かすことから कोरोナリ感性を聞いていく段階を経ないと創造の場にならない」、と述べているが、あえて取りあげたのはリアリズム演劇の多様性、広さを正しく理解しよう、これからの指標としたいからである。

第19回北海道演劇祭 in オホーツク 「ハツカのまち演劇祭」に感激いっぱい

全リ演議長団 後藤 陽吉

久しぶり北海道の大地で、そこに根づいている舞台に接することができた。その感慨が半年を経ようとしている今も私を興奮させてやまない。私が属する1964年創立の青年劇場も、設立して間もなくから、北海道でシェイクスピアの作品による高校巡演で、また北海道の劇作家の大御所、本山節彌先生の『オホーツクの女』、白鳥事件の無実への闘いを母と子での情愛で綴った『国治を返せ』等々の公演を通して、劇団建設の足腰をきたえさせられたのである。いや鍛えさせられたというより、北海道という大地と、そこに生きる人々の生活と闘いから否応なく影響され学ばされていたのである。

今でこそ広範な、様々な演劇要求にこたえるべく、舞台形象も多様化しないわけにはいかないが、私が北海道から学んだものは、そして最も大切に思うものは、人間と社会の解放、幸せを求めて止まない人間の飽くなき闘いではなからうかと思えるのである。だから私はもとより、青年劇場の創立メンバーは、北海道を今もって第二の故郷と言ってはばからないのである。

その北海道——時には巡演途上稽古させていただいたり、泊めていただいたり、時にはそここの学校や地域への芝居の売りこみに力を貸していただいたりした、北見、その北見の主、劇団河童の扇谷さんご夫妻

の地元で催される演劇祭とあっては、なにをさておいても馳せ参じたという次第である。

さて道演集から私に求められたのは演劇祭の劇評もその一つであったが、「ハツカのまち演劇祭」の速報I・II・IIIに北海道の名だたる方々がすでに書いておられるし、それには鑑賞直後にインタビューしたものであろう、市民の臨場感あふれた感想も収録されており、評論などには縁遠い、しがたない役者の端くれとしては、ゴカンベンねがうより他ない。ただ当日、講評を求められて言ったことは月日を経た今も変わりはない。短兵急な表現だが、実に多彩だったあの一つ一つの舞台を、一言で言うのは憎越に過ぎると思うが、代表させて、象徴的な意味で言うなら、劇団新芸「小樽 運河 桜坂」には北海道の《潮のにおい》が色濃くあったということである。

話に聞けば、大内家の当主《弘作》

を演じた鹿角優一さんは、当局による国鉄の分割、民営化の暴挙と闘い、今も闘っておられる全労務の労働者だとのこと。舞台は海運の世界だが、範疇こそちがえ、彼が今日おかれている環境は、当局の支配下で共通するところがあり、そこでの矛盾点、そこでの彼の生活と闘いの反映の故であろう《弘作》の形象に、極めて説得性ある実在感をもたしめていたように思う。そこでは相手役にもその葛藤が及んだであろうし、作者や演出の示唆も、この日本の現実の上に適切に生き生きと作用していったにちがいない。

こんなことを、言うのも記すのも、おこがましくも思いテレもするが、許されたい。

ではここで、各劇団の作品を観劇しての一言……

劇団河童『当り前の風景』

まさに今の時代の社会での問題を前面に押し出したアクチュアルな主題。しかも予想だにしないほどの多くの市民の参加を舞台いっぱいにて得て、初めて舞台に立った人たちがどういう感想をもたれたか、あの人たちの今後の結びつきが楽しみであるし、あのすばらしい文化ホールを市民のものにしていく上で、積極的な実験でもあったのでは。

劇団風の子北海道『マレーンと雨姫』

劇団風の子は、東京でも親しい劇団の一つで、子供たちとの対応の仕方など、私たちは常々学ばされている。ともかく、あの音楽ホール全体を生きた空間で満たしてくれた。

劇団海鳴り『鉄道員(ぼっぼや)』

私は京浜協同劇団の初演を観て感極まった一人であるのだが、海鳴り

のそれはやはり道産子の舞台、遠慮がちのセリフまわしではあったが、言葉に、私などとても真似ることもできない、北海道ならではのイントネーション、それだけで一味も二味も北海道での物語りになっていくのであった。少女の素直な立ち居振る舞いが良かった。

劇団さつぽろ『やまんばのにしき』
ダイナミックな『常紋トンネル』

で東京人の度肝を抜いた劇団さつぽろのもう一つの顔。端野町のグリーンホール、中学校の学校公演も兼ねた舞台。生徒さんともどもお客さんを民話の世界に引き連れていった。私は、同じように中高生を相手に公演する自分の劇団の仕事をしのびながら、広い北海道のあちこちで果敢に活動するさつぽろの仲間、熱い連帯を感じ、「ご苦労さん」と声をかけたいほどであった。

劇団ねぎぼうず『郵便配達夫の恋』

青年団演劇の流れをくむ劇団と聞いて即座に親近感を覚えた。というのは、日本青年団協議会が催す演劇コンクールに、わが青年劇場から毎度、審査員が派遣されているからである。それに今回の演劇祭は北見市と端野町の二つの自治体がわがこととして物心両面で多大な後援をしておられるのだが、その一方の端野町の町長田中誠氏は、青年の演劇活動復活のため72年ねぎぼうずを結成、以来、作品をも手掛けているのだという。川村光夫さんのいらっしやる湯田町もそうだが、町長が自らかわっている端野町だから、ホールも、お芝居するのにもってこいの設備と空間をそなえていた。素直な芝居をされたねぎぼうずの、町の人々とのこれからのつながりが楽しみである。

劇団湖『冬の提灯・第三話』

居酒屋「桂」、これがセットかと思ひ紛うほどの装置、そこへ立ち寄る常連たち、かすべやお燗のついた酒が鼻をつく感じである。私もちよつと失礼して一緒に一杯ひっかけたい気持ちにかられた。年季の入った芝居で、私など足もとにも及ばないと心底思った。この芝居、次の第四話まで用意されているとか、いやはや。

斜里の劇団みずなら『ゴジラ』

札幌の鈴木喜三夫さんが演出指導に当たられたという。出演者のひたむきさがうれしかった。劇団も産声を上げて三年だというが、ぜひこの人たちによって、知床ならではの創作劇をつくりあげて観て欲しいものだと思った。

札幌4劇団合同

『石川一座の旅・第五部』

澁谷健一先生の物語の展開に舌をまいたが、大向こうをうならせるような芸達者が、次から次へと登場するのはおそれいました。その一座に私の方が弟子入りしたいくらいに思った。お客さんも充分楽しませていただいたのではなからうか。

* * *

ともあれ9作品、12劇団の熱のはいった舞台。3000人を越す観客。生の芝居にうってつけの「舞台空間」必要な設備。その劇場をとりなす広大な緑と澄んだ光と空気。それにもましてその演劇祭を支えた地域の人たちの暖かいおもてなし、サポート。うれしさとありがたさがこみあげてくるような連日であった。

そして私は、北海道の大地と人間が生みだし織りなすものの尊さを見しめ、演劇の原点を大切に、あらためて思わされたのであった。

第38回東京働くものの演劇祭 観劇感想

国民文化会議元事務局長

山部 芳秀

劇団埼玉

『風・夏冬』

(原作・相沢史郎「二人爺イ」)

「風・神かくし」より)

上演台本・佐藤逸平

演出・由布木一平

二つの話が、舞台の上で平行してしまい、つながりがあるようで、ないような奇妙な感じで観てしまったが、そもそも舞台が三つに分割されたことに原因するのかもしれない。

原作を読まないで舞台に向き合ったものとしては、事情説明を聞きつつ観ていくわけで、解説的になるのはありがたいのだが、同時に劇的な感動にはマイナスになるのもやむを

えない。

まず、病院(実は老人ホームであつたらしい)にいる二人の老人だが、なぜ、どういう事情で、どういう状況でいるのか、東北訛りの二人の会話を十分ききとれなかったか、よく理解できなかった。東京から息子が迎えに来ることによって一人はわかつたが、もう一人は全然わからなかった。二人ともなかなか元気なのが印象的(元氣過ぎ)で、看護婦やその男友達とのからみもいやみなく展開しているのだが、ボケがあるようでなく、酒を飲んでもわずかで寝てしまうようではなくて、入院させられている理由がわからないのが、ひつかかった。



いまひとつは東京というより新宿だが、こっちは冒頭の「行き倒れ」の識別、監査の場があつて展開するので、「あ、人違いってやつだな」となり、Yのなりゆき、結果がどう

なるのか期待しつつ待つのだが、ダンボールハウスのさまざまや、その主たちのいろいろや、警官、ウェイトレスなどが多種多様に出てきて楽しめたし、郷里の北上との対応も無理なくなっとくできてほっとした。

しかし、こっちの方の「新宿・北上」を観てから、あの病院の方も「北上—東京—」だったのかな？ と考えると、これはちよつと無理な気がした。また病院が夏、人違いが冬というのか？ と考えると、これもわかるようにでわからない話。題名にとらわれすぎか。

冒頭の鑑別の場のための舞台の三分割だったとすれば、それをやめて二つの話をもっとつなぐ舞台にするか、「人間達え」の方だけにした方がよかったのでは……と思った。

(三百人劇場・9月30日)

演劇サークル麦の会

『黄昏』

作・アーネスト・トンプソン
演出・吉岡利根雄

たしかアメリカ映画で、男女とも名優といわれる俳優が演じて評判だった作品。そして老いを感じる人々には身近な、切実なテーマ。

だから、やりいいのか、やりにくいのか、は不明だが、「人生の生死」は万人ひとそれぞれだから、どちらともとれ、また、どんな「黄昏」なのか？ をのぞいてみたいという興味は万人共通だろう。もちろん、十分に挑戦するに足る作品である。

しかし、あまり楽しいテーマとはいえない——で、「よく採り上げたなあ」がまず第一だ。キャストとしては最ベテランの二人。演出はもちろん、自身大病を経験して、「老い」

も「死」も身近に感じ、考えただろう利根さんだからやれたのだろうが、いまでも「サークル」をなめる麦の会の面々もよく同意し、支えたなあ、というのが第二の感想だった。そして、なんかやかやあろうが、結果として「よくできましたねえ」と言いたい。

ただ、夫婦間のことはかなりよく理解できたのに対して、父と娘のわだかまりの表現が「いまひとつ」に思えたのはなぜなのか。まあ、かなりクセのある歯科医だとされる父と娘との感情のもつれなど、そう簡単に説明できまいから、いいといえいいのだが。

また、妻と母の二面を見せる夫人にしても、いわゆる「日本的」な「尽くす妻」ではない「夫婦愛」と娘の「自由」を尊重して見守る母であることが出せたのはよかった。

原作を知らないが、ラストちかく

の夫の発作で舞台を盛り上げたのはみごとに成功したが、そうしたことで歩一歩人生の結末に近づいているのを二人で確認しあうことに「愛」の深化を見せるか、若い娘夫婦やその子らの「次世代」に希望を見せて幕にするか、苦心のあったところだろう。

(麻布区民センターホール・10月13日)

演劇集団土くれ

『時の置物』

作・永井愛
演出・石塚幹雄

これはパロディなのかな、と思った。そう1960年代のテレビ・洗濯機・冷蔵庫の「三種の神器」騒ぎ。70年代の大学セクト紛争。レジャーブーム。そしていわゆるバブル景気。なかには「文学サークル」の流行りや、プロとアマ混交文化まで出てく

る。世紀末の今日からみて、戦後の「焼け跡」からの復興が朝鮮戦争で一気にすすみ、高度経済成長期になつてからの40年間の「社会・風俗」と、そのなかでの人々の浮き沈みを軽いつつでテンポよく展開してみせたもの。場面は茶の間、半分取り巻く廊下とその前の階段と、そのとなりで玄關脇の小部屋（物置）。玄關ちかくの廊下の電話。

おそらく戦災で焼けずに残った二階建ての木造家屋。戦前の学校の先生や校長という典型的な中産階級の祖父は、過去の栄光に生きるといつてもすでに二階で寝たきりの身で、その権威の残像は、なにかのサインに階段下で鳴り響き、娘の主婦を呼ぶ「音」になっているのみだ。娘は近くの主婦をなにかといえ集めて井戸端会議的だが、面倒見ている気味でいる調子者。祖父のかわりに祖母が元気で昔の自慢はするが、今日ま

でのドタバタを見ている茶の間の主。というところだが、実は「戦後民主主義」で生きてきただけに、茶の間は親も子も、近所の主婦たちも、息子の「文学壮年」のサークルにも、大学生になったばかりの孫たちに自由に使われていて、一種「舞台のなかの舞台」（そして「時の置物」）の感。そこでの入れ代わりたちかわりのうごきは、みていて飽きない「風俗史」にもなっている。

しかし、それだけに「劇中の今現在はいつなのか？」がはっきりしないのは困る。これが来年演じられたら、「20世紀はあんなふうだったのね」でかたづけられてしまいかねない。舞台上で「時」が「物」であらわされている以上、劇中の「時」はいつであり、戯曲が書かれたのはいつなのか？ 観客に知らせる必要を痛感した。

(麻布区民センターホール・10月19日)

劇団石るつ

『黙阿弥オペラ』

作・井上ひさし

演出・境野修次

おどろくべき変化だった。女性三人と男性二人はたしかに「石るつ」で見た役者だったが、あと二人の男性とともに、こんなスピード、こんなテンポでセリフをボンボンやりとりし、展開していくとは、はじめてのこととびつくりした、といってもいい。そして井上ひさしの独特のセリフまわしのおもしろさが、スピーディな展開にもかかわらずちゃんと活きているのだ。やっぱ、うまい、おもしろいなあ、で、次から次へと期待が湧く。幕末からいわゆる明治の社会になるというのは、どういうことか。どうなることか。引き込まれていく、という感じを持たされた

のも、めったにないことだった。

実はプログラムにかなりくわしく劇の展開が書かれていて、それだけでも「これはおもしろそうだ」と思わせていた。これもめったにないことで、前年の「入口と出口」の自己批判？ からか、客には親切さが大切なんだとも思わされた。

個々の役者の出来不出来をあげる気はないが、せん——東働演では、毎日毎日同じ役者でも調子が変わり、いつのどのシーンかで確かめないと違うのが普通だから——、肝心のオペラ歌手の芸者おせんが、まずまずの歌唱力を見せた。いや聴かせてくれたのには感心した。てっきり別の客演者がやるとばかり思っていたので。ホッとした。練習はいかばかりだったのか、聞きたい気がした。

「脱亜入欧」の「明治」のこと、こんな調子はいतरところにあつたにちがいない。それからざっと15

0年。国際的には「地球はせいまい」

時代だが、そして実際、若者は日常的に世界中出かけては帰ってきている時代なのだが、いやそんな時代だからこそか、こんなテンポ、こんなスピードのおもしろさは芝居のなかだけで、実際にはないようだ。いや、芝居のなかで見せてもらったのを感じしなくちゃならない、のだから。

いやいやおもしろかったよ、みんなずいぶんうまくなったねえ、ほんとおどろいたぜ、と劇場を出ながら、ひよいと時計を見たら、なにになんだ？ 9時半すぎだって？

そんなことないだろう、小屋が許してくれるわけがないよ、な、と何度も見たが9時半過ぎだ、門限（老人用）に間に合うかどうか、どつと心配になった。といつてどこが削れるか。まったくわからないのだが、すこし短くして欲しい。

（深川江戸資料館小劇場・11月17日）

劇団新芸座

『セチュアンの善人』

作・ベルトルト・ブレヒト

演出・赤沢勇次

やはり、本格的な舞台はいいなあ、ちがうなあ、と声をだして言いたかった。もちろん、観客の入りは仕方がない。まんなかだけに集中してしまふ。もったいないなあ。舞台がいと、役者も乗るんじゃないか、調子が出るんじゃないか。みな、うまいじゃないの。いつもは見えない役者ばかりだけど、うまいね。回り舞台があるとこんなにできるんだ、高いセットもあつと言ふ間につくったり、ばらしたりできる。

とてもわかりやすい、いい芝居だった。お客さんも気持ちよく見ていて、途中で拍手なんかするじゃないか。ま、いいか、前進座劇場だもん

な。花道はないけど、使ってもいいんじゃないか、などと勝手な思いで楽しくみてしまった。

舞台は広いのをよく使いこなしたと思う。裏の人手も相当かかったろう。しかし、それだけのことはあつた。ラストシーンなんぞも、大変な高さでモクモクと雲（煙）をだして、みごと成功。いや「よくできました」という感じで、拍手鳴りやまず、だった。

しかし、中だるみした感じがあつて、専門家にきくと、いろいろカットしていたが、おもしろいところが出てこないのがつかりしたという。たとえば、シエンテがみごもっていて、おなかの胎児にささやくシーンなど、とても感動的だったの

にカットされていた、という。神様の扱い方も十分とか。そういわれるとそうだろうな、と思わされた。それに、もつと大切なことを指摘された。翻訳はだれのを使ったか、だ。千田さん、岩淵さん、加藤衛さんなどのどれか、劇団の新訳ならそれと明確にする必要がある。これは、重要な指摘だった。

（前進座劇場・12月1日）

秋田雨雀・土方与志記念
青年劇場
付属養成所
2001年度第33期生
生徒募集
少人数制で基礎から充実した教育。
18歳から25歳まで、
昼間1年制（月～金の週5日制）。
〈試験日〉 4月15日（日）
〈会場〉 青年劇場稽古場
▼詳細はお問い合わせ下さい▼
青年劇場付属養成所事務局
〒160-0022東京都新宿区新宿2-9-20 四ツ川ビル4階
TEL.03(3352)7054 FAX.03(3352)9418

今、シニア（高齢者）の人々が熱い

（シニア演劇探険塾「劇団あしたば」）（静岡市）

劇団静芸 山崎 三郎

ふと、東会議の運営委員会で、湯田でのブレ企画「高齢者演劇」の演出をした中野健氏と、静岡での高齢者劇団誕生の話をしていたら、岩手と静岡と遠く離れているのにあまりにも、似ていることにびっくりした。それを聞いていたみんなに言われて報告を書くことになった。

静岡市西部公民館主催事業で「シニアのための演劇講座」が2カ月、7回で開かれたのは2年前のことだった。この講座を担当したのが静芸の私（山崎）であった。

高齢者の人たちは、子どももみんな自立し、自分の時間が持てるようになった。「何かやりたい」しかし、カラオケや民謡や大正琴、踊りなど

の老人向けのカルチャー講座だけでは満足できない。もっと何か充実したもの、生きがい欲しい。「生涯青春」をめざして何かをやりたい、と参加してきた。講座が終わったあと講座受講生の中からもっと芝居づくりをやりたいと熱心な話が出て、「シニア演劇探険塾、劇団あしたば」が14人で誕生した。女性ばかりで77歳から56歳、平均年齢67歳で「あしたば」のようにねばり強くやろうと1年前に、「おこんじょうるり」（さねとうあきら／作・後藤富美／脚色・晩成書房・中学演劇脚本集より）をテキストにして稽古を開始した。劇団結成以来、1カ月2〜3回（1回2時間半）の稽古を1年間続け、

2月10日（土）静岡郊外のお寺をお借りして、旗揚げ公演が終わったばかりである。本堂一杯にあふれんばかりの観客を前に、照明も装置もない黒幕を張りこみ、ござ一枚の舞台公演であった。新聞やテレビにも紹介され、観客の率直な笑いと涙につつまれ、一定の成功をおさめることができたと思っている。この公演をみて、すでに3カ所から公演依頼が舞い込んできた。

高齢者の人たちは戦前戦中に生まれ、激しくゆれ動く青春時代を生きてきた。それだけに文化的な創造活動を求める人たちがたくさんいることを私は知らされた思いである。月2〜3回の稽古を1年間、ねばり強く積み重ね、仲間のきずなを深めあい、稽古ごとに自分を脱皮して真剣に舞台づくりにとりくむ姿に、むしろ私の方が教えられ、演劇づくりの原点をみる思いがするものであつた。



（静岡新聞社撮影 2001・2）

た。

大変なのは1年かけて舞台をつくり上げることであった。最初は「台詞がおぼえられない」「人の前に立つと頭が真白」「出入が毎回分からなくなってしまう」「一つ言はれると他のことがみんな分からなくなってしまう」「大きい声が出ない」等々と本人たちの苦労はたえない。

しかし芝居づくりに真正面から向きあい、ねばり強く真剣にとりくみ「老人だからといって、みっともない姿はみせられない」と背筋をのびし、大きな声を出せる努力をし、自主稽古をあらちちらでしあい、眼を前に向け、凛としてやろうと舞台づくりに励む高齢者（シニア）の姿に新鮮な輝きと誇りをみる思いである。

月2〜3回の昼間の稽古にほとんど全員が時間を守って集まってくる。挨拶や準備、片付けもきちつと

していて、品格の高い人たちである。舞台づくりを通じて確実に一人一人がすこしずつ変わり、明るくなり、孤独にさいなまれていた高齢者が「みんなの中に仲間をみつけた!!」といった感じである。

これからどうなっていくのか、たくさんさんの不安はいっぱいあるが、何かが生まれてくるかもしれない。

昨年68歳で完全退職した私は、昼間の時間の一つをこの「シニア劇団あしたば」の人々と芝居づくりのできることに幸せを味わっている。

ふと全り演のすぐれた経験をもった人が、各地でシニアの人たちにも眼をむけ、数年後「シニア演劇フェスティバル」が開かれるようにでもなったら……と夢がひろがる思いである。

映画「郡上一揆」のロケに参加

劇団はぐるま

船渡 治郎

1

「郡上の立百姓」がとうとう映画化された。現在上映運動が全国的に展開されているが、ぴあの出口調査では満足度86点で評判も上々のようである。この話は最初山本薩夫監督が書いたとして、シナリオまで完成した。この話を見ることなく、山本監督もなくなり、立ち消えとなったのである。郡上の人々の期待が大きかっただけにがっかりだった。もう、こういう機会は二度とないのだれもが思った。

それがまたまた30年ぶりに持ち上がったのである。一つは神山監督の

情熱であり、地元郡上の熱気である。郡上は郡上踊りで全国に知られているが、独特の文化と歴史を持ち郷土愛がきわめて強いところである。一方、神山征二郎監督は岐阜の出身で今では日本を代表する映画作家といっている。代表作には「ふるさと」「忠犬ハチ公」「月光の夏」「ひめゆりの塔」等がある。その神山監督が岐阜に題材をとって「ふるさと」「さくら」を発表し評判になっていた。郡上の人々はこれを見逃さなかった。神山監督も以前から「郡上一揆」が頭にあったが、時代劇であり、農民の群衆劇になるのは当然であるので、財政的にも簡単に踏み切れないものがあつた。それを知った郡上は



動き始めた。「郡上一揆支援の会」を組織し1口10000円で募金運動に入つたのである。その運動は瞬く間に郡内に広がった。郡上郡は5万人ほどの人口であるが、なんと1万2000の人がそれに応じたのである。大変な数である。ほとんどの家が応じたといっている。

しかし、予算は5億と見積もられた。1口10000円で1万2000人といつても金額にしたら12000万である。5億にはとてもとても届かない。神山監督が映画化をこばやしに持ち込んだときこばやしは「命を縮めるよ」といふたら、「今やらないとやれない仕事だから」といふたという。監督も相当の覚悟を決めていたし、郡上の人々の情熱に感動したのだと思う。しかし、情熱だけで金は集まるものではない。予定では99年の2月ということで劇団もそれに対応するスケジュールを組んだが、1年延期となり、ようやく2000年の3月17日のクランクインにこぎ着けたのである。

無理にこぎ着けたが、その前日の支援の会の幹事会は劇的であつた。事務局から「ここ連日事務局会議を開いているが、金が思うように集まりません。俳優さんたちは集ま

2

きていますが、このままでは中止以外ありません」と絶対絶命に追いやられていた状況が説明された。一瞬声もなかったが、各団体を代表する幹事の中から、「ここでふんばらなきゃだめじゃないか。ここまで来た以上ふんばる以外にない」とだれかがいった。と思うやそれに賛同する声が出始め、幹事会全体の声となつた。それを聞いて事務局長はぼろぼろと涙を流した。

「皆さんの気持ちで再度やらしていただきます」といって頭を下げた。こうして強引にクランクインに入つていったのである。

劇団は船渡が窓口になり、助監督との交渉に当たつた。船渡は前日17日に下見に入つた。予定ロケ地を確認しながら、大和町ふれあい会館で最終的な打ち合わせをした。ここは

元小学校で体育館が衣装かつらの準備室、二階建の校舎が本部事務所であり、スタッフ60数人の3カ月の合宿所になっていた。そこでロケの日程表、香盤表をもらい、エキストラの香盤表を組まねばならない。劇団のロケ参加は3月18日から5月23日までの約2カ月である。向こうはぶつ通して撮影だが、劇団は勤務があるから向こうの希望どおりには組めない。四苦八苦だった。

苦労して組んでも突然のキャンセルがあつたり、追加要求があつたりで、助監督との電話連絡は早朝から深夜までひっきりなし。ロケが終了するまで続いた。劇団員のエキストラは撮影現場では非常に貴重な存在なのである。せりふを与えられ群衆シーンを盛り上げる役である。「はぐるまさん、こっちこっち」「はぐるまさん、はい、どうぞ」と次々声が掛かる。走り出せば先頭を走るこ



左から2人目 豪商役・浦田ひさし（劇団はぐるま）



松渡治郎（劇団はぐるま：右側）

バイトでしょう。いわれるといやいや動くだけ。いやー、驚きました。こんな経験は初めてです」
とくに4月7日からの3日間ロケはロケの中でもっともすごいシーン、歩岐島騒動のシーンである。立百姓の頭領四郎左衛門の家が足軽、寝百姓に襲われる乱闘シーンだ。雨の中4月8日は深夜まで続いた。い

んなカメラでの乱闘シーンが撮られた。田んぼの中の200人のエキストラと足軽と俳優をまじえての大乱闘。衣装の中にかっぱを仕込んでの大立ち回り。私たちの出番が終わったのは11時過ぎ。その後も少人数の撮影が続いた。冷たい、寒い、顔から下着まで泥だらけのヘトヘトの一日だった。これにも俳優は感動していた。「郷土の愛情をひしひし感じます。それなしに銭金では出来ませんよ。人間を感じますねえ。ふる

撮影に入るや地元の熱気はすごいものだった。ロケ現場のボランティアはエキストラだけでない。生協やJA、地域婦人会をはじめ自治体の全面的な支援、いや地元の熱気の中で繰り広げられたのである。何人もの町長や村長が率先してエキストラに参加した。

初日のエキストラシーンは筆訴した定次郎が藤丸庵で郡上に帰ってくるシーンだが、台本ではほんの1ページのシーンが朝から夕方遅くまで、それも一問ほどの山道に雪を敷きつめてのロケ。俳優たちには肌色



の足袋が支給されていたが、エキストラは冷や飯のみで素肌。それが老人から子どもまで約200人、だれ一人文句も言わず、1カット終わるたびに大きな拍手。驚いたというか、感動したのは俳優の方である。婦人会の接待といい、緒形直人以下あらゆる俳優が感動していた。「こんなロケは初めてですよ。東京じゃアル



ロケーションを多面的に撮るうえに、季節も夏になったり冬になったりでシナリオのどかが撮られるかほとんどのエキストラには全く分からない。

3月25日、26日の長良川河畔のロケは前日は獄門になった定次郎たちの最終のシーンである。晒し首になった定次郎たちの前にぬかずく村人をかき分け妻のかよが娘きよを抱き締めて駆け込んでくるところだが、みぞれ混じりの雨の中、空を見上げながらの繰り返しである。と思うと次の日は笠松代官所で寝返った庄屋



左から2人目 豪商役・涌田ひさし（劇団はぐるま）

バイトでしよう。いわれるといやいや動くだけ。いやー、驚きました。こんな経験は初めてです」
とくに4月7日からの3日間ロケはロケの中でもっともすごいシーン、歩岐島騒動のシーンである。立百姓の頭領四郎左衛門の家が足輕、寝百姓に襲われる乱闘シーンだ。雨の中4月8日は深夜まで続いた。い



船渡治郎（劇団はぐるま：右側）

ろんなカメラでの乱闘シーンが撮られた。田んぼの中の200人のエキストラと足輕と俳優をまじえての大乱闘。衣装の中にかっぱを仕込んでの大立ち回り。私たちの出番が終わったのは11時過ぎ。その後も少人数の撮影が続いた。冷たい、寒い、顔から下着まで泥だらけのヘトヘトの一日だった。これにも俳優は感動していた。「郷土の愛情をひしひし感じます。それなしに銭金では出来ませんよ。人間を感じますねえ。ふる

ロケーションを多面的に撮るうえに、季節も夏になったり冬になったりでシナリオのどろろが撮られるかほとんどのエキストラには全く分からない。
3月25日、26日の長良川河畔のロケは前日は獄門になった定次郎たちの最終のシーンである。晒し首になった定次郎たちの前にぬかずく村人をかき分け妻のかよが娘きよを抱き締めて駆け込んでくる場所だが、みぞれ混じりの雨の中、空を見上げながらの繰り返しである。と思うと次の日は笠松代官所で寝返った庄屋

ことになる。昼は立百姓で夜は寝百姓にもなる。「昼、立百姓でしたが」というと「いいえ、分かりません、大丈夫です」という始末。なれて来てアドリブまで入れると「余分なことはいわないで！」と叱られる。それがまた褒められることもあるから面白い。
撮影に入るや地元の熱気はすごいものだった。ロケ現場のボランティアはエキストラだけでない。生協やJA、地域婦人会をはじめ自治体の全面的な支援、いや地元の熱気の中で繰り広げられたのである。何人もの町長や村長が率先してエキストラに参加した。

エキストラ現地6時集合となればスタッフは5時には準備を完了していなければならない。となれば婦人会は4時には朝食ができていなければならないから3時である。それが連日続くこともあるから大変であ

初日のエキストラシーンは驚訴した定次郎が藤丸箆で郡上に帰ってくるシーンだが、台本ではほんの1ページのシーンが朝から夕方遅くまで、それも一問ほどの山道に雪を敷きつめてのロケ。俳優たちには肌色



の足袋が支給されていたが、エキストラは冷や飯のみで素肌。それが老人から子どもまで約200人、だれ一人文句も言わず、1カット終わるたびに大きな拍手。驚いたというか、感動したのは俳優の方である。婦人会の接待といい、緒形直人以下あらゆる俳優が感動していた。「こんなロケは初めてですよ。東京じゃアル



を追い返すシーン。夜になると母野に集まって氣勢をあげる村人たちのシーン。続いて定次郎が江戸行きを決意する重要な場面となるのである。それが寒いのに真夏の設定なのである。震え上がりながらのべ700人のエキストラの迫力に四郎左衛門役の林隆三は「すごいすごい」を連発拍手していた。

「大河ドラマ(葵三代)」で鈴木瑞穂さんと一昨日も一緒だったんです。四郎左衛門の役だったと思ったら『民芸の公演ではそれはおれの役だぞ』といわれましたが、瑞穂さんに叱られないようにやりにやりにませんよ。しかし、いい経験でした。何か瑞穂さんに悪いような気がしますよ」といっていた。

もともとエキストラが集められたのは5月13日の撮影である。郡中130ヶ村の百姓が城下町八幡の御蔵会所へ押しかけ、郡上の百姓の不満

がついに一揆となって噴き出したドラマの発端のシーンである。県内はもちろん、名古屋、関西、関東からも映画製作の意義に感じて800人以上のエキストラが集まった。白山長瀬神社の長い階段を駆け登るテストの繰り返しにはみんな顎を出した。笑っているわけではないが、苦しいので口を開けて白い歯を見せるとカメラには笑って見えるのである。NGの繰り返しには「今度だめならもう下りる」というものも出る始末。エキストラの核になる劇団員は悲鳴をあげるわけには行かず、OKが出たときにはほっとして思わず坐り込んだ。

4

エキストラでも劇団員はそれぞれその場でせりふをもらい参加しているが、最初から監督と会い、役に就いたのは笠松代官所の元締め三島

幸司、八幡の豪商役の浦田ひさし、那比村の帳元の彦吉の船渡治郎の三人だった。それ以外に江戸の公事宿で定次郎が訴訟の相談する場面、映画の山場である定次郎が獄門の言い渡しを受ける場面、喜四郎が牢死する場面、定次郎が牢屋で父親と対面する場面は体育館の中に作られたセットでの撮影である。これには服部、藤沢、田路をはじめ多くの劇団員が出ている。ここでも待ち待ち待ちである。1、2秒のカットに1、2時間かかる。

なにしろ何が映っているか本人も分からないが何でもやらされた。立百姓、寝百姓、町人、足軽とその場で振り分けられてやるのだからドラマのつながりは大丈夫かと不安になることもあった。乱闘シーンになるとカット割が前後ばらばらで撮っているの、今撮っているのが前のシーンの後なのか前なのか、中

心になっている俳優すらよく分からず戸惑っていることもあった。ただせりふが舞台と違ってぼそぼそいっても十分とれているので声を立てないようにいわれ、間をとりすぎるともいわれた。また、シナリオのト書通りにやると「気に掛けないで」と現場主義であることも多かった。舞台とは全く違い戸惑うことがたびたびだった。

エキストラでだれもうんざりし



たのは待つことである。カメラの位置が変わるだけで30分から1時間の待ち時間になる。寒中焚き火して待つのである。これはエキストラだけではない。緒形直人からすべての俳優も同じである。なれてくるとこの時間が交流の場になる。専門劇団の俳優たちも劇団の話になるとチケットが売れない。観客が集まらない、いい本がないという苦労話が出てくるから面白い。

待ち時間というとな気になるのでなく、雲がかかるのを待つのは意外だった。それで予定通りの撮影ができなかったこともあった。

監督の下に助監督が6人、スタッフ総勢60余人だったが、神山監督もこれだけのスタッフははじめての経験であるといっていた。わたしたち劇団にとっても大変貴重な経験だったといえる。上映されるや、みんな2回3回見ているが最初は「どこに

見えた」「いたはずだか映っていない」とか映画よりそれが話題になったのも面白い。編集でカットされるのは当然だから、話題がそこに集まるのも無理ないことである。こういう経験は二度とないであろう。

原作「郡上の立百姓」は幸せな作品である。訪中日本新劇団のレパトリリーになり、先日なくなった早川昭二の演出で民芸で上演され、映画にまでなったのである。これもこれから減多に出会うことはないだろう。

この映画がどのような経過を踏み、地元の熱気に包まれ完成されていったか、ロケの現場を含め詳しく紹介された本が出ている。

「一揆 Spirit」定価1600円

発行 人間社

〒460-0088

名古屋市中区栄1-2-6

名宝会館F4

TEL 052-212-4591

世紀の境に立って

— 80年代演劇と2001年の今 —

桜井 郁子

『兄弟姉妹』

80年代はロシア演劇20世紀の中の
高い峰、ソビエト時代に見失われて
いたものを一挙に発見し、表現し得
た時代。前号にも書いたように、ゴ
ルパチョフが登場してからのペレス
トロイカでなくて、演劇界（もちろ
ん他の文学や映画でも言えるのだ
が）の人たちが、自ら切り拓いてい
った地平に花咲いたのが、80年代演
劇のペレストロイカである。前号に
A・ガーリンやL・ペトルシエフス
カヤという現代劇作家の登場を書い
たが、演出家の代表選手としてはレ
フ・ドージン（44年生れ）、作品と
しても85年3月初演の『兄弟姉妹』
は最高峰の名に恥じないと思われる。

原作はF・アブラーモフ（20—83
年）が、大学の文学講座主任の職を
なげうって20年かかって書きあげた
800ページを超える長編4部作。
自分の生まれた北部ロシア、辺境の
農林業コルホーズをモデルに、戦中
戦後のソビエト政権下の最底辺で生
き抜いた人びとの歴史を描く。收穫
した穀物はすべて国家に供出、自分
たちの常食はどん栗や、苔、木屑で
作ったパン。男たちは戦場にかりだ
され、村を守るのは老人・子どもと
女だけ。戦後も国債掘金の割り当て
で搾られた。そんな悲しい民族の歴

史で欠くことのできない問題提起を
作家は書き、ドージンは演劇大学の
教え子と共に劇化に着手、7時間の
大作に仕上げた。89年の来日公演を
記憶している方もあるだろう。

明快なテーマと骨太な表現。細密
な演出家の手とそれに答えるマール
イ・ドラマ劇場俳優たちの若い力に
溢れたアンサンブル。リアルな細部
（水しぶき、穀粒、白樺の枝の匂い）
にこだわりながら、舞台シーンは大
胆に捨象される。瞬時に作られる集
団フォルムの造形美。女たちが声を
そろえてうたう戯れ歌は、民族の伝
統と共にそのエネルギーをも感じさ
せ、観客の胸を熱くさせてくれた。

作家の村に滞在して農作業に加わ
り、漁船に乗り、老人たちの話を聞
いて農民の言葉を探取し、歌や踊り
を学びとる、こんな体験旅行を劇団
の若い俳優は二夏にわたって行っ
た。この体験旅行は以後、同劇場の

芝居づくりのスタイルを定めた。こ
の『兄弟姉妹』は世界を巡ったが、
今も上演されているようだ。ただ惜
しいことに、議長役の俳優が昨年8
月急逝したと報じられている。

発掘された文学遺産

82年「現代ドラマトゥルギー」と
いう戯曲専門の雑誌が創刊された。
まだ上演に到らぬ戯曲を掲載した他



F・アブラーモフ作『兄弟姉妹』
レニングラード・マールイ・ドラマ劇場
演出 レフ・ドージン

に、毎号文学遺産というべき未発表
作品（ソビエト時代の検閲によって
禁止されてきた作品）が載った。例
えばA・アフィノゲーノフ（82年No
1）、M・ブルガーコフ（82年No 2）、
A・ルナチャルスキー（83年No 2）、
A・プラトーノフ（84年No 3）等。
A・ゲリマン、A・ガーリン、L
・ペトルシエフスカヤなど現代作
家作品も他誌に先んじて載った。
ゴルパチョフ議長登場の85年には
M・ザハロフやG・トフストノー
ゴフたち演劇界の主な人たちが「検
閲廃止」の論陣を張り、実行にも及
び、結局2年も経たぬうちに検閲は
廃止された。

『犬の心臓』

禁じられていた作品の上演で象徴
的なのはM・ブルガーゴフ（91—40
年）の『犬の心臓』である。87年5
月上演したのはそれまであまり知ら

れていなかったモスクワ青少年劇場、演出したのはG・ヤノーフスカヤ。筆者がよく書く演出家ギンカスは彼女の夫君である。86年首席演出家に任命されて初めての仕事が87年シーズンの最高傑作と言われるものになった。実は彼女の就任は劇場で歓迎されず、いきなり16人の給与返上という手荒い意思表示に合ったが、彼女はひるむことなくただ自らの仕事をやり遂げた。しかも『犬の心臓』は作者が25年に書いて後、60年間活字になったことのない作品だった。

生命科学の権威である教授が、街で拾った犬の子に死んだ男の（実は心臓ではなく、脳下垂体を移植した結果、犬の子が人間に生まれ変わり、それもぞっとするほど卑俗で野蛮な人間だという物語。暴力的で食欲で権力の手先にさえなり果てる青年と、自身が生みの親ながら困惑する



老教授の葛藤の物語が、歌劇『アイーダ』の壮大な宮殿を背景に繰り広げられると、人々は争ってこの劇場に殺到した。この公演は多くの諸外国に招待された。生体移植にも、クロール牛の誕生にさえ驚かない現在では理解し難いほど、当時話題を集めた。しかし20世紀が終わっても社会状況も人間関係も相変わらず解決していない今、彼女の提示した問題提起の

原作 脚色
ブルガーコフ
A. チェルヴィンスキー
『犬の心臓』モスクワ青少年劇場
演出 G・ヤノーフスカヤ

先見性と勇氣は明らかだと言えるだろう。
長年ゴリキイ市に幽閉されながら反骨を貫いた科学者サハロフ博士が舞台を見て、讃辞を演劇誌に投稿した。「舞台に魅せられた。演出は新しい工夫に富み、情熱的だ。空想的な主題の背後に見えるのは知性の高潔さという人道的な思想」云々と。

スタジオ劇団「人間」

80年代スタジオ劇団の代表としては劇団「人間」を挙げておこう。25年前演出家ロシニコパンが、馬屋を改造した小さな建物を根拠地に立ちあげた劇団である。モスクワのそれぞれの劇団に所属する若い俳優・演出家たちが自由にグループをつくって実験劇をつくるのを援助した。

「人間」を有名にしたのは85年初めに初演された『亡命者』。ポーランドの作家S・ムロジェクが74年に

書いた作品、演出はモケーエフ。暗いうす汚れた異国の地下室に閉じこめられた二人の男が、極限状況の中で自由を論じる。不安と展望のなさから首を縊ろうとする男と、その無思慮を冷笑するインテリゲンチヤ、対照的な二人を演じたのは、片や最近も『ボリス・ゴドゥノフ』の

主人公を演じている著名な俳優フェクリストフ、片やモスクワ芸術座の明日を担う演出家の一人コーザクである。『亡命者』は海外での評価も高かったが、実は初めの3年間は非合法的公開だった。

さらに当時人気を集めたのはペトルシエーフスカヤ／作、コーザク／



S・ムロージェク『亡命者』
スタジオ劇団「人間」
演出 M. モケーエフ

演出86年初演の『チンザーノ』と、ゴリゴリ『ヴィイ』を原作とするN・サドウル／作、S・ジェノヴァチ／演出の『パンノチカ』（本誌93号参照）である。

チンザーノという外国製ワインが珍しくモスクワに出現した60年代のモスクワ。仕事の後、とある地下室に集まった男三人、チンザーノを次々開けながら家族や職場の愚痴をぶちまけるが、そのうちに恐ろしい現実が見えてくるという話。これも諸外国に招かれた。実は我が家の玄関壁面にはイタリー公演のポスターが今も貼ってある。

昨年末クリスマスの前に同劇場25周年記念に『亡命者』と『チンザーノ』がコーザクなどにより3回ずつ再演されて話題になった。『パンノチカ』は残念ながら上演されなかった。何しろ演出家ジェノヴァチは2年間の冷遇時代を抜けて、今モ

スクワ・マールイ劇場で彼の演出した『知恵の悲しみ』が満員札止めの好評だし、主演者の一人タラマーエフは「フォメンコ工房」劇場の新作2つに出演し、それが今シーズン随一の人気作品となっているから身動きできないのだろう。ロシニコバンはもちろん自らも演出、『ストリップ』などの秀作を出しているが、こんな才能を育てた人なのだ。ロシニコバンもヤノーフスカヤも率直で言葉を飾らない、内に秘めた芯の強い仕事師ともいふべき女性たちだ。

(実はここまでは「私の30年物語(4)」にあたる。けれどあえて名づけなかった。「私の」は「私の実感に裏付けられた」という意味以外の何ものでもない、ましてや「30年」に何ほどの意味があるのか…と思いついてから。読者の「寛恕をお願いしたい」)

演劇フェスティバル

昨秋、ロシア演劇フェスティバルについての記事をみつけた。各地でいろいろの季節にフェスティバルが行われ、その数はわからないほど今も増え続けている。テーマも規模もさまざまで児童劇専門、人形劇専門、青年演劇専門などいろいろあるようだが、50のフェスティバルの名称、開催地などが一覧表で付されている。筆頭はチエーホフ国際演劇祭(モスクワ)。(黄金のマスク)演劇祭(モスクワ)これに(バルチックの家、バルチック地域国際演劇祭)。(サンクト・ペテルブルグ)などが続く。コンテストを行う(黄金のマスク)。(バルチックの家)などもあれば、コンテスト抜き(チエーホフ国際演劇祭)などもある。開催地もシベリアの各地、南ロシアの各地にひろがっている。国際的といってもチュ

2001年の初めに

21世紀になったからといって格別明るい兆しも見えない世界、日本、そしてロシア。それでも時は刻まれ、いつものように新しい年が始まり、いつものように仕事が始まり、夜毎に人びとは劇場に足を運ぶ。厳しい社会状況の下、新作の数が減っているわけではなく、どこかの劇場が倒れたという話も聞かない。それどころか、昨年の秋から新聞に連載された1999/2000シーズンの総括を見ると論評家たちの評価が例年になく一致している。

「いいシーズンだった」(「スクリーンと舞台」紙、30-31号)「今シーズンはおもしろかった」(同紙32号)などという表題が踊り、長老評論家ソロヴィヨワの「穏やかな太陽の年だった…みんなそれなりに生き、みんなそれなりの仕事を続けた…繰り返

返しでなく、続けている」という言葉も見られる。

ことわるまでもなく読者はご存知と思うが、ロシア演劇は今もレパートリー制(毎夜日替わりプログラム)だけでなく、シーズン制(秋から翌年初夏までを1シーズンとする)を続けている。このシーズンという区切りが新作の誕生をうながすエネルギー源のひとつかも知れない。

さて昨シーズンの総括をみると、圧倒的な支持を受けた作品はK・ギンカス/演出の『黒衣の僧』(前号のレポート⑩参照)であり、P・フォメンコ/演出の『ある完全に幸せな村』である。評論家たちの視野はモスクワにとどまらず、ペテルブルグやロシア共和国全域までとりいれたものであり、これがフェスティバル(黄金のマスク賞)ノミネートに一定反映されているので、後で作品一覧でお目につけよう。

ルク人(タタール、アゼルバイジャン、キルギス、ウズベク、カザフ、バシキール、トルクメン人)の国際演劇祭などというの目にとびこんでくる。ロシア文化省副大臣のコメントによれば、この国の広さを考えてフェスティバル数は多いと言えない。問題は財政負担が大変なこと、上演回数が1、2回では観客の要望に応えられない、量より質の問題もある。中央の演出家が招かれて演出したため秀作が出た例も紹介されている。

さて2001年の(黄金のマスク)フェスティバルは3月下旬から4月にかけての2週間に予定されているが、毎年激論を起こし、スキヤンダル呼ばわりされながら、6回目ともなれば多少整備され、選定委員会、審査委員会メンバーの発表もいち早くされ、ノミネートが昨年末に発表された。ただノミネートの過程は相

変わらず不分明、やはり論争は起こるだろう。その方が関心を引くのでよいという人もいる。

2001年はもうひとつ大きな(世界演劇オリンピッククス)が(チエーホフ国際演劇祭)と併催で4月から6月に予定されている。詳細なプログラムは未だ発表されていないが、大きな企画となるようだ。

(黄金のマスク)2001

フェスティバルに客として参加する喜びは、各地よりすぐりの作品に出会えることにある。モスクワ、ペテルブルグならともかく、広大な各地のフェスを足を運ぶのは不可能だが、モスクワという一都市で短期間に集中して見られるのは好都合、実は受賞結果はどうでもいいのである。昨年(ロシアン・ケース)という外国人向けのフェスも併行している。



メイエルホリド創造センター

つと実現。350—500席のホルの他、2つの稽古場、これはマスタークラスの実験、トレーニング、稽古に当てられるが、他に会議室、ホテルなども備えた、一大建築物だ。同センターの主宰者V・フォーキンの発言で活動の概要を伝えておこ

う。開場後直ちにフォーキン／演出作品『N市ホテルの一室』『変身』『もう一人のヴァンゴッホ』などが上演されるが、オリンピッククスの期間の5月15日から1カ月は実験劇・マスタークラスなど新しい演劇の創造に開放するという。

〈第3回世界演劇オリンピックピックス〉は第1回のギリシャ、第2回の静岡に続いて、4月から6月にかけてモスクワで行われる。これは第4回チエーホフ国際演劇祭と併催になる。このほど若い友人が入手してくれたインターネット情報でお伝えしよう。

詳細はまだ発表されていないが、いくつかのプランが含まれる。まず世界演劇シリーズ、各国の巨匠たちによるヨーロッパや世界演劇、続いてロシア諸劇場のスペクタクル、演劇教育や実験劇の試み、そして世界初の街頭劇カーニバル。そう言えば

国際的プロジェクトとして、作曲家バクシが演出家ギンカス、ヴァイオリン奏者クレメルと共同して、『オルフェ』から『回帰』に到る7部の『世界ポリフォニー』を作りあげると、どこかで読んだ。

モスクワ市長シコフの発言が凄。オリンピックピックスは4月21日から開かれ「全地球的規模のイベント」になるだろうと打ち上げている。曰く、4000人の参加と100万人以上の観客を受け入れる用意がある。39カ国から劇団、実験劇場が参加する、財源にはモスクワ市も文化省自らも一部負担する。重要なのは街頭劇カーニバルで、一日トヴェルスカヤ大通りを舞台として開放し、サンパウロから150人のプロ俳優も呼びたいそうだ。

オリンピックピックス事務局はバクシたちの記念碑的構成劇は5月18、19日に実施されると告げている。

今回のドラマ劇場部門は初めて、作品賞が〈大舞台形式〉〈小舞台形式〉に分類された。他に演出家、女優、男優、美術家の各賞ノミネートがある。作品賞ノミネートだけ紹介しておこう。発表は作品名、作者名、劇場名だけだが、分かる限りは演出家名を付記したい。

大舞台形式

【天使ヴァヒーロンに来る】

ジュレンマツト／作、トムスク・ドラマ劇場。

【百萬長者の街】

デ・フィリップ／作、モスクワ・レンコム劇場 演出M・ザハーロフ。

【コントラバス】

ジュスキンド／作、モスクワ・サチリコン劇場。

【モーリー・スイニー】

フリル／作、ペテルブルグ・マーリイ・ドラマリョーロッパ劇場、

演出／レフ・ドージン。

【星空に見失われたもの】

レーヴィン／原作、ペテルブルグ・リテイヌイ劇場、演出／ディチヤトコフスキイ。

【三人姉妹】

チエーホフ／作、ノヴォシビルスク・クラスヌイ・ファークル劇場。

小舞台形式

【伯父さまの夢】

ドストエフスキイ／作、ヴォロネジ・カーメルヌイ劇場。

【森の精】

チエーホフ／作、ペテルブルグ青少年劇場、G・コズロフ／演出。

【どん底】

ゴリキイ／作、モスクワ・タバコフ劇場、演出／P・シャピロ。

【ある完全に幸せな村】

バフチン／作、モスクワ・フォメ

ンコ工房劇場、演出／P・フォメンコ。

【黒衣の僧】

チエーホフ／作、モスクワ青少年劇場、演出／K・ギンカス。

【馬鹿の学校】

ソコロフ／作、バルチックの家&フォルマリヌイ劇場、ペテルブルグ。

大舞台と小舞台の基準は明らかにされていないが、これまでの実感では大は350席以上、小は100席前後だろう。ごらんの如く演目は相変わらず内外の古典が大部分。演劇界の実勢もこの通りである。『どん底』も幸い既に紹介済み（レポート⑩参照）。筆者としてはチエーホフ3作品は楽しんだ。

〈世界演劇オリンピックピックス〉

メイエルホリド創造センターが2月12日開場した。10年前の企画がや

アイルランド紀行

——『タ鶴』の公演を中心に交流——

劇団すがお 若葉 正則

アイルランドへ

7月31日から21日まで9日間、私たち劇団すがおは、地元桑名の合唱団と日本舞踊家、その他桑名国際交流委員会のメンバーや通訳とあわせて25人が、アイルランドの北端、北アイルランドに近いモナハン市（人口2万人程度）を訪問、『タ鶴』の公演を中心とした交流をしてきました。

受け入れてくれたのは、モナハン市アマチュア劇団ドラムリン・プレイヤーズのみなさんでした。この劇団とは5年前、韓国の馬山市で開催された国際演劇祭で出会って意気投合、2年前に私たちが彼らを桑名に招待しました。今回の訪問はその答礼の意味がありました。

日本が猛暑に向かい始めた7月13日、私たち一行は名古屋から空路シンガポール、ロンドン経由で、延べ26時間かけてダブリンにつきました。代表のラリー、マクラスキーを始め、メンバーの面々が出迎えてくれ2年ぶりになつかしい再会を喜びあいました。ダブリン市からモナハンまでの景色は、看板は一つもなく、車窓からの景色は、色合いといい町並みといい、おとぎの町のように、緑が一杯の小高い丘陵が続き、牧場には羊・牛がゆったり放たれ、飼料小屋や民家が建っています。心なごむ思いがしました。しかし、その町々の

史跡には、イギリス王朝の内紛による戦場の跡が残っています。

さて、2時間余りで訪問先のモナハン市に着きました。さっそく、教育委員会に案内され、劇団員やホストファミリー、市の関係者の待つ歓迎式にのぞみました。理知的で美人でもあるローリー・オハロン教育長は、「こんなに多くの日本人が見えたのは初めてで心から歓迎します。短い滞在ですがどうか多くの経験をしてください」というあいさつがあつて、屋上でホストファミリー手作りのサンドイッチパーティでもてなしてくれました。そこから観る街の風景は薄曇りの空の下に、静かな午後のたたずまいを見せており、私たちの緊張もほぐれ、長旅の疲れも忘れさせてくれました。

この後、私たち一行はそれぞれのホストファミリーのもとに案内されました。

マンションあり、アパートあり、

田舎の広い庭付きの家ありで、劇団員と新聞で公募したファミリーのもとに、私たちは多少英語の理解できる者と全く駄目な者と二人一組のコ



ンビで、ささやかなお土産を持ってお邪魔しました。

2日目からは、劇団側が用意してくれた盛りだくさんの歓迎スケジュールです。しかし私たちの舞台のことが心配です。事前に依頼してある道具や照明の状況を見たいので、劇場へ立ち寄りましたが、道具の材料を用意して製作にかかったところで、私たちも観光をやめて一緒に作るといったのですが、彼らもまた観光団と一緒に出かける、心配するなといわれ、結局道具作りは後廻しで全員観光となります。

ーア、この朝、現地に手配を依頼してあったタ鶴の子役との顔合わせと、衣装合わせ、そしてローマ字で綴った台詞と歌の練習をすることができました。ー

さて、私たちは朝から深夜までの歓迎せめて実に楽しい2日間でしたが省略します…。

アイルランド人はどこへ行っても

楽しい人たちで、教会では賛美歌を、観光地の別荘では歌ったり踊ったり、詩の朗読があつたり、ともかく、どこでも、いかに楽しむかをいつも追求している気がします。そして演劇や音楽などの文化が当たり前で生活に定着しているということを痛感しました。また、街を歩いているとみんなニコツとほほ笑むとか、クラクションを鳴らすとか、手を振るとか、人なつっこいこと、好感のもてる国民という感じでした。

タ鶴が飛ぶ日

そして7月17日、ついにモナハンに『タ鶴』が飛ぶ日です。小高い森の中にある劇場（ガレージシアター）は客席数200。朝から未完成の道具作り、リハーサルと公演準備に追われ、夜が公演です。大道具のパネルは発泡スチロールのような断熱材

をノコギリでカットして、上から紙を張る手法です。そしてその上から塗装です。照明機材も日本の片田舎の公民館のようなもので、担当者が



モナハンガレーシシアターで『夕鶴』を上演

苦労していました。合唱団や日舞の人は稽古をすまして市内観光に、私たちは現地の子役もまじって稽古の繰り返し。雪籠もセットアップ、雪布も敷き込み準備完了。そのころ、現地の子役は劇団員に慣れ、楽屋を飛び回りその管理におおわらわ。

夕刻5時から市長招待のレセプションでした。着替えてあたふたと会場へ駆けつける。市長はじめ市議会の面々、ホストファミリー、この地の合唱団のメンバー等様々の人たちが招かれていました。約90分程度の交流の後早々と劇場に戻り8時から開演に備えました。

会場前は、この町のオーケストラが駆けつけて歓迎演奏を行ってくれている。白夜の街はまだまだ明るい。観客はプログラムと私たちが折った折鶴を受け取り入場。ほぼ定刻で満席となり開演。日本語というハンデイキヤップがあるにもかかわらず、

のつけから「運ずと惣どのかけ合い」に拍手と笑いがおこり順調なすべりだし。その勢いで最後まで、あっといふ間の『夕鶴』でした。日本の名作は感動的に伝わったようで、拍手・拍手のスタンディングオーベーションでした。エクセレンス、エクセレンスの言葉をかけてくれました。

「日本の技術はよく知っているが、繊細な文化も知った」といった言葉も聞きました。

次の日本舞踊に移る休憩時間、お客はレストラン（バー）でビールやワインを飲みながら談笑していつまでも席に戻りません。20分遅れで日本舞踊が始まったほどです。すべてのプログラムが終わったのが、午後11時過ぎでした。片付けのすんだ後は、また関係者と一緒にバーと化したレストランで打ち上げ交流会です。歌や踊りに（盆踊りもありました）、詩の朗読があつたりして、

延々最後のメンバーの帰宅は深夜の2時でした。

お別れ

無事公演も終わり、4日間お世話になったホストファミリーや劇団の方々とも別れの朝がきました。私たちはファミリーに送られて集合場所に集まり、最後の別れをしました。涙、涙の別れです。そして毎日乗り馴染んだバスで、ダブリンへ出発。首都ダブリンでは観光の後、夕食後は「リバーダンスショウ」とAbbey劇場「A Liff（ある人生）」の2組に分かれての観劇でした。劇団員は全員Abbey劇場「A Liff」の観劇でした。

開演前、バーではコーヒーやビールやシャンペンを口にしながらみんな楽しんでます。芝居は愛の争奪戦をやった二組のペアの今と昔を織り混ぜながら、人生とは何かを問い



かける風刺喜劇でした。舞台は上手に昔の家、下手が現在の豪華なマイホーム、奥が今も昔も変わらない公園で、照明の切り替えによって場面がかわってゆく手法でした。客席はよく笑い、各世代、男女がほどよく混ざり日本のような圧倒的女性というところありません。市民の中に演劇がうまく溶け込んでいる感じでした。休憩時間はやはりバーでコー

ヒーやビールを飲みながら懇談しています。実に賑やかです。入場料も1000円程度で安いと思いました。観劇後はホテルのバーで私たちはドラムリン・ブレイヤーと最後の別れパーティを主催しました。ここで2年後、再びドラムリンブレイヤーを桑名に招待することを約束しました。翌朝、私たちは楽しかったアイルランドに別れを告げ、また、ドラムリン・ブレイヤーズのメンバーの見送りを受けダブリン空港を後にしました。2泊3日で暑さ真つ盛りの日本に帰って来ました。

こうして私たちは、日本のアマチュア劇団初のアイルランド公演を無事終わることができました。ちなみにこの公演には中日新聞社（東京新聞社）が記者を同行派遣してくれました。現地からの一報が桑名で報道され、帰国後同行記が4回にわたって掲載されました。

北から南から

・劇団通信

【劇団海鳴り】

少し話が古くなりますが、昨年の2月と12月に紋別で演劇セミナーを開催しました。これは紋別市の文化芸術予算の補助をいただき北海道演劇集団とのタイアップで行った



ものです。内容は、スタッフ部門の勉強会です。演出・舞監、音響効果、衣裳・メイク、照明、制作、創作と6コースに分け、基礎をしっかりと身につけるものでした。一泊しての研修は交流会も盛り上がり、宿泊施設となった我が稽古場は40人が雑魚寝するといふすまじさでしたが本当に楽しいものとなりました。12月の2回目は、渋谷健一氏（劇団シアターII）の約30分の台本を海鳴りがモデル上演、それに各スタッフがプランを出し、本番まで行いました。このセミナーは今年度が最終で、さらに充実した内容にしたいと考えております。

海鳴りも今年丸35周年になり若手団員を中心に、7月公演予定の「ユタと不思議な仲

間たち」公演に向けてスタートしたところです。

（五十嵐陽子）

【劇団 新芸】

10月14日（土）渋谷健一／作・飯田信之／演出「小樽・運河・桜坂」。1ステージでしたが、観客数約450人満席で打ち上げました。終わって数カ月たっても、会った人が「感動した、素晴らしい」と声をかけてくださいます。自分が切符を売ったのではない方が「ぜひ第2部をやってください」と声をかけられるのです。それも中年以上の方や男性の方などからです。

「昨年の「恋歌が聞こえる」も良かったけど、今年は風格さえある立派な舞台だった」

（宮津）

と言ってくださったのは東京芸術座の顧問もしておられた松本忠司氏の談です。「昨夜の舞台に宇野重吉や北林谷栄がいたような気がする」と思いつつパンフを読んだら、演出の飯田氏が10年間民芸に在籍していたと知って納得したという男性もいました。いろいろな方々に助けられて、新芸の力の3倍以上の仕事になってました。

大人の観賞に耐え得る作品を届けられた誇らしい喜びでした。でも今年はお世話になった他劇団への応援等で過ぎてしまふようなのです。「小樽・運河・桜坂」第2部上演の夢を持ち続けて活動してゆきたいと思っています。

【劇団さつぽろ】

「さつぽろ」しております。北海道は未だ真冬です。札幌は零下10度以下になることはめったにないのに、今年は2週間以上も10度以下が続いています。最北の不凍湖といわれている支笏湖も10何年ぶりに全面結氷しました。

劇団は、現在「やまんばのしき」「三びきのやぎのらがらどん」と「あらしのよるに」の3作品の公演中です。財政難は相変わらずですが、来年度の公演に関しては、少し展望が見えそうです。

他の文化団体との協力も、津軽民謡のタベや映画の普及（あかね色の空を見たよ）「郡上一揆」などで積極的に進めています。

それにしても、ハワイ沖の愛媛丸の事件や一連の沖縄での米兵の事件はひどすぎます。日本政府の対応もお粗末ですが、つくづく軍隊という

ものは、人殺しの集団であって、一般市民を助けるものではないと痛感しました。

（林中 直樹）

【劇団 弘演】

21世紀の幕開けはいつにも増して厳しく、寒い冬でした。まるで今の日本の政治、国民いじめ、弱い者いじめの政治を物語っているようです。

なんとかせねば……

昨年2月、劇団代表の青山司を失い、秋には追悼公演「泰山木の木の下で」を上演しました。

そして一周忌を迎えるこの2月、劇団と後援会主催で偲ぶ会を開き、青山司の思い出を語っていただきました。またその会のオープニングでは、森下法雄が青山司オリジナル「お話し玉手箱」をひきついで昔ッコを語り、会のしめくくりには、朗読劇による「ガラッパ駒ひき」斎藤隆介

／作を劇団員で演りました。

青山さんへの思いはつのるのですが、これでひとくぎり、新代表秋本博子を中心に新たなスタートをきりました。

どんなに厳しい寒い冬でも、春はかならずやってくる。でも待ちどおしいよお！

（作間しのぶ）

【黒石演劇研究会】

平成12年10月28日（土）・29日（日）の両日、北野ひろし／作「帰ってきたオトウサン」（古川次仁／演出）を上演しました。

今年も昨年同様、黒石市民文化会館多目的ホールで計3ステージ、無事終えることができました。本当に無事かどうかは定かではありませんが、とにかく急病人もなく、照明も消えることなく終えたことに「ホッ」としています。前号でもお話しした通り、役者がなかなか揃わず、1週

間前にやっと通し稽古ができた有様で、超スベリ込みで上演したという感じです。キャストが多ければ、舞台も華やかになる気はしますが、稽古日程等かなり考慮しなければと大いに反省させられました。

それともうひとつ、2日間にあたるステージということですが、そのために舞台で役者同士が噛み合わず、思わぬミスとなり、お客様に申し訳ないと感じる始末です。今後稽古を通して、そのへんも鍛えなければと思っています。

さて、話は変わりますが、突然、NHK-TV（Hi-Vision）放送のノンフィクションドラマ「遭難」に出演することになり、平成13年1月5日（金）〜13日（日）まで、雪山でのロケに入りました。ところがこの「遭難」、実話以上に、監督がああ、あの、岡崎栄氏なのである。わ

れわれは、ラッキーやら、緊張するやらで毎日興奮していました。その余波は今も続いています。

放送は、この号が出るころには終了していますが、(平成13年3月3日)もしご覧になられていましたら、ご感想をお待ちしております。

そんなわけで、冬場の稽古は多少遅れぎみといった感じですが、今年の本公演は平成13年10月28日(日)大ホールと決まりました。3年ぶりの大ホールとなります。これからしっかりと基礎トレーニングを(?)積み、お客様と一体となる舞台を作りたいと思っています。(清野)

【劇団 やませ】

昨年は本当にお世話になりました。昨年は30周年ということでした。1年だったのですが、その中でも、2つの大切な経験をする事ができま

した。

まず1つめは、8月の湯田町でのフェスティバルです。全国の仲間と交流できましたし、拙い私どもの舞台をたくさんの方々に観ていただきました。銀河ホールのスタッフや町民のみなさん、ありがとうございました。

2つめは創立30周年記念公演です。湯田町から戻り、すぐ、榎谷伸夫/作・栗谷川洋/演出「九戸政実」の稽古に入りました。ちよつと短い稽古期間かなと不安もありましたが、団員の一致団結の力で乗り切ることができました。もちろん、適切な指導をしてくださった栗谷川氏には深く感謝です。土・日、2日間の公演となりましたが、30周年や政実の話題性から、さまざまなところで採り上げていただいたこともあり、2日間とも満員御礼となり、久しぶりに800の舞台を越えること

ができました。

さて今年は、5月に九戸政実の故郷二戸市での公演を予定しています。8月には稽古場でのアトリエ公演、11月には本公演を予定しています。現在、団員みんなでたくさんの本を読み、脚本研究をしているところです。

31年目、がんばりますっ!

(高森)

【劇団 支木】

みなさんこんにちは。青森も今年はすごい雪でした。歩道は埋もれ道路は渋滞、朝も夜も雪かきに追われ、さて、この間2人が退団してしまい、ついに団員数は過去最少の17人となってしまいました。吹き荒れる外のように、くらく寂しい風が団内にも流れました。が、そんなときこそより団結し(普段は見られないほど?)パワーを発揮するのが我が劇団のすこ

いところ!やる気満々、今年の活動予定をお知らせします。

●定期公演【春】—運営委員長である伊藤一郎の処女戯曲「車輪のついた籠(仮)」演出/中野健、6月下旬

●特別公演【湯田町地域演劇祭】—「車輪のついた籠」

●定期公演【秋】—劇団代表高木えいじの演出作品「結婚の申し込み」作/伊賀山昌三

●特別公演【八雲国際演劇祭】—「結婚の申し込み」、11月上旬

そろそろ暖かくなってきましたね。お互い、元気にがんばりましょう!

(有馬美恵)

【劇団 だいこん座】

昨年の秋の公演は「風の吹く家」(作・演出/高橋寛)を9月23日、鶴岡市中央公民館ホールで上演しました。父は毎日残業、母はパート、

【劇団 群馬中芸】

すっかりご無沙汰を続けております。ここ「あかぎ未来スタジオ」は冷たい赤城おろしの風がふきすさぶ毎日ですが、どこことなく春の気配を感じもします。全り演の取り組み行事になにひとつ参加することもなく恐縮しています。公演数も劇団員数も減少を続けている中で、ひたすら活力作りを模索している毎日です。

昨年の夏、新作「コッペパンはきつねいろ」を作りました。この作品は、童話作家・松谷みよ子さんの同名の童話を、中村欽一氏が構成脚色・ふじたあさや氏が演出した作品で、小学生を対象としています。お話は、山の高原で小学1年生の女の子が小ぎつねと出逢い、お互いに励ましあ

いながら成長していく、現代人が見失っている心のふれ合いを描いています。

公演は他に以前から続いている「郵便屋のテクルさんと宛名のない手紙」、「イーハトーヴオものがたり」そして「ちびすけうさぎのカルロス・ロサーノ」があります。前回の2作品はこの3月で打ち上げになりました。

新作の「コッペパンはきつねいろ」は、5月5日の子どもの日「あかぎ未来スタジオ」で公演します。不便なところですがぜひお出掛けください。お待ちしております。

また、この欄をお借りしてお願ひですが、私たちは劇団員不足で悩んでいます。劇団群馬中芸の活動に関心のある方はぜひ一報ください。(秋山としひと)

【劇団 埼玉】

劇団通信、前号は第75回公演「風・夏冬」の東京公演と重なり休んでしまいました。遅くなりましたが、改めて

湯田のフェスティバルではお世話になりました。本当にすばらしい夢のような3日間でした。

しかし埼玉にとっては反省と課題の多く残った舞台となりました。公演後の反省会に引き続き、今も私たちは次公演の台本選びをしながら、今後の活動へ向けての話し合いを重ねています。劇団としてのエネルギーが弱まっているのではないかと、事なかれ主義に陥ってはいなかったかと。

今年になって希望の3人の若者の入団があり、埼玉で末長く芝居をやっているようにするために、活発な意見を出し合っており、じっくりと次の公演に向けて進んでゆきたいと考えています。

ところで、年明けにタイムリーに日本芸術文化振興会からの助成金があり、埼玉では目下「舞台芸術のためのワークショップ」を立ち上げ、他

劇団からの参加者も得て開催中。ヴォイストレーナーのやまもとのりこ氏をはじめ、一流の講師の方々をお呼びすることができ、実技をまじえた充実した講義を受けさせていただき、感激しています。

(小山田敦子)

〔劇団 久喜座〕
久喜市で演劇文化の振興を守り育て続けている劇団 久喜座が創立10周年記念で2000年10月に久喜総合文化会館で2日間の自主公演をし、2001年1月には市民芸術祭で再演しました。そして3月31日には岩槻市中央公民館で4回目の公演をします。

【秋黄昏で、晩の父】(作・演出/金剛寺照五郎)、あらすじは、20年前に家を出た一人の息子が、ニューハーフ

になって父親に会いに帰ってくる。驚いた父親は世間体とエゴのために息子を受け入れようとしなない。周囲が息子を応援するが、なんとしても拒否する態度を崩さない。絶望した息子は涙ながらに帰っていくが、

人と人がわかり合うことの素晴らしさを伝えるテーマで夫婦・親子・そして社会の中での葛藤が展開され、さまざまな話題性のある問題提起をしている作品です。

私は今年の春、会社人間からリタイアするシニアですが、この脚本に惚れこみまして、これまでの観劇者から演ずる立場に参加させてもらいました。

それにしてもベテラン俳優の中で、65歳の男がいきなり稽古、初舞台を踏むわけですから、苦しみと楽しみの交錯する稽古を通して自己変革を試みました。演出家の求める

れます。(中村満男)

〔劇団 銅鑼〕

新世紀第1号となるこの通信欄に銅鑼からは二つの計報となつてしまいました。

◆昨年11月15日、劇団前代表・森幹太が両側重症肺炎のため死去しました。享年76歳。

新協劇団、文化座、歴史座を経て、銅鑼の創立旗揚げ公演「二つの月曜の思い出」に客演の後入団。銅鑼での主な出演作品は「雪の下の人」小沢内村村長、「凍土の鶴」ベレゾフスキー、そして「池袋モンパルナス」の花岡謙二が最後の舞台でした。

爆発するようにエネルギーを発散させた中・高年時代、枯淡と飄逸な味わいに加えたその晩年。俳優の生き方を示してくれた大切な先輩であり

銅鑼のアイドルでした。

1月下旬の大雪の日、タクシも拾えない悪天候について多勢の方々が「偲ぶ会」にお越しくださいました。「森幹よ、お前は最後まで人に迷惑をかける奴だ」と苦笑まじりに雪をはらうご老体は、かつての酒席で彼のカラミに手こずった憶えのある方なのでしょう。淋しさのなかにも生前の逸話が披露され爆笑や拍手の湧く森さんらしいお別れの宴でありました。

◆早川昭二は1月14日、食道癌のため死去しました。享年72歳。彼については本誌の他の欄にも記述があると思います。ここではある日の病室風景を。

彼の名が編集長として最後に載った「演劇会議」Vol104号を持参したとき、目にするなり「あつてきた? 見たかったんだ」と細くなった腕をのばして受け取ったときの

表現を理解し、セリフを発声し、演技することの難しさを忍耐強くやりぬくことが大切で、自分のパーソナリティを出すのはまだまだ先のことで

す。若いときは違つて、まさに頑固で柔軟性に欠ける者に演出者も仲間もよく指導してくれました。趣味のサークルもこんな若い者から老人まで、すなわち老若男女が一緒に活動する演劇サークルは素晴らしいことです。私の20世紀の自分史に記録する大きなできごとでした。

さて、私の生きてきた20世紀、戦争・戦後・高度成長・オイルショック・バブルそしてバブル崩壊・平成不況・政治の体たらく。ハッピーリタイアメントなんてのんびりしてはいられません。景気・環境・教育・健康など、この4Kの崩壊は見逃せません。演劇の世界も楽しさに加えて世相を変革する視点が求めら

葬にお越しくださいました方々、ありがとうございます。ここに誌上をお借りして御礼申し上げます。

◆この稿を書いている2月上旬現在、稽古場に両先輩の遺影を並べ、早川遺骨は納骨まで安置。コーヒー、煙草、ヴァレンタインチョコに囲まれて名残りの劇団生活を過ごしております。

◆3・4月集中レッスンのことや8月予定のドラマファクトリー「秋田殺人事件」のことなど次回にお知らせします。(菊地)

〔東京芸術座〕

いよいよ新しい世紀のスタートをきりましたが、長引く経済不況とエンドレスの政治腐敗に怒りと失望が沸点に達しています。だからこそ、希望と展望が持てる演劇活動が望まれているわけですが、学校公演を主な柱としている

当劇団としては、学校状況の急激な変化(土曜休日、少子化、過当競争etc)に翻弄され、劇団経営の面で深刻さが増してきていますので、希望と情熱に満ちて新ミレニアムのスタートを祝うまでには至っていません。ですが、今世紀は平和とあらゆるものと共生が課題となっていることからすれば人間の関係性を表現する演劇は、まさに今世紀のためにあると思いますので、新しい創造にチャレンジしなければと、菅井幸雄先生を招いて学習会を月1回開いています。

ともあれ、昨年末20世紀最後の公演は、アトリエで平石耕一/作・演出の「男の言い分」12月16日・23日の10回公演。

1・3月の子ども劇場およびこ劇場公演は首都圏を中心に「夏の庭」(湯本香樹実/作・印南貞人/演出)。冬場に夏

の芝居で風邪ひきさん続出。

今年には劇団創立者、村山知

義生誕100周年でそれを記

念し、初めての新宿紀伊國屋

サザンシアターで3作品連続

公演。『夏の庭』3月29・30

日。『二〇世紀』(作・演出

／平石耕一)1部は杉原千畝

(センボスギハアラ)夫妻の

苦悩を描く『払暁(ふつぎよ

う)』2部は旧ユーゴの民族

紛争を題材にした『ホーム

ワーク』は4月1日〜6日。

55年ぶりで和解に至った、

秋田の『花岡事件』を題材に

した『勲章の川』(作／本田

英郎・演出／高橋左近)は4

月7・8日。

劇団員有志ではじめた平石

耕一ワークショップ『掌劇場』

は平石の書き下ろしをテキス

トに6回目を終えました。

そして、5月からの全国巡

演は『勲章の川』と4年ぶり

に再スタートします『十二人

の怒れる男たち』(作／レジ

ナルド・ローズ・演出／稲垣

純)。(都司)

〔青年劇場〕

全国の皆さんお元気ですか？

21世紀の幕開けを青年劇場は

チェーホフの『かもめ』で迎

えました。ロシア・サンクト

ペテルブルク国立青少年劇場

から首席演出家のセルゲイ・

カルギン氏と、美術デザイ

ナーのキリル・ビスコウノフ

氏を招き、小劇場企画No.15と

してシアターサンモールで計

7ステージ、1741人の方に

に見ていただくことが出来ま

した。

劇団にとっても初めてのチ

ェーホフ、青年劇場の新しい

挑戦は全劇団員に大きな刺激

を与えてくれたと思います。

さて今回の第78回定例公演

は『殞(よ)の海』(平成11年度文

化庁舞台芸術創作奨励賞受賞

作品) (作／島田九輔・演出

／松波喬介)です。(社)日

本劇団協議会主催で青年劇場の製作です。戦時中に犯した罪を背負い、その罪の許しを得られる日を待ち続ける夫婦を主人公に、舞台は戦中と現代(1988年)を行き来します。天皇の戦争責任問題、従軍慰安婦や強制労働問題、肉親を失い、縁者を失った多くのひとたちの悲しみ等々、未だ解決されていない戦後の時代そのものを問う『殞(よ)の海』6000人を超える観客目標です。

4月12・23日
紀伊國屋サザンシアター
25日 前進座劇場
5月からは『真珠の首飾り』
『愛が聞こえます』『こんにち
はかぐや姫』『17才のオルゴール』と4つの公演班が次々と全国巡演に出發します。お近くでの公演の際はぜひご観劇下さい。その中で、ジェームス三木／作・演出の『真珠の首飾り』は憲法の制定に関わ

った人々を描いて、昨年に引き続きの再演が決まりました。すでに協力いただいている全リ演の仲間の皆さんも多いのですが、一層のご支援をお願い出来れば幸いです。

5月11日 松戸市民会館(千葉)
13日 大山町民文化会館(富山)
15日 吹田メイシアター(大阪)
16・17日 京都府会館第2ホール
19日 彩の国さいたま芸術劇場
20日 平塚市民センター(神奈川)
22・23日 森の宮ヒロテイル(大阪)
24日 神戸文化ホール
25日 河内長野ふりいホール(大阪)
28・29日 朝日生命ホール(新宿)
30日 立川市民会館(東京)
6月1日 調布グリーンホール(東京)
3日 船橋市民文化ホール(千葉)
8日 枚方市民会館(大阪)
9日 西大寺市民会館(岡山)
11日 名護市民会館(沖縄)
13日 具志川市民芸術劇場(沖縄)
14日 那覇市民会館(沖縄)
18日 マティダ市民劇場(沖縄)
19日 石垣市民会館(沖縄)

3月8・9日と劇団総会が開かれます。2年に1度の大切な節目、劇団員の気持が通じ合う充実した時間にしたいためです。(中谷 源)

〔演劇サークル 麦の会〕

全リ演の皆様、お元気で活躍のことと思います。

さて、私も、麦の会は、

昨年10月に『黄昏』を上演し

ました。久々の外国もの、地

味な作品でしたが、黄昏期を

むかえた老夫婦の愛情と、娘

夫婦の葛藤を描いた構成のガ

ッシリした作品と、キャスト

陣のガンバリで思わぬ評判を

得ました。ホッと胸をなでお

ろしました。

今年に入って、2月に定期

総会を開き、新たな思いです。

今年には創立以来49年をむか

え、半世紀近くの演劇活動を

続けてきました。しかし、会

員も高齢化してきました。『ぜ

ひ続けてこれからも良い芝居

を見せてほしい』と期待と支援をしてくださる観客のためにも「がんばっていいこう」と総会で話し合いました。10月に東京働くものの演劇祭、麻布演劇市に参加して、公演を行います。現在、会員一同で公演台本を検討中です。よろしくおねがいします。(吉岡)

〔京浜協同劇団〕

昨年11月に、神奈川県演劇

連盟の40周年を記念して、7

劇団が合同で『西遊記』を上

演しました。集団で脚本をつ

くり、加藤直氏に演出をお

願いしたものです。違う集団

そして演出との初めての触れ

合い、どれも新鮮でした。い

ろんな創造方法から学ぶこと

の楽しさを味わうことができ

ました。

次回公演は、藤田傳作「と

りあえずの死」を内田勉の演

出で4月14日から23日まで

「スペース京浜(劇団小劇場)

で行います。満蒙開拓団としてかり出されていったものの、永久に帰れなくなった中国残留婦人を描いた作品です。交通事故で頻死の重傷を負い今も車いす生活の鬼丸ゆりが7年ぶりに舞台に復帰します。鬼丸(本名は石倉邦子)夫妻は、最近「読売」、「東京」の全国版でも報道され、TBSテレビでも放映、話題となつています。

ところで、早川昭二編集長のご逝去は本当に無念でなりません。私たちは7年前「郡上の立百姓」で演出をやっていたとき、11年前の関東ブロック合同公演「西風に起つ」でも演出として大きな力を發揮していただきました。城谷護は早川さんが亡くなられる前の2ヵ月間、毎週病院にお見舞に行っていました。その都度、「全リ演はもつと若い人たちの力を引き出さなければ……」、「こんどの議長団

会議にはばくもよくなつて出席するから」と口ぐせのように言っておられました。

早川さん、お疲れさまでした。ありがとうございます。

〔劇団 やまなみ〕

1月は大雪で、稽古場のあたりと前の道路が通行できず、劇団員の必死の雪かきでようやく通行可となりました。

2月3日(土)、第8回山

梨演劇合同公演が4作品(創

作劇)7劇団の参加で開催さ

れました。やまなみは河野通

方／作「あした」を、演出／

梅津幸三で、スタッフは統一

でキャストは参加劇団員まぜ

こぜで50人が参加しました。

3月24日(土)は須玉町(北

巨摩郡)教育委員会主催で「あ

した」と梅津・坂本両氏の語

りで公演することが決まり、

合同公演で不十分だった点を

稽古しています。

最近各教育委員会から甲府市以外での公演要請があり、ますます地域に根をはった演劇活動をやっています。

今年の7・9月に2001年こうふ演劇祭がありやまなみは「ピアノアン」久保勝／演出で参加します。また忙しい1年になりそうです。

(久保)

〔劇団 静芸〕

昨年1年は稽古場改築にあぐれ、そのうえ、12月に予定していた、川崎照代／作「野分立つ」が、作者の要請で上演許可がえられず、公演を中止することになり、公演活動ができなかった。

新稽古場での稽古第1作は、しずおかファミリー小劇場(市委託公演)で、さねとうあきら／作、脚色「おこんじようるり」(伊藤幸夫／演出)の公演で今年の幕をあげた。長田公民館、南部公民館

の2カ所での公演。観劇申込は、即日満席であった。作者

さねとうあきら氏が、静芸のために脚色してくださった作品であり、煩雑さや説明的な人物をそぎ落としおぼろげとおこんの線を太く中心にすえたドラマ性の高い脚色であった。さねとう氏に深く感謝の気持ちで一杯である。2月18日の長田公民館の上演も大人から子どもまで好評であった。

6月10日(日)静岡市文化祭で、松田正隆／作「紙屋悦子の青春」上演予定。

また11月24日、25日と小島真木／作「巴川界隈」の地元、清水市で、作者の出身校の清水西高同窓生が主催しての上演が決定し、すでに、入場券の発売が開始され、劇団は身のひきしまる思いで、今年度の活動にとりくみはじめたところである。

(山崎三郎)

〔劇団 からつかぜ〕

こんにちは、劇団からつかぜです。毎日寒い日が続いていますが、いかがお過ごしですか。2000年は「アネネの日記」平井新／演出で

10/7(土)劇団からつかぜ8(日)アトリエ公演(からつかぜ稽古場)

10/22(日)村櫛公演(村櫛公民館)移動

11/18(土)浜松市芸術祭公演(福祉文化会館ホール)

12/10(日)いさだ公演(竜洋町いさだホール)移動

全部で5ステージを上演することができました。

12/30(土)には、恒例の大掃除と餅つき大会で2000年の幕をおろしました。

2001年1/27(土)に今期の重点目標が決まりました。

「1000人の観客に見てもらおう」(実現のため劇団員を倍化しよう)となりました。

現在、すきま風の吹く劇団の稽古場で、ストープを開き、

レバ選の真っ最中です。次の上演作品をお知らせできたら良かったのですが、あと数日で決まる予定です。

乞う、ご期待!!

〔劇団 名芸〕

昨秋の第50回公演「米泣く村に、米降る街に」は、通常の5ステージに加えて、文芸連全国交流集会でも取り上げてもらい、合計約600人のお客さんに観ていただきました。テーマとしては最前線から少し離れたかに見える問題でしたが、多くの方々に重い課題として受けとめられたようでした。

年明けからは次の公演を目指してのケイコが続いています。

●第51回公演・文化小劇場芸術公演
シェイクスピア「十二夜」

脚本／栗木・演出／佐野秀明
5/18(金)19(土)名古屋
市天白文化小劇場

名芸の苦手とする喜劇ですが、なんとか努力して楽しい舞台にしたいと思っています。

引き続きは夏恒例の子ども劇場で、日程・会場は9/8(土)天白、9/22(土)南と確保して現在レバ選定中です。

その間を縫って、今年是在名の反核文化団体等が共同して「グローバルピースフェスティバル2001」という大イベントを企画中で、栗木作品「神話」(演出／木崎裕次)の上演も含めて、8/4(土)5(日)、市公会堂と鶴舞公演を反核平和を願う人たちに一杯にしようと準備をすすめているところです。

秋から来春にかけては全体会の合意が条件ですが、名古屋市文化振興事業団公募の入選作「合縁奇縁」(作／千葉

茂)の上演や研究公演を連続して企画しています。来年は劇団創立40周年にあたる年でもあります。その歴史にふさわしい仕事をしたいと念じています。

〔追伸〕

昨年、東・西合同の作家会議を行いました。それ以降、参加した渡部将之(名芸)や島田たろう氏(個人)は精力的に作品を書いていきます。渡部の「追憶の海」は長久手町の劇作家シンポジウムで上演され、3月にも新作「和泉守兼定」が、はせひろいち／演出により上演されます。若手の活躍にご期待を!

(栗木英章)

〔名古屋演劇集団〕

1月に入ってから早速、4月の公演へ向けての稽古が始まりました。21世紀1発目の公演は本公演ではなく、「デアトロ5(ファイブ)」名で

のプロデュース公演です。「デアトロ5」とは、劇団演集の若手精鋭陣を軸とした新劇団です。

劇団演集プロデュース劇場
デアトロ5公演「ONとOFFのセレナーデ」古城十忍／作・狩野恭光／演出

会場 名古屋市西文化小劇場
日時 4月11日・13日 4ステージ

新人だけでなく、ベテラン陣も出演します。近年になかった、新しい試みであり、劇団演集としても21世紀最初の公演なので、一同ハッキリしております。乞うご期待!

(磯谷 誠)

〔劇団名古屋〕

昨秋、一つの世紀をしめくくる意味も込めて井上ひさし・作(久保田明演出)の「泣き虫なまいき石川啄木」を上演しました。20世紀の初頭、家族と貧困を背負いながら創

造活動に苦闘する啄木は、100年を経て笑い飛ばす存在になり得たか。否、どうしてもせつなく響く啄木の言葉、啄木の行動。なにほども解決し得ぬまま次の新しい世紀に入り込んだような気がしました。舞台は概ね好評でした。しかし、劇団が劇団として今後名古屋の地においてどのように存在し得るか。公費の助成が後退しつつある中で、財政的裏付けをどう確立するか。職場の状況も決してよくなく、啄木と同じ……。

今年は6月9日・11日に春の公演。8月4日・5日にグローバルピースフェスティバル参加の仕事。12月には稽古場のある名古屋市熱田区にできる文化小劇場こけら落とし公演。外枠は決定済みです。中身を鋭意検討中。いえ、焦りながら模索中です。

〔劇団上野市民劇場〕

昨年11月18・19日に、20世紀最後の公演となった『僕のメリーゴーランド』（作／近石緑子・演出／杉森正美）は好評のうちに幕を閉じ、ほとととする間もなく21世紀に入り

ました。いよいよ当劇団も創立50周年を迎えることとなり

ました。この地に根ざして50年―戦後間もなく創立され、地域の人々に生きる勇気や希望、愛や命と平和の大切さを与える演劇の創造をめざしてまいりましたが、みなさま方に励まされ助けられて、やっと50年を迎えることができ、また50年を厚くお礼申し上げます。さて6月3日には50周年記念の祝賀会を予定しており、今はその準備や記念誌の作成に大忙しの毎日です。

以下に今後の公演予定をお知らせします。

◆5月19・20日
第39回公演『芭蕉翁桃青―そ

の内なる枯野から』（作／島田九輔・演出／杉森正美）

◆9月30日

第40回公演『忍びの者』（作／村山和義・演出／杉森正美）（大東みほ）

〔劇団すがお〕

桑名演劇塾公演『桑名開城 その前夜―戊辰物語』2月24日（土）昼夜2回公演―桑名市民会館1800人

創立40周年を迎えた今年の初仕事は、劇団すがおと公募の市民でつくる創作演劇、第3回桑名演劇塾公演である。経費の問題で、昨年度に創作脚本を作成―これは劇団名芸の栗木英章さんにお願ひ―して今年度公演という2年度にわたる分割事業である。

明治維新前夜の揺れ動いた桑名藩の様を演劇にしたいという、劇団代表の願望がかなえられ企画が進められた。出演者総数29人、演出は桑名在

住の元歌舞伎俳優、衣裳は遠く東京から調達しての公演で好評だった。

この演劇塾に関わった人たちのネットワークを大切に、してその後の相互援助を行っている。もともと観客として、あるいは賛助出演を仰いだりして劇団が一方的な援助をもらっているが…

観客総数1800人は劇団単独では達成できない大きな数字。市民の関心の強さを物語っている。日頃から演劇に縁のない市長、殿様の末裔、市議会関係者等々の面々や、新住民、旧住民（そんな言葉があるのか）が観劇してくれて、フェスティバルのような公演であった。企画は二部構成で、一部「くわなをどり」で桑名芸者のオンパレードの付録までつけたのサービス。次回公演はまもなく決定するが、けいこ場公演を計画中である。

〔劇団 夜明け〕

21世紀最初の公演。劇団創立45周年記念公演の第1弾。

記憶しておかねばならない20世紀の様々なことを、稽古をくり返しながら学び、追体験し、21世紀へつなげていく大切なことをつむぎ出し、伝えていく舞台を創りたい。そんな想いで選んだ作品、井上ひさし／作『闇に咲く花―愛敬稲荷神社物語』の稽古を昨年12月より進めている。読み合わせに時間をかけた。今年の1月は本場に雪がよく降った。週3回の稽古日が、雪のため中止した日が1日ですんだのは幸いだった。

でも稽古が全員そろってできる日はそう多くない。仕事の都合、風邪をひくなど体調不良、家の都合…代役での稽古は辛い。でも役者の日々の読みが、稽古場での交流を深めていく。初めて演劇に挑戦する25歳の青年の読みのレベ

ルも上がってきた。

2月19日稽古場に仮セットを組み。立稽古が始まった。正月をはさんで半月ほど休みをとったが、読み合わせを始めて約2ヵ月。公演まで2ヵ月弱。楽しくて、充実した稽古になるよう努力すること。そしてチケットを多く売る気持ちになる稽古ができること。

劇団夜明け創立45周年記念公演第1弾・第21回小劇場公演・No.50定期公演・中津川市文化祭演劇祭公演

『闇に咲く花―愛敬稲荷神社物語』（井上ひさし／作・鈴木弘文／演出）

4月19日（木）午後7時

20日（金）午後7時

21日（土）午後2時／7時

22日（日）午後1時30分

中央公民館ホール

（鈴木弘文）

〔劇団 はぐるま〕

岐阜市民芸術祭、演劇の部

合同公演『円空になったババ』（略して『円ババ』が無事終了しました。4ステージでき

つちり1600人のお客様でした。この公演は、劇団ラッキーキャッツの林大輔君に台本を依頼する際に、作者から「はぐるまの汲田さんが演出なら」と、条件が付いて実現したものです。

汲田さんもそれに応え、円空の生きた時代と現代を行き来するダイスケワールドを舞台に表現しました。いくつかの集団が参加する合同公演です。ほかの劇団の舞台を見ていて、顔は知っていても、以前、はぐるまへ応援出演してくれたことのある一部の人を除き、一緒に芝居を作るのは初めての人たちばかり。それぞれが、各集団で主役を張れるメンバーであり、なんとも個性的な芝居作りになりました。今まではぐるまのやり方が悪い、とは言えないけれ

ど、外からの刺激を受けたこととで、この先少しはみんなの物の見方も変わるかもしれません。観劇交流も大切だけど、

こういった合同公演も、数年に一度は実現させたいものだと思います。演出も各劇団持ち回りです。準備とか大変だけど…

劇団の春の公演は『鉄道員（ぽっぽや）』です。こぼやし

がほれ込んで、上演となりました。演出はこぼやしひろし。この本については、説明は不要だと思いますが、今失われつつある親子の愛情、仕事への情熱、一途な人間の気持ちなどをどう舞台で表現するか、特に若い劇団員には重要な課題になっています。場所は御浪町ホール。3月3日から20日まで19ステージのロングランです。

この公演のためではないのですが、以前から問題になっていた御浪町ホールの椅子

を、中古ですがクッションのきいた劇場用のものに替えました。定員は85人に減ってしまいましたが、ゆったりと舞台を楽しんでもらえるはずですよ。

夏のミュージカル劇場は、『魔の森の黒鬼と銀のシギ』を再演します。岐阜市民会館、7月20日・22日です。

はぐるまホームページをやつとのことで立ち上げました。3年ほど前から、いつかは、思っていたのですが、技術的なことや、更新の担当者などの問題があつて、のびのびになっていたので、まだ、とりあえずのものしかできていませんが、これから充実させていく予定です。一度、のぞいてみてください。

<http://www4.ocn.ne.jp/~haguruma/>

（内田 薫）

【劇団 たけぶえ】

雪国のわが劇団は残念ながら11月の公演が終わると、年末年始をはさんで4月頃まで冬眠状態に入ってしまった。もちろん劇団としては活動日程など組んではいるのですが集まりは極度に低下してしまっています。吹雪の時など、集まっても来ない団員たちにブツブツ云いながら事務局が、稽古中止の連絡をしている複雑な光景もたびたびあります。

このような状況を打破しようと、今年は4月の25・26日に春の公演を設定しました。それでも近年にない大雪で、稽古より雪との闘いが優先した日が何日もありました。

さてその春の公演ですが、日本近代一幕劇シリーズの第2弾で、小山内薫の「息子」(これは一昨年の韓国・馬山国際演劇祭に持参したものです)が、未だ地元での公演がさ

れておらず今回取り上げたものです」と、小山内薫の妹・岡田八千代の「黄楊の櫛」です。(発表当時、日本の「人形の家」とも言われた作品です)。ともに大正11年と元年の作品で、若い団員たちには読めない漢字やあて字・読み替えなどに戸惑いながらの取り組みですが、本読みを重ねるにつれて次第にその魅力にとりつかれています。

また、今年から韓国「劇団馬山」との合同公演に向けた企画を始めました。海外の劇団との合同公演は98年にポルトガルの「フアティマス・デ・カ」との間ですでに経験がありますので勝手は分かっています。近くて遠い国、と言われる日本と韓国との間には大変難しい問題が数多く存在していますのでまた別な困難さがあります。

そうしたものを直視した上での合同作品創りにしたいと

考えていますので、充分時間をかけて(3年計画で)準備をすすめて行きたいと思っています。3月17・20日に李代表ら3人を武生に招聘し第1回の討議を始める予定です。

(柴野)

【劇団 京芸】

こんにちは、京芸です。

2000年は劇団の創立50周年の大芝居「文珠九助」を動員3500人という大盛況のうちに終えることができました。多くの方々のご協力あつてのことと、劇団員一同心より感謝しております。これからまだ50年は続ける予定ですので、百周年の時もどうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、明けまして新世紀。今年の京芸もお見逃しなく。9月14・15日の両日、京都呉竹文化センターで新作大発表! 作・演出に鈴木哲也氏を迎え

てお送りする、「竜馬はどこへ行った」(仮題) > 昔も今も若者の悩みはたひとつ、「自分は何を成せばいいのか!」に迫る痛快時代劇です!! 何だか毎日おもしろくない、悩みで一杯だつというあなた、ぜひとも見に来て下さい。全部吹きとばして差し上げます。

今年は俳優教室から新人が4人も入団します。とても楽しみです。何事にもくじけずがんばってね♡という気持ちで育ててゆきたいと思っています。

21世紀を迎え、めでたいことに京芸の代表、藤沢薫も古希を迎えました。今まで後輩に祝ってもらったことがない。という彼に、なんと今年は俳優教室生がケーキを焼いてくれたのです。「この年になつても経験だけで芝居をするのでなく、命あるかぎり自分を磨いてゆきたい」という誓いの言葉も聞けて、本当に良

かったです。おめでとうございます、藤沢さん。これで市バス乗り放題だーっ。

(赤土綾子)

【劇団 未来】

稽古場は今、2月16日(金)18日(日)の、清水敏/作・森本景文/演出の「1995こうべ曼陀羅」に出演する、建て込み18尺もあるパネル、変形している病院の壁パネル、張り出し舞台用馬、長い変形開帳場、壊れた扉、カウンター、階段等が並び、できあがって大きな顔しているやつ、これから化粧してもらうやつ、図面上で待っているやつで埋もれています。

今回は合同公演のため関係劇団の裏方が集まり、自前で作っています。各劇団の物語りにも個性があり、誉めあつたり、貶しあつたり、作りにミスマッチが生じたりしますが、居酒屋へ行くのはマッチ

しています。たぶんすばらしい装置になっているでしょう。

稽古場は装置作りに明け渡していますが、森本代表(演出担当)をはじめ、各役者は劇団大阪の稽古場で最後の仕上げに精を出しています。ここでは「演技・演出批評と役作り交流」が盛んにやられています。きつとアンサンブルのとれた舞台になるでしょう。

今後の活動予定は、3月に劇団総会の開催。6月に大阪春の演劇祭に参加することは決まっていますが、他は何も決まっています。目下、合同公演に全員が取り組んでいます。

(藤岡)

【関西芸術座】

●宮武外骨自叙伝―吉野孝雄編―「予は危険人物なり」、藤田傳/脚本・演出。この作品で21世紀の幕を開けた。1

月19日(金)20日(土)、森ノ宮ピロティホール、2ステージ。【お母さん疲れたよ】以来の大阪労演例会である。

この作品は宮武外骨を舞台化できないかと10年来企画していたもので、ようやく藤田氏の脚本で実現したものである。昨年の11月から同氏を客演出に迎えて稽古に入った。

当初は従来の劇団演出にはない刺激的なダメ出しに戸惑った演技者たちも次第に慣れ、藤田氏ファンが急増した。

正月休み明けから本格的な結めの稽古に入る予定だったが、主役の五王が急病のため配役変更を余儀なくされ稽古場は張りつめた空気に覆われた。

観客の反応は様々であるが外骨の反骨ジャーナリスト魂をもっと描いて欲しかったという意見も多く、全国演鑑連巡演を予定している劇団としては本の手入れを藤田氏と相

談中である。

●スタジオ公演No.36が決定した。一般公募佳作、津々見俊丈/作の「わりかん」。演技部の梶本潔が今回初めて演出に当たる。配役も決まり、現在作者と改稿についての話し合いが進められている。上演は5月16日(水)20日(日)、7ステージを予定。

●好評をいただいている「遙かなる甲子園」(原作/戸部良也脚色/西岡誠一、演出/鈴木完一郎)は昨年末で295ステージを数えこの3月で3年目を終えるが、続いて2003年3月まで続演を決定。配役も一部変更しさらにパワーアップし巡演に備える。現在新メンバーは手話など取得中、3月からは演出を迎え気分一新で稽古に入る。

●「甲子園」と平行して巡演中の「蕨ینگ」(原作/岡田なおこ、脚色/宮地仙、演出/玉野井直樹)も3年目を

迎えた。あと1年爽やかさと感動を伝えていきたい。

●この2作品に続いて、来年4月から中・高校生の演劇鑑賞を中心に、全国高文協、子ども・おやこ劇場例会巡演を予定しているのは「ビート・キッズ」(原作/風野潮、脚色/斎藤樹実子、演出/高瀬久男)であるが、先行して9月5日(水)・9日(日)、関芸スタジオで一般公演を行う。脚色も一稿目が出来上がり、現在若干の改稿に入っている。演出の高瀬久男氏は文学座から招聘した。配役は劇団内オーディションで選ばれた。作品の若者たちは中学のブラスバンド部のメンバーたち、天才的ドラマーともいわれる少年も登場して、配役された若い俳優たちは楽器を猛練習中。ドラムスを担当するのは昨年からプロのドラマーについて猛特訓中。9月その成果が問われる。

この作品は秋の大阪新劇フェスティバルにも参加する。移動公演は来年の4月からになる。招聘演出家と若い俳優たちのぶつかりあいでのビートに満ちた感動を伝えたい。

●「宇宙のみなしこ」も、全国の中学校・子ども・おやこ劇場を巡演して3年目に入った。今年は広島・岡山県文化庁巡回が決まった。また、子ども・おやこ劇場公演も順次決まってきた。

●20日幕を閉じた大阪新劇団合同公演「1995こうべ曼陀羅」(作/清水巖、演出/森本景文)には劇団から藤山喜子、山本弘2人のベテランが参加した。最終ステージを拝見したが大盛況、入場者は2300人を越えたと聞く。合同公演のエネルギー爆発ということだろう。

●何はともあれ21世紀は幕を開けた。社会状況は一向に好転の兆を見せない。劇団の内

情も楽観を許されないが、関西芸術座は新しい年を自前の創作劇でラインアップを固めた。ご期待を乞う。

(亀井賢二)

〔劇団 大阪〕

秋の本公演「海の沸点」(10/20・22が終わり、総括もそこそこ)に11月12日、新劇協プロデュース・自演連合同公演「1995こうべ曼陀羅」の第1回稽古に突入。12月に入ると、3日現地調査、7日久語氏(神戸・劇団四紀会/震災罹災者)を迎えて体験談を聞く会、17日参加劇団合同忘年会、年末も押し詰まった28日まで稽古。そして、新年4日から稽古再開。と、「こうべ曼陀羅」一色の毎日です(ただし、合同公演参加者のみ)。お陰で12月の定期総会も開催できず、今日に至っています。とは言うものの、総会が開けないのは「こうべ曼陀羅」

のせいだけではありません。

劇団は創立30周年を迎えました。しかし、「30周年をどう迎えるのか」「40年、50年に向け展望は？」「若い劇団員を増やすには？」等といった問題がなかなか深まらず、公演企画も決まっています。合同公演が終わる次第総会を開き、一気に30周年企画に突入することになるでしょう。

(公演予定)

2/16・17・18 「1995

こうべ曼陀羅」作/清水巖

・演出/森本景文

於:エルシアター(府立労働会館)

2002/2/22・23・24

(新劇協合同・劇団大阪プロデュース)

『大転換』(仮題)作/井上

満寿夫・演出/熊本一

於:近鉄小劇場

〔劇団 きつがわ〕

大阪自演連第8回合同公演

『1995 こうべ曼陀羅』(2月16・18日、エルシアター)は、4ステージで合計2300人のお客様に観ていただき、無事終えることができました。あの震災を風化させないための貴重な取り組みとしてテレビや新聞でもとりあげられ注目を集めたこの公演に、若い人を中心にスタッフ・キャストで奮闘し、成功の一翼を担うことができました。公演参加の皆さん、本当にご苦勞様でした。

さて、合同公演終了後、劇団は3月初めに劇団総会をもち、春の公演「月光の夏〜挽歌」(6月9・10日、クレオ大阪西)の再演に向けて意志統一をし、ケイコを開始していく予定です。昨秋の「月光」公演では、アンケート等で感動的な(?)感想が多く寄せられました。「なんとすばらしい!もう涙、涙、目がかすんできます。平和

の尊さ、戦争のひどさ、むなしさ、そして悔しさ。そんな想いがいっぱい溢れる、すごい舞台でした」「映画よりよかった!脚本をほめたい、役者をほめたい。きつがわが始まって以来のよいできでした」「等々」この感想、期待を裏切らない、もっと完成度の高い練りあげた舞台をめざして、再演のスタートを切る覚悟です。

(山田)

〔演劇集団和歌山〕

3月6日から18日まで稽古場で上演する、松田正隆/作・山入桂吾/演出「紙屋悦子の青春」に向けて忙しい毎日です。この公演は新人を中心とした公演になります。

昨年は、阪中丈夫の「馬」を本公演の他、高校公演等、3カ所上演しました。おかげで財政も少し潤い、アゼリア賞の賞金とあわせて100万円近く、音響、照明器具を

購入しました。また、劇団員よりの借入金の一部を返済するなど万年赤字体質の劇団としては画期的な1年になりました。さらにこの1年間で新入団員が6人入るといって、これもここ数年来の大量入団がありました。劇団はちよつとしたバブル状態ですが、和歌山の景気は、次々と大型店が開店するなど暗黒時代。景気に関しては明るい話題は皆無です。公務員以外はリストラの恐怖におびえながら、稽古場でつかの間の夢を見ています。

新人公演の後、9月に楠本による劇団創立30周年記念公演の創作劇に取りかかる予定です。まだ脚本は構想の段階。新作が書けるか、書けぬか、それが問題じゃ!

(楠本)

〔劇団 かすがい〕

21世紀の幕開けにまずは

『カタクチイワシ・ファイナル』と題して、2月16・18日の三日間、稽古場公演を行いました。

1997年の初演から少しづつ変化を加えて再演を重ねてきた『カタクチイワシ』も今回でひとまず区切りをと

「ファイナル」。今までより一層、観客の皆さんに親しみを感じてもらうと、セリフを初めて大阪弁にアレンジして、新たな気持で稽古に入っ

たのですが、関西出身のはずの役者が大阪弁のセリフに四苦八苦したり、団外の活動も並行してあったり、予想以上にバタバタと時間が過ぎていきました。

そして迎えた本番。お客さんたちの反応はというと?「次はどんなバージョンで公演するの?」「今までにも観てきた芝居なのに楽しめた」など、初めてのお客さんも、数回のお客さんからも、う

れしいお言葉をいただき、団員一同、ますます意欲的に、次の活動へとふみだしたところだ。

次の公演は、

3月23日(金)『花吹雪花巻
一之丞一座仇情 義信之花
道』尼崎アルカイックホー
ル・オクト

6月9日(土)・10日(日)
『尼崎市演劇祭』ビッコ
シアター

今回より劇団通信担当にな
りました、昨年団員になった
ばかりの松下です。よろしく
お願いします。

〔神戸職演連〕

こんにちは、神戸職演連で
す。いよいよ21世紀の幕開け
です。今世紀最初の公演も無
事終了しました。

神戸職演連第51回公演

【紙屋悦子の青春】作／松
田正隆・演出／菊地照一
1月27・28日 於：神戸

アートビレッジセンター

2日間で約300人のお客
様にお越しいただき、おかげ
さまで好評のうちに幕を閉じ
ることができました。アン
ケート回収率も過去最高とな
り、ていねいに書かれたアン
ケート用紙を1枚1枚大切に
読みながら、みなさまの反響
の大きさをかみしめておりま
す。そこには、今後も職演連
のお芝居を心待ちにしてくだ
さっている多くの方々の気持
ちが込められており、わたし
たちの大きな励みとなってい
ます。

次回公演については未定で
すが、観終った後に暖かい
気持ちになっていただけるよ
うなお芝居を今後とも創って
いきたいと思っています。

今世紀も神戸職演連をよろ
しくお願いいたします。

(衣笠)

〔劇団 四紀会〕

いよいよ21世紀の到来だ
くと思いきや、あつという間
に月日は流れ、既に初夏の気
配が漂っているのではないかと
思います。こんにちは！
お元気でしょうか。

毎年のことながら、てんや
わんやになる12月1月をくぐ
り、2月に初日を迎えた11
1回公演『風にのれ、ブッ
ビー』。家族劇場公演として
は、初のオリジナルというこ
とで、期待と不安のスタート
でしたが、反応は概ね好評で、
現在残り4カ所での上演に向
け、創造と普及に突き進んで
いるところです。

その一方で、懸案になって
いた『新開地物語』が9月の
上演に向け、ようやく具体化
してまいりました。その名の
如く、わが街神戸かつての文
化の発祥地「新開地」を舞台
にした、これまた創作物とい
うことで、今年は久々のオリ

ジナル・イヤー(?)になり
そう。

戦前・戦中・戦後を描き、
総勢50人を越えるであろうキ
ャストということで、市民参
加も呼びかけ、かなりの大仕
事になります『新開地物語』。
全り演の皆様、ご支援のほど
よろしく願います。

手前勝手なことばかり書き
ましたが、8月のゼミ成功に
向けても頑張りましょう。そ
れではまた。(里中)

★当面の予定(移動公演を除く)
・111回公演『風にのれ、
ブッビー』(前号参照)

・112回公演『新開地物語』

北島道善／作・内田昌夫／
脚色・岸本敏朗／演出
9月8・9・14・16日、神
戸アートビレッジセンター

〔演劇集団 あり〕

昨年11月26日創立30周年記
念公演とし、山本忠利氏／脚
色『ぼっばや』を宮倉／演出

で昼夜2回公演しました。6
00人以上の観客目標に対し
510人と目標を下回りました。
日本国中活動の困難さは
同じで、グチを言うのはオロ
カですが、時間が足りない、時間
が合わない、人が足りない、計
画中できない、金もない、計
画も立たない、話し合えない
：最近特にひどいです。

30年続け、「演劇創造」は
もちろん「集団の維持発展の
創造活動」？である観客や
支持者との人間的接点を強め
広めることを、改めて実感し
ました。財政上道具造りはす
べて自前ですが、超人手不足
のため、日頃交流のある高校
演劇部の強力な応援を受けた
り、団員の友人のプロの大工
さんの2日間もの指導援助も
受けました。

結婚した娘が世話になって
いたと、現職JR職員が30枚チ
ケットを受けもってくれまし
た。特に「ぼっばや」故に鉄

道OB会・JR支社の後援もと
り、駅長・管理者にも文化の
訴えもでき、今まで演劇に関
係ないと思っていた人々が、
ホールに足を運んでくれまし
た。キャラメルボックスだけ
しか観たくない、と言った若
者が、涙して席をたたない姿
：等に、小さな展覧の芽を見
ることができました。

次回公演は、5月21日、市
文化ホールで結城翼／作『ザ
・ウインド フロム サイレ
ンス』を若い森山威比古／演
出で公演します。若者中心で
古手がバックアップするとい
う体制です。(宮倉)

〔劇団 演劇街〕

(雑記)

叔父が逝った。元前進座に
いた劇作家である。

が、私の知っているのは、
御茶の水のホテルのコックで
あり、私の父に似てどこか不
器用そうな男だったというこ

と。生前、あまり付き合いが
なかった。前進座を辞めた後、
テレビ局にドラマの企画など
持ち込んでいたらしいが、放
送されたという話も聞かない。
劇作家としては成功した
とは言えなかった。

が、彼は二人の子どもを残
した。姉は新宿梁山泊で女優
をやり、弟は自分たちのグ
ループをつくって芝居の公演
を打っているという。死んで
名は残せなかったが、演劇の
遺伝子は二人の子どもに受け
継がれ、世に残った。

(通信)

【おうこくの木 ケーナと
ニトの物語】(作／広島友好
・演出／柳沢悟)を山口県教
育会館で山口大学教育学部付
属中学の全校生徒約500人の
前で上演。好評でホッとし
ました。アンケートによると

次の三つの点が彼らの心を捉
えたようです。
一つは、仮面。仮面劇は初

めてという生徒がほとんど
で、仮面を付けた役者の演技
に深い感銘を受けた模様。二
つめは、父親候補役の柳沢悟
の一人五役の演技。劇のラス
トに舞台上で種明かしをする
のですが、あまりの驚きに劇
場全体がうねるほどでした。
三つめは、天使役の河野真弓
の演技。彼女はほとんど台詞
のない役なのですが、そのキ
ャクターと演技で生徒たち
の心をつかみ、芝居の最後の
方はただ歩いて登場するだけ
で劇場が笑いに包まれるほど
でした。【おうこくの木】は
これで一応打ち上げ。また再
演の機会をつくりたいもの。

次に予定されているのは劇
団有志参加の秋吉台国際芸術
村主催の日韓合同公演ブリッ
ジの、『真夏の夜の夢』(シェ
イクスピア／原作、パク・ス
ジン／脚色、広島友好／日本
語アレンジ、柳沢悟／演出)、
3月24・25日、秋吉台国際芸

術村野外ステージ。

ただ今稽古の真つ最中ですが、日本側はもちろん、韓国の演劇人たちとも始めてのコラボレーションで戸惑いも多いのですが、収穫もまた多いと言ったところ。野外ステージでの公演、どういった芝居になりますか。

個人的にはありますが、拙作の上演が京都・大阪であります。関西では初めての上演、今から楽しみです。

『ちとせ、ふたたびの—私小説家嘉村磯多亡き後の—』創造集団アノニム公演、演出／菊川徳之助 2月24日午後1時半開演、京都府立文化芸術会館3F和室(Kyoto)演劇フェスティバル参加、アノニム戯曲賞佳作受賞作品

『ヒロシマのマチエール』素(す)の会公演、演出／栗田 4月13日午後7時半・14日午後2時、7時半・15日午後2時開演 (広島友好)

〔劇団 若者座〕

久しぶりに近況報告します。

毎年春には、子どもを対象に公演していましたが、昨年の春は、別役実／作・武田ちあき／演出による『天神さまのほそみち』を上演しました。今までのレパートリーにはなかった作品で、若者座も「こんな芝居ができるのだ」と反響も上々でした。

秋に定期公演として、砂本量／作・大迫隆茂／演出で『レンタルファミリー』を2ステージ、そして山口県民文化祭参加として油谷町文化会館で1ステージの公演でとりあえず2000年は終了しました。今年も春と秋の公演をめざして今から取り組む予定です。

追伸 平成13年1月の総会で「宇部市民劇団 若者座」を「劇団 若者座」に名称変更いたしましたので、よろし

くお願いいたします。

〔劇団 あしぶえ〕

2001年11月8日から11日まで、「第一回八雲国際演劇祭」が開催されます。国内外5劇団がコンテスト方式で競演。カナダと日本(あしぶえ)の特別公演も行います。現在八雲村では、その準備が着々と進められています。

1月22日には、広く村民に向け、「演劇祭の説明会」が開かれました。126人の出席者は、「99八雲国際演劇祭」の映像や取り組み姿勢の新鮮さに、より関心を持たれたようです。今のところ参加劇団は選定中ですが、すでに各委員会の準備は始まっています。4月からは、ボランティアスタッフの募集も始まります。

春公演の「二十二夜待ち」と、旅公演の「ゼロ弾きのゴージャス」の同時進行の稽古が始

まりました。

「ゼロ弾きのゴージャス」は、6月10日に隠岐・西ノ島町。そして、「二十二夜待ち」は、7月15日に県内の斐川町公演。6月24日、7月1日、29日には、しいの実シアターで公演します。詳細をお知りになりたい方は、しいの実シアターまでお問い合わせください。

(原 敬彦)

〔劇団 テアトルハカタ〕

昨年、福岡市主催による劇団協議会(現代劇場、生活舞台、夢工房、テアトルハカタ、銀色のくじらの合同公演「夏の夜の夢」作／シェイクスピア・訳／松岡和子・演出／猿渡公一。公演当日いつもの客層と違うお客様をお迎えでき皆喜んでいました。

平成13年度も恒例の親子文庫主催「アリババと40人の盗賊」作／徳満亮一・演出／中村ジョー、1月21日、会場

大野城まどかびあ大ホール。

親子文庫とは、子どもたちに本を読ませよう、親子で本を読み、会話ができれば会話をしよう、を主旨に20年になります。その子どもたちの本を読んだ中でのリクエストをとりそのリクエストのベスト5の中で作品を、テアトルハカタが作品にして観ていただき、観たあとで親子で会話なり、感想文なりを書いていただきます。特異な教育をさせていただきます。その主旨に感動して7年目になります。

卯月公演は「楽屋」作／清水邦夫・会場／ボンブラザホール、4月21・22日実験劇場として、女優、ペテラン組と若手組にキャストして演出に先輩の野口ひろとし(東京在住)をお迎えして久しぶりに創りあげていただきます。夏休みファミリー劇場は、音楽劇「風の中の天使たち」作／中村ブン・演出／中村ジ

ョー。舞台は「熟」スーパ

アカデミーエリートクラス、勉強勉強、成績が良ければ将来も人生も広がる。いや、勉強よりも大切なものがある、「たわし先生」、わしがそれを一緒にみつければ、そんな音楽劇を子どもたちとテアトルハカタで挑戦しようじゃないか? 期待して観ていただければありがたいです。上半期のスケジュールでございます。

初心に返って芝居創りに精進します。(中村)

〔福岡現代劇場〕

福岡市劇団協議会合同公演「夏の夜の夢」作／シェイクスピア・訳／松岡和子・演出／猿渡公一を、2000年11月25日(2時、6時半)26日(2時)3ステージ、福岡市少年科学文化会館大ホールにて上演。参加劇団(銀色のくじら、劇団生活舞台、テアト

2月刊行

『一本の金線』

人間愛を貫いて演劇活動に生涯を捧げた若尾正也

編者 若尾隆子

愛知書房製作

頒価 1000円(送料別)

〔お問い合わせ先〕

(株)若尾総合舞台 総務

〒464-0850

名古屋市中千種区今池

2丁目14-17

TEL 052-732-3755

FAX 052-733-7821

ルハカタ、福岡現代劇場、夢工房)

この合同公演も幾度かの試練を乗り越えて現在まで続いています。「継続は力なり」とはこうしたことを言うのでしょうか。今回は若手4人を中心に各劇団のペテランと初々しい新人が協力を固め、猿渡の熟練さとたくみな演出で構成力のあるアンサンブルのとれた舞台にしあげました。現在は「狂言」を材にして

狂言の持つ深い鼓動について勉強中です。

「生きること、それは生き残ることではない」と雑誌「せりふの時代」に載っていました。「生きること」その答はボブ・ディランが唄うように風の中に舞っているのでしょうか。季節も春、新しい自分に出会うために新しい舞台を!

(新平)

創作にこだわる

劇団だいこん座 高橋 寛

劇団山形『峠』

高橋義夫／原作 劇団創作委員会／脚色 松井光義／演出

劇団山形は創立35周年記念公演として、『峠』（2幕）を11月11日に山形市中央公民館ホールで上演した。

昭和のはじめ、山奥の無医村。冬になれば雪に閉ざされるこの村で人々は病氣への恐れと不安を抱きながら暮らしていた。重病人ができれば命がけで峠を越え医者のあるふもとの隣村まで運ぶ……しかし、それは死亡診断書をもたらすための峠越えとなることがたびたびであった。村長である庄三郎は娘千花が医者になり村に戻ってくるのが念願であり、千花は医専を出て村に戻り、医者の道を歩き始める。診療所の装置はよくできていた。

ケガをして診療所にはこばれてき

た風間伊作との出会い、恋のめばえ、3年間勤めたら再び医者としての勉強で村を出るといふ父との約束、次々とこびこまれる患者におおる千花、村のおばさんたちのまじわりのなかへなかなか入りこめない自分。話は恋人伊作との交際、それを絶対にとめようとしぬ父庄三郎との間で悩む千花だが、伊作に召集令状が来て2人は結ばれない。さらに戦地から復員した伊作が千花にあてて何回も手紙を書くのだが、庄三郎は4年間もの間、その手紙を千花に渡さずについて、ついに伊作は他の人と結婚してしまう。

伊作との交際、父との確執の2つの線があるのだが、ラストの方で女

将に「千花さん悲しかったでしょう

が、おとうさんもだいぶお苦しみになったでしょうね」というセリフがあるのだが、この父の苦悩がもう少し描かれていればより深いものになったと思われる。偉大な女医の生き方としてはなく、迷い傷つきながらも懸命に生きようとする千花（平野礼子）をよく演じていたし、村のおばさんたちの方言を駆使した世間話がなんともよい雰囲気を出していた。宗助や橋の下など山形らしい役者が増してきて層が広がっているのを感じる。

一昨年の『北山形駅前西口学寮物語』につづいて創作にこだわったことに拍手を送りたい。5人ぐらいによる創作委員会をつくって脚本づくりをしているようだ。一般には集団創作はあまりうまくいかないといわれるなかでの挑戦は貴重である。

座席数750席に立ち見客が出る観客を集めて、35周年を迎えた劇団山形にさらなる発展を期待したい。

演劇集団「あり」『ぼっばや』を観て

神戸職演連 菊地 照一

11月26日（日）創立30周年記念公演「ぼっばや」を米子市文化ホールで観劇。いろいろの思いで一杯になった。炭鉱が閉山となって過疎の町となり幌舞線の廃線が決まり、一人勤務の乙松の定年退職と舞台は進む、そして幻想の中で乙松の死。実に残念、悔しい、かわいそう！

ちよつと、待って。国鉄からJRとなつて、万才！で来たように見える現在、こういう芝居の経緯を黙って見逃してきた日本の政治、いえ、計画的に仕組んできたに違いない日本の政治、今、労働組合はあるのですか？ あるのなら、何をしてきたのですか？ 敗戦前の日本と同じように、何も言えない、考えない、そんな状況ですか？ こんな重大な経緯を見逃してしまった責任は……と。

敗戦後、国鉄も北は北海道から南は九州まで年1回は全国鉄演劇交流集会を行い大いに盛り上つたものでした。それも数年で縮少され、米子演劇サークル（現在の「あり」）岡山演劇集団、四国の松山演劇サークル、鷹取工場演劇部と四つの集団で（1961年頃）全国鉄関西演劇ブロックを結成し、オリンピックのようになり、演劇集団「あり」、神戸職演連（鷹取演劇部）と、芝居を創りたい人たちが結集してそれぞれの組織をつくった。特に「あり」は地域に密着して確実に演劇活動を根付かせて、この30年を迎えることにな

った。

現在も日本の政治の文化活動に対する体質は変わっていない。労働条件は悪くなり（鷹取工場移転で網干まで通勤2時間）米子の「あり」も全く同じで芝居の稽古も、時間的にも、身体疲労も大変で苦しいことも増大していると思う。それでも、舞台の出来、不出来の言い訳はできません。そんな大変な流れの中で「ぼっばや」を完成、しかも2回公演で観客数500人（神戸は2回で230人）動員している。すばらしい。うらやましい。

創造面ではどうしても細かいことに目がいつてしまう。運転手の動作がちがうとか、日報を書くときは電氣をつけるとか……。全体的には、女の人の方がリアルに役を演じていたと思います。余分に力まないで舞台は進行していました。これからも、仕事の忙しいのと同時に、負けないでより良い芝居を創り上げるのを楽しみにしています。



そのことによって、外骨という人間の全体像が捉えにくくなったといううらみが残る。

プロローグの外骨（福寿淳）が死の恐怖におののく処刑ロープの緊迫した情景に対して、一幕の「発覚」から「落命一輪」にいたるマチ女（落合智子）の姦通から狂乱、そして服毒死までの対照的な場は、意想

外に克明に描出され、しかも、騒々しいほどの熱演で、劇全体の調和がくずされたおもいが残る。姦通発覚の場もそうであったが、とくに、浜野病院のマチ女狂乱の場は、もう少し冷徹に抑制して表現する方が良かったのではなからうか。この一連の場がもう少し淡々と進行していたら、「お煎餅食べない」というセリフだけを連発するお米婆（和泉敬子）の存在も際立って、その不気味さ不可思議さ、おかしさが納得できたのではと思われる。

マチ女の臨終に立ち合った外骨（溝田繁）と梅吉（亀井賢二）。マチ女を外骨に周旋したのは、慶庵（当時の妾周旋業）を生業とする梅吉であった。二人は、30年前、堀川監獄で同じ鉄窓につながれていたことを、咄嗟に思いだす。梅吉、実は前科六犯傷害殺人犯梅川菊之丞（多々納斉）。

二幕は、この「鉄窓の刻」の情景で幕があく。外骨と菊之丞の獄房に

二人の若い男が放りこまれる。そのうちの一人、九三（村上かず）が千枚通しで外骨を刺そうとする。その瞬間、菊之丞が咄嗟の機転で九三を押さえこむ。見事な離れ業である。劇中もっとも緊迫した場であった。千枚通しが、どうして獄房に持ちこむことができたのか。これには何か裏がある。刺客がきびしい所持品検査をどうして通りぬけてきたのか。外骨と菊之丞の対話の中から、憲兵隊の使喚によるものではないかという疑念がわく。

この場の、操觚者（ジャーナリスト）として権力に抗していた外骨と、凶悪無頼の傷害殺人犯菊之丞とのせめぎあいには迫力があり、二人の演技は、軽快で凄みもあり秀逸であった。

やがて、裁判の光景がオーバーラップして、外骨の権力に対する戦いと官財の癒着の摘発と糾弾の数々が再現されていく。獄房での外骨と菊之丞の対決と、裁判の光景を交錯さ

新しい展開を予感させる舞台

達奈 知史

関西芸術座——宮武外骨自叙伝——吉野孝雄 編

『予は危険人物なり』

藤田傳／脚本・演出

1901年から15年間大阪に在住し「過激にして愛嬌」ある「滑稽新聞」を発行した「反骨のジャーナリスト」宮武外骨。彼の行跡をドラマ化しようというおもいは、関西芸術座のなかにずいぶん以前からあつて、幾度か話し合いが行われ、劇作家への執筆依頼もなされてきたが、なかなか実現にはいたらなかった。このように永らく温められてきた題材を、吉野孝雄の外骨に関する諸作品をもとにした藤田傳の脚本をえて、ようやく舞台化の運びとなった。宮武外骨自叙伝——『予は危険人物

なり』のタイトルで、今回、大阪労演1月例会として上演された。自叙伝の肩に「みのうえばなし」とルビをつけたのは、外骨の突出したキャラクターを、日常生活に即して柔軟に描きたいとの作者の意図が感じられるように思われる。

舞台は、プロローグとエピソードをもつ二幕七場の構成で、スライド映写と、勘吉（山本弘）——狂言まわしの語りで進行する。序幕、黒船来航から語りつがれ、1889年、帝国憲法発布の場に映し出される外骨主筆の「頓智協会雑誌」に掲載さ

れた「頓智研法下賜図」は、明治天皇を骸骨姿で揶揄した挑発的で大胆な風刺画。衝撃的な描写であった。（これによって外骨は3年8カ月の実刑をうける）

「スライド写真と連鎖する動く紙芝居」（劇団パンフ）と作者が言うように、この作品はスライド映写が重要な役割をはたす。それだけにスライド製作と、その映写に努力がそそがれている。映像がシャープで大きく見事なできばえであった。

語り役の勘吉は、序幕、幕末の瓦版売りの恰好で登場。時代の流れに即して衣裳を変えていき、その場、その場に融合して違和感はなかったが、肝腎の大阪弁の語りで、いままの余裕と状況に応じた表現がのぞまれる。

この作品は、主人公宮武外骨の心象風景を混じえて、編年体ではなく、時間と空間を自由に交錯させながら外骨生涯のいくつかの断片を描いていくという手法が用いられている。



田政義が重明の役を演じて活躍しているのは喜ばしい限りである。かつて『ダムと緑の神話』小幡欣治／作や、ご存知『若者たち』。1918年の宇部鉱山で勃発した賃金闘争から米騒動になり、13人の坑夫が軍隊によって射殺された事件『捲

やぐら』天羽新平／作・演出など、私にとって10年ぶりの観劇である。前記3作品はいわばリアルな写実性とアクチャルなものである。だが、『レンタルファミリー』は現在の世相を反映した、一見風俗的な素材ではあっても、家族とは、夫婦とはを問いかけるシニカルな喜劇といえよう。登場人物にある親近感があり、それだけに、人物を形象する上で、自分に引き付け、同化したところで演じがちななる。

若者座の舞台は、各々役割を無難に演じ、ある種安定感があった。重明(篠田)、サク(嵯峨ひとみ)の老夫婦は、さすが年輪を感じさせ存在感もあった。だが、重明は、痴呆の前ぶれ、迫りくる寂寥を、頑固さでおおいかくす老人像には、まだ生々しさが残る。セリフも老人を出そうとするためか、つぶやきが小声になり舞台的な発声になりにくい反面、カラオケの歌になると、素にかえって朗々と歌のうまさが前面に出

て老人が消える。サクは従順な妻を素直に演じている。欲を言えば、後半の家族団欒をもっと楽しむことで、ゴツコの終わったあとの寂しさが印象づけられ、次の瞬間家を去るというインパクトが出るのでは。

失業中の仲之(綿谷都善)は突然の配役変更にもかかわらず好演。その妻よしえ(鮎川まゆみ)息子杜男(蒔代義人)娘すぐり(田中茉莉)らは、各々の役割を無難にこなしていたようである。喜劇だからと、特別の演技があるわけではないが、人物のデホルメへの模索が課題のように思えた。人物を創るということへの追求にひと皮むけてほしい。

装置は大下克朗・篠田とあるが、手造りで総額5万円程度とは思えない立派なものである。効果が舞台内から聞こえる音量(電話)が必要で、『ここが音が入る』のト書き的音響はスタッフ不足からか少々雑な感じ。照明が、『演劇街』の代表矢野氏の娘さんと聞いてうれしくなり、

せながら同じ場で描きだしていった手法は斬新で見事であった。

攻撃の鉦先を憲兵にむけた途端に重禁固。それでも外骨は臆することなく過激にして愛嬌ある『滑稽新聞』を発行しつづけ、権力に対する戦いをつづけていくのである。……

場面は一転「マチ女、再来?」。

マチ女の妹サチ(落合智子)の闖入

観劇雑感

宇部市民劇場「若者座」『レンタルファミリー』

砂本 量／作 大迫隆茂／演出

平成12年度、宇部市芸術祭参加。10月7・8日の予定が、「仲之」役の山根茂が事故のため、急遽綿谷都善に変更、11月4・5日に宇部市文化会館で上演した。

近頃のレンタルばやりで話題になった「レンタル家族」をモチーフにした、砂本量の喜劇である。

で一波乱。外骨の発作を契機にエピソードへとつづいていく。……

この作品は、晩年、外骨の脳裡をよぎった、いわば心象風景の断片がモザイク模様で構成されていたとみることができらう。ともあれ、関西芸術座に新しい展開を予感さす舞台であった。

(大阪労働会員)

関西芸術座 仲 武司

重明、サクの二人暮らしの老夫婦は、寂しさのあまり人材派遣会社にレンタル家族を申し込むが、申し込みに割り込んだ失業中の四大家族が、今は亡き三男仲之とその家族に擬して、老夫婦宅を訪れる。

最初は違和感から拒む重明も、いつの間にか持ち前の頑なさから説教

するまでに混同していく。やがて出前の寿司を前にアルコールがまわるにつれカラオケを楽しみ、失業中で内輪採めする四大家族たちも共に立ち上がる気配をみせていく。

3時間15万円なりのレンタルファミリーは、老夫婦にひとときの癒しを与え、同時にリストラ家族のバラバラに生きる家族も力づけられる不思議な出会いであった。やがて契約終了時間がおとずれ、家族ゴツコは終了。料金を手に家族は立ち去る。

老夫婦の味わうほのぼのとした情感の中で、次の瞬間、老妻のサクが私もレンタルされていたらと、離婚を告げ家を出ていく。衝撃のあまり重明は急速に痴呆症になっていく。

この作品は、西会議でも98年に劇団未来が上演。若者座はその上演ビデオも参考にしたという。

若者座は、西リ演初期のころから参加した古い仲間劇団であり、永い歴史の中での盛衰はあったろうが、創立メンバーの大迫隆茂が演出、篠



徐々に生きる方向を見出す第1幕、そして2週間後の第2幕では、主人公の斉藤医師(劇団大阪・清原好演)家族や各々大切な人を失い、来し方行く末をしみじみ語り合う2人の老

人(関芸・山本と未来・波田両氏の味わいある演技)、愛息と孫を亡くした鈴江の義父母のいたわり合う姿にと収束されていく描写に、客席はじつと見入り、涙を拭く人も多かった。作者がパンフレットに書いている「あることからふと思いついて、己を生かし養ってくれる森羅万象を拝むことを始めました……」という思いが根底に流れ、一編の人間ドラマに仕立てられたと感じた。

装置(プラン、板坂)も第1幕の余震続く不安状態と、第2幕の復興途中が手際よく設定されており、照明(上畑)や音楽(作曲、安藤)も舞台とよくマッチしていた。

欲を言えば、という面では、まずフィナーレの踊り、これはカーテンコールへと連続していくものだが蛇足ではなかったのか。確かに作品でも斉藤と掃除婦杉山の踊りが指定されているが、星空を見つめる斉藤の姿で終わりとした方が余韻も残ったと思うがどうだろうか。踊りの振り

も、ちぐはぐさもどこかそぐわず、客席側は微笑をもつて見守る他なかった。また第1幕の緊迫感が、ふと途切れるところも見られた。斉藤の電話をかけ続ける場面とか、1幕の終わりに大阪から来た医師の田川が支援態勢の追加説明をするのだが、それへ至る過程も他のやりとりで電話会話を挿入していくことで、もつと成り行きを説得させられたという気がする。

ともあれ、客席はいっぱいで、婦りのロビーも階下も熱い交流に満ちあふれていた。熊本チーフを先頭に各劇団が協力したであろう制作の尽力も見逃せない。大阪で、5年ごとに合同公演を積み重ねてきた歴史が生きていると感じさせられた。名古屋でも似たような合同公演の歩みはあるが、やや巧みさに流れていたかも知れない。これからのいろいろな学び合えることを願って、感想めいた劇評とさせていただきます。

(2月17日 エル・シアター)

「プラン料(無料)はもらいなさいよ」と余計なことを言ってしまった。宇部訪問を機会に、西会議で休会中の「演劇サークル、トラム」代表、

大阪の熱気と底力を感じさせた舞台

劇団名芸 栗木 英章

大阪新劇団協議会プロデュース合同公演
大阪自立演劇連絡会議第8回合同公演

「1965」つべ曼陀羅

清水 巖/作
森本 景文/演出

昨年6月に、第2回東・西リ演合同作家会議を三重県の桑名で開催したが、この作品も討論対象となった。作品のイメージから予想していたよりはるかに年配(70代)の作者、清水氏から大きな刺激を受けたが、その印象を私は「報告」(「演劇会議」104号)にこう記した。

「……阪神大震災直後の病院を舞

台にした作品で、今、テレビで人気のある『緊急救命室』のように多彩な人物がテンポよく描かれていく。『先生!この子、息してないんです』の緊迫したセリフで始まる巧みさやそのスピード感から、作者を40代くらいの若さと想像する参加者も多かったが……そのかくしやくとした姿勢に、東のやや疲れ組は大いなる励

ましを受けた」と。

今回その労作を大阪の演劇人がどう舞台化するのか、また客席はどのような受けとめるのか、という期待と興味をもって名古屋の仲間(島田たろう、鈴木正彦の両氏)とともに、観劇させていただいた。

舞台のでき具合は、一口で言うてアンサンブルもあり、大阪演劇人と関係者の熱意に満ちていた。ともすると、こういう形の公演は、意気込みが上滑りしたり、各劇団の色合いの違いが出て、興がそがれる場合もあり得るが、森本演出のもと誠実な舞台に仕上がっていた。「曼陀羅」というのは、辞書などに「多くの仏や菩薩を教理に従って、模様のように描いた絵」とあるが、大震災に遭った人間模様が、各世代、ベテラン・新人の総和として描かれていた。

震災直後の病院の混乱状態から、医師や看護婦、ボランティアの若者たちと、自ら苦しみを乗り越えようとする被災者たちの努力によって

継続の中に変化がある

演劇評論家

神沢 和明

劇団コーロ『カモメに飛び方を教えた猫』

ルイス・セプルベダ／作 河野万理子／訳
田中孝史／脚色 玉野井直樹／演出

原油にまみれて瀕死のカモメから、その卵を託された雄猫のゾルバは、かえったヒナを仲間の猫たちと一緒に世話をする。だが猫に育てられたカモメの女の子・フォルトルナータは、どうしても飛ぶことができない。「飛ぶことを教える」という母親カモメとの約束をかなえるために、ゾルバたちはタブーを侵して人間と話すことを決意した。

魅力的な題名のこの芝居は、ヨーロッパでベストセラーになった物語を劇化したもの。失敗を恐れて自分を狭い世界に閉じ込めてしまうこと

をやめ、広い未知の世界へ羽ばたいて行こうという子どもにもわかりやすいテーマを音楽劇仕立てで楽しく展開している。こうした劇で歌が使われるのは当然だが、この作品はより積極的に、ミュージカルとして作るうとしている。

TVに慣れた子どもたちは、CMのようにまったく前後と無関係のパートが挿入されたり、効果音とともに場面が一瞬で切り替わることを戸惑わない。その切り替えの早さにあわせて場面から場面へ飛ぶためには、ストレートなセリフでもってゆ

くのでなく、歌やダンスによることがよりふさわしい。ドラマに挟み込まれるCMは「異化作用」そのものだ。自分たちの行動に口で効果音を付随させている彼らだから、音楽やダンスがあれば猫がしゃべろうが、踊ろうが、違和感なくついて行く。

筋の上で、はっきり示されていないことはたくさんある。なぜゾルバは見知らぬカモメとの約束を守らなければならぬのか。どのようにして猫たちは相談する人間・詩人を選んだのか。カモメを殺した原油流出への告発はないのか。自分が猫でないと知ったフォルトルナータの哀しみは容易に消えてしまうのか、といったこと。なによりも、自分たちも飛ばなくてはという猫たちの言葉が唐突に聞こえる。とはいえテンポ良

く舞台が進むおかげで、大きな傷とはならずに見えらる。耳に優しい音楽の中でも、ゾルバの歌う子守唄が楽しい。

詩人をのぞいて、ゾルバの飼い主である人間たちの姿は見え、声と猫の目から見たキャットフードの箱、掃除機の吸い込み口等がその存在を示す。巨大な道具がゾルバを追いまわす不気味で素敵な場面は子供たちが喜びそうだ。

ゾルバの蘭森誠が、巧みな台詞と身ごなしの軽い身体表現で、好演である。冒頭のゾルバの仕種以外、猫

やカモメ、猿をうつす演技はほとんど使われない。船乗猫・向かい風の恒川勝也の声量豊かな声は、海の男(雄猫)の豪快さを示す。博士の表

秀明の誇張した滑稽演技も、うまくはまって笑いを導く。カモメを食おうとする野良猫コンビの田中孝史・立花ねむかは、行儀の悪さで他の役との対比が生かせる得な役だ。フォルトルナータの植田令が、声をいっぱいに張って熱演している。だがまだ「熱演」の段階で、役と一体になるにはもっと余裕が必要だろう。

(9月8日夜 近鉄小劇場所見)

人形劇団クラルテ『頼光・四天王伝説』

近松門左衛門／原作『堀山姥』より
東口次登／脚本・演出

故吉田清治から引き継いだ「近松人形芝居」、その十三として『堀山姥』を基にした『頼光・四天王伝説』をクラルテが上演した。キャッ

チコピーに「よみがえる金太郎伝説」とある通り、若武者源頼光の苦難と、山姥から生まれた怪童・坂田金時の誕生と鬼退治にまつわる波乱万丈の

物語りだ。

脚色・演出の東口次登は『紅葉狩り剣のゆくゑ』以来、二度目の近松作品となる。『女殺油地獄』で始まったこの路線では、世相を映した世話物も大きな比重を占めているが、東口は二度とも時代物作品を選んだ。確かに近松は晩年まで時代物の筆を執り続けている。人形劇の魅力であるスケールの大きさや破天荒なストーリー展開を生かせる点で、この選択は良い。大力の武士が屋敷の門を持ち上げ、鬼女が宙を飛び、丸々と愛らしい金太郎が熊を投げ飛ばし、巨大な鬼も登場して、いかにも人形劇ならではの楽しさがある。ただ、そのように広がってゆく世界を短い時間の中にまとめあげるといふ難しさがある。

この舞台で残念だったのは、頼光と金太郎、2人の主要人物にからまる筋の展開がすっきりと見えてこなかったことだ。複雑な筋立てである上、無念のうちに自害した父親の魂

もある。政府の身勝手が最も明らかに見えているのが、戦争において国内唯一の主戦場となり、戦後は基地の島としてアメリカに売り渡された沖縄だ。沖縄に象徴される戦後日本の矛盾に対して、劇団大阪は舞台において継続的に告発を続けており、その活動の一つとしてこの舞台も成果をあげている。われわれもショウイチとともに疑問を持ち、怒り、そして反戦地主として基地内の自分の土地に足を踏み入れ先祖の魂と酒酌み交わしカチャーシーを踊りながら、軍用機の爆音にキツと顔を上げる彼と視線を同じくする。そのように観客に共感を与える点では申し分ないが、芝居としては物足りない部分がある。

同じく沖縄を描いた『タッチューから吹く風』でもそうだったが、堀江演出は激することを避け、静かに芝居を進めてゆく。その静かさは怒りの深さにつりあうのであるうし、変に劇的にすることで事実の重さを

損なうことを嫌うのだろう。しかしそのために、すべての場面の印象が単調になってくる。

戦争を生きのびたショウイチの父たちが抱えている、死んだ者たちへのすまなさは彼に、無念の魂が眠る洞窟で深夜に独り三線で鎮魂曲を奏でさせる。学生運動に疲れて沖縄に來た青年タカシが感じたヤマトンチューとしての罪悪感と自分の無力さへの苛立ちは、彼をガジュマルの木に住むキジムナーに変えてこの地にとどめる。そこにあるはずの重さが、全体の中で薄らいで行く。ショウイチを脅しに来る右翼のミヤギや、彼を理解しながらも離れて行く人たちの存在もおぼろげである。物足りない。その中でしかし、民間人の集団自決の場となったチビチリガマを案内する場面で、劇場の明かりを消し出演者たちが持つロウソクの灯だけでこの悲劇の場が紹介された時、極めて深い感銘を受けたことは述べておきたい。

(10月20日 近鉄小劇場所見)

が妻の胎内に宿り、その妻は山姥と化して子供を育てているというシチュエーションは、現代では腑に落ちにくい。山姥となる遊女八重桐が長い身の上話を流暢に語る「廓話」が眼目だが、大夫や歌舞伎役者と違い、クラルテの演技者は語りの演技に慣れない上に人形を操作しながらだから、肝心の場面が弾まなかったのは責められない。

今回は上方講談界の俊英・旭堂南左衛門を語り手として招いた。スケールの大きい語り口、親しみを感ぜさせる風貌と明るい芸風で観客をひきつける。彼がすっかりした語りで筋の展開はおさえてくれるのだから、人形は説明する必要はない、もっと伸びやかに演技してよい。八重桐の語りも彼にゆだねて、人形は仕方の演技をいっばいに演じる方がよかったのではないか。

演出者だけでなく演技者においてもクラルテは若返ってきている。今度は西鶴を取り上げてはどうだろう。

う。その人間観察と表現力は、独特のユーモアとあいまって、近松を越えている。今の陣容に適うのではないか。近松とは異なる世話物、より

劇団大阪『海の沸点』

坂手洋二／作 堀江ひろゆき／演出

前号(104号)に、『海の沸点』の劇評が2つ(横浜と名古屋の劇団)載っている。今回は大阪。20世紀の終わりにこの作品が連続上演される意味を考えずにいられない。

沖縄国体が開かれた87年秋、読谷村のソフトボール大会会場で、掲揚された日の丸が一人の男性の手で引き降ろされ、焼却された。その行為を目撃した沖縄の人々は拍手を送ったが、警察は彼を逮捕し、右翼は彼の経営する店を襲撃、彼・ショウイチに様々な迫害が加えられる。しかし彼は家族や友人に支えられながら、日本政府の都合で沖縄に押し付

けられた矛盾との戦いを続けるのだ。

この芝居は現在まだ「進行している現実」に基づいて書かれている。主人公も実名(知花昌一)が使われる。それは客席に知花氏自身がいたことで、さらに徹底された。その中の告発は、従って現在の国家・社会の構造に向けられる。極めて熱い芝居である。

戦後55年を経ながら未だに、外に對しても内に対しても真に反省を示すことなく、うやむやに今を繕うだけで逃げぬけようとしている日本という国家(それは我々国民の責任で

現代に通じる作品群が生まれてくるように思われるのだが。

(10月6日 リサイタルホール所見)

家族の絆は決して脆くはない

演劇評論家

今泉 おさむ

劇団道化「ボタ山に咲くムクゲたち」

坂井ひろ子／原作 中村欽一／脚本
ふじたあさや／演出

96年の初演以来、おやこ劇場・一般公演と全国各地で好評のうちに公演を重ね、99年には韓国・釜山でも上演された舞台。

40年代の朝鮮半島。10年の併合以来、農民たちにとっては、地主が日本人となり、小作料は年々上がる苦しい毎日。しかもその最中、キム・パンナムは12歳の息子ハクソンが強制連行でさらわれてしまった。嘆き悲しむ妻と娘たち。彼は息子を捜しに日本に渡ることを決意する。その筑豊の炭鉱では彼らは(半島〇〇番)といった符丁で呼ばれ、日夜苛酷な

労働に酷使された。ようやく妻と娘は呼び寄せたが、息子の行方は杳として分からない。そのハクソンも苛酷な労働の中にいたが、持ち前の体力と勇気で力強く成長していく。

悲痛な状況を描きながら、舞台上の表現自体は至極あつさりしている感じである。演技にある種様式化したのがうまくはまっている。盆舞台を作り、その下部を上げることによって鉱内の状況を描き出す。苛酷な労働、日本人の民族差別の中で、先山の(倉さん)や娘の(民子)のよ

うな心優しい日本人もいる。労務主任や組頭たちの描写がそれほどしつこくないので、余計にそれを感じる。舞台では(人間の優しさ)と(希望)がキーワードであろうか。だが、実際に強制連行されてきた人々に対する扱いはこの程度であったのだろうかというおかしな物足りなさも起こる。

プロローグとエピローグ、歌で始まり、歌で締めくくり、朝鮮の歌と踊りが散りばめられ、賑やかな雰囲気は舞台に満ちている。それはふじた演出の特徴だが、この舞台では見事に成功している。そこへ、併合・強制連行と日本の侵略が朝鮮の民衆の上に被いかぶさってくる。それを

はねのけて生き抜こうとする朝鮮の人々のしたたかな根強さが舞台から溢れている。日本と朝鮮の間に横た

るが、出演者は皆、勢い溢れた演技で舞台を盛り上げている。なお関西で活躍している舞踊家(相思花)高圭美さんが舞踊指導とともに舞台に参加している。

(2000年12月15日夜
枚方市民会館)

劇団きづがわ「月光の夏」

毛利恒之／作 林田時夫／演出

古びて廃棄されようとした1台のピアノにまつわる物語。大戦末期の沖縄戦に特攻として出撃間際の学徒出陣の士官二人が、佐賀の(目達原)訓練基地から(鳥栖)の小学校まで線路伝いに駆けつけた。弾いた曲はピアノソナタ(月光)。実話をもとに、映画にもなり評判となった原作の舞台劇。構成は映画シナリオとほとんど変わりはない。

彼らの演奏に偶然立ち会った、音楽教師・吉岡公子の述懐から、ピ

アノの保存運動が起こり、二人の士官たちの特攻が進められていく。音楽専攻の学徒ということから、海野光彦は沖縄の空に散ったが、もう一人の風間森介は生き長らえていることが判明する。だが、マスコミが彼を訪ねていっても、その間の事情を黙して語らない。

散華した特攻隊員たち。不幸にしてと言うべきか。出撃はしたが整備不良など自己意志を越えて帰還した隊員を隔離して生殺し同然に閉じ



込めた「振武寮」の存在、隠された非人間的行為が明らかにされている。この人物捜しから、黙するのは



岸田戯曲賞受賞以来、現在最も精力的に活動している作者の初期の作品。「神劇まわり舞台」参加作品。大戦末期の春、鹿児島県鹿屋市。紙

神戸職演連「紙屋悦子の青春」

松田正隆／作 菊地照一／演出

屋安忠の妹・悦子に縁談が持ち上がっている。相手は安忠の学校の後輩である特攻隊員・明石海軍少尉が紹介した航空整備士の永与少尉である。だが、妻のふさは不満である。彼女が悦子と同級生で親友であり、悦子が明石海軍少尉を想っていることを知っており、明石も同じ想いであるはずだから。ところが見合い話は進んでいってしまう。悦子の思いはどうか。

個々の心の微妙なゆらめきを表現した会話の妙が作者の特徴であり、若い劇団の舞台でも評判となった。ところが、この舞台を見て、改めて台詞には現実感が必要だという思いを再認識した。戦争という非常時の中で、若者たちが互いに愛し合いながら、確実だろう死を前にして

恋人を信頼する友に託する切ない感情。いま現在では失われつつある純粋さが胸に迫ったのである。この舞台ではその背景としての戦争の中では個人ではどうしようもない圧力がひしひしと感じ取れた。それは演出者が当時の状況を体験したところからの感情の動きを出演者に確実に伝えたからだろうと察する。その切迫した思いが見事に表現されていた。そのため、本来は同じ役者が演じるはずの、プロローグの永与と悦子の老夫婦の姿がベテランの別の役者が演じて、それを無理なく見ることができた。

気にかかる点は、悦子のモンペが派手にみえる朱色であったのと、舞台である茶の間と、奥の台所との距離から、表の会話が聞こえては困ると感じる個所の処理の問題である。ともあれ、当時の時代をはっきり表現出来た舞台であった。

(2001年1月28日昼

神戸KAVC)

なぜかという二つの謎を追って場面は展開される。階段で囲まれる演技空間と、正面奥にピアノ。流れるピアノ曲、スライド、ビデオで写し出される当時の面影。切ない思いが溢れだすのは禁じ得ない舞台づくりである。この詠いあげる調子は感動を呼び起こすが、反面、情に流され過

劇団未来「茜色のとき」

和田澄子／作 波田久夫／演出

劇団座付き作者として、久々の書き下ろし作品。現代の家族たち。岡田健太はスポーツ事故で車椅子生活になったが、一級建築士の資格を取り、元気に立ち直ろうとしている。妻・友子は入院中に知り合った6歳年上の看護婦。高校3年生の娘・はるかは、実は友子の妹・川内洋子が置いていった子で、実際は姪になる。一人暮らしの父・邦夫を誘っての志摩・一泊旅行の戻りである。

夫婦の心づもりとしては邦夫に同居を申し出たい。ただ、邦夫と夫婦の間は彼らの結婚の経緯から何かとギクシャクしている。そこへ突然、洋子が訪れ、「娘を返してくれ」と迫ってくる。一見穏やかそうな家族の中に、次第に一波乱も二波乱も起こってくる。これまで表面では隠されていた互いの感情がぶつかりあつて、ついには家族とは、個人とは、といった根本の問題が明るみに出さ

れてくる。互いにどこか遠慮しがちなままで過ごしていた《家族》が本音を出さなければならなくなる様子がきめこまかく描かれ、一幅のドラマを構成している。

だが、観客と身近なスタジオ公演でありながら、出演者が表情表現をしすぎるために、自然な家族と言った雰囲気がかわれ、いかにも作り物めいた受け取り方になってしまう。新築した家屋のこじんまりした応接間が舞台で、しっくりと作られて、その中で展開される会話劇としてまとまっているのに惜しい。ラストに窓に映える茜色が美しい。一つ、邦夫の部屋を二階に設定するのは年寄りの同居にはどうかと思う。

(2000年10月28日夜

ワークスタジオ)

「セイルスマンの死」と「ザ・ラスト・ヤンキー」

—アーサー・ミラーの二つの作品を結ぶもの—

平林 卓郎

不況は慢性的傾向を持ち始め、企業同志の合併でリストラが盛んに行なわれている時、ふと、アーサー・ミラーの「セイルスマンの死」(1949年)と「ザ・ラスト・ヤンキー」(1993年)を思い出した。「セイルスマンの死」は成功の夢にとりつかれた老セイルスマン(ウィリー・ローマン)が自殺寸前にまで追いこまれている。しかし、34歳にもなるのに、一定の職を持たず、しばらくぶりで家に帰って来た息子のビフとは相変らずしつくりかない。その原因は、ウィリーが、かつて出張先で取り引き先の女と不倫をしているところを(商売がうまくゆかず孤独のあまり)、スポーツに熱

中しすぎて数学の単位を落してしまい、崇拜する父ウィリーに相談しようとしてホテルに来たビフに見られてしまったからだ。それ以来、家を出たビフは絶望して父親に冷たくしていたのだ。それでも息子のビフの才能をかって、成功の夢を見つづけている男の話である。妻の勧めにしたがつて、内勤にしてもらおうと社長に会いに行く。ところが、もう君はいらないと先代の社長とは打って変わった扱いを受ける。社長と社員が人情と敬意と友情で結ばれていた時代はとつくの昔に終わっていたのだ。ウィリーのことになる話題を変えようとするビフに妻のリンダは、父親がどれだけ追い詰められているかを語

り、ビフも一応理解する。そしてウィリーはその次の日、若社長に首にされるのだ。ビフも同日、昔勤めていた会社の社長が自分をかつていてくれたからと言って(結局、それは当時でさえも幻想にすぎなかったのだが)会社に出かけてゆくが、社長はビフのことなど少しも気にしておらず、ついに一日待って、殆んど言葉もかけてもらえなかった。夜、最後の夢をビフに託しているウィリーが執拗に、ビフはうまく採用されよう、と、真実を言おうとするビフの否定的言葉を無視し続けるので、ビフは父親のことが心配になり感きわまってウィリーの前で泣く。それを見たウィリーは、ビフが自分を許してくれたのだと思い、ビフの成功を信じて、保険金をビフに残してやれば、彼が大成するといい車を発進させ自殺する。成功の夢というものが拝金主義とゆきすぎた名誉欲を目

指していた。その成功の夢の終りを描いた作品と言われるゆえんである。それから40年以上も後に書かれた「ザ・ラスト・ヤンキー」は、精神病院が舞台である。舞台はいろいろな会社の社長であるフリックとヤンキーの末裔で大工の仕事をしているリロイとの会話で始まる。フリックは60歳代、リロイは40歳代である。リロイの先祖がアメリカ建国の父であるアレグ・サンダー・ハミルトンであることを知ったフリックはリロイが大工をしていることを聞いて不思議さを感じる。父親が弁護士であったと聞いたフリックは(アメリカ的成功者の1人と自覚している。)個人企業家として、大工としての素晴らしい実績をリロイから聞いて好奇心を持つが、リロイはフリックのその言葉さえうっとうしい。「セイルスマンの死」のウィリー・ローマンが最後まで信じていた(それは時

代遅れの幻想であったが)信念をリロイは持っていない。というのは不十分な言葉であって、建国以来「泥棒貴族」とさえかつては言われても、拝金主義と名誉欲のアメリカの「成功の夢」に対してリロイの中には批判がある。そして同時に、大企業とそれによる人工主義的な物の作り方をする現代社会に対してなぜやりな気持もある。フリックの名門出身なのになぜ大工という問いにうんざりするリロイは、すでに述べたようなビッグ・ビジネスをするフリックに対して複雑な感情を持つてもいい。

第二幕は病院の娯楽室であり、リロイの妻、パトリシアとフリックの妻、カレンとの対話である。パトリシアはもう3週間も薬を飲むのをやめていて、かえってうつ病が治ったと言っている。先のことを考えすぎずにいれば心は平和になれるのよと言う。パトリシアは、ここ15年というものの夫に満足せず、散散、つらくあたっていることをカレンに話す。パトリシアの実家は移民であるが、花形スポーツ選手であった兄2人が自殺したこともある。成功神話をかつては信じていた、パトリシアは夫リロイの欲のなさにいらいらして3回も精神病院に入ったのだ。病い癒えたかに思えるパトリシアだがあまり先のことを考えすぎると足下には真黒な暗闇が存在しているとも言う。ここで一言言っておかなければならないことがある。それは、アーサー・ミラーが、天地がひっくり返ったような1929年から30年代にかけての不況時に青春時代を送ったことだ。やがて娯楽室に来たリロイに、薬を止めて身体が調子が良くなったこと、退院しようと思うとパトリシアは話す。リロイも大賛成である。しかし、パトリシアはそう言いながら、あな

たの自信のない顔を見ていると私も自信がなくなるのと言って、前とは違つて否定的なことを言つてリロイを責める。するとリロイは、俺はいつも負け犬だということのかと反駁する。そして、そう答える自分にとつての魂とは自分を忘れ生きる喜びを感じさせてくれる「物」さ、目立の利いたのこぎり、ピシヤリとはまった木組み、そういう物さと言う。リロイは家庭と仕事を愛していればこそ生きてこられたのだと。そこへフリックとカレンが入ってきて、夫の歌でタップダンスを踊りたいという。奥さまがタップをしたいのはフリックに見せたいからだろうとパトリシアは言い、仕事で忙しいというフリックをカレンにつきあわせさせる。最初はつきあつていたフリックだが途中でうんざりし妻の気持を考えずに去ってしまう。気の毒に思つたリロイがカレンのためにパンジ

ョーで伴奏してやるがすぐにカレンは踊ることを止めてしまう。しかし、その優しいリロイを見たパトリシアはリロイの手を握り、自分への迷いとけんめいに戦いながら家へ帰る決心をする。

「セイルスマンの死」は、最初上演された頃、アメリカ資本主義の批判と受けとられた。そして、成功の夢が拝金主義とゆきすぎた名誉欲批判として描かれていたが、「セイルスマンの死」にはもっと深い意味があることは私が言うまでもない。セイルスマンの死においては、ウィリー・ローマンが昔風の商売の仕方ではすでに時代遅れになっているにもかかわらず、必死に成功の夢にしがみつくガムシヤラだがペイソスに満ちた人間像が描かれている。一方、「ラスト・ヤンキー」のリロイは、いわゆる成功の夢を体現しているようなフリックがうつとらしい。リロ

イにもコンプレックスと不安はある。だが彼は自分で物を作つてゆく独立独歩（ウィリー・ローマンがあれほど憧れた、一人でジャングルに入つて行つてダイヤモンドを獲得して豊かになった兄ベン）の独立独歩の生き方のように」の精神で生きている。そして独立独歩の精神こそヤンキー魂なのである。大企業の機械的仕事とは違つて、リロイの仕事は手造り作業なのである。大企業とその傘下で仕事が進んでいる今日、それだからこそリロイが不安をかかえたラスト・ヤンキーなのである。それは、失敗したとはいへ大きな成功の夢をもつて討死にしたウィリーほど劇的に派手ではないけれど、社会というものが刻々と変化し、功利的で拝金主義の世の中でウィリーが首になったとき言つた言葉「友情と思ひやり」が人間同志にあつた時代が消えてゆくことを、1949年と19

93年という歳月が経つても、以前としてミラーは行きすぎた物質主義の中に生きる人間を描いており、現実に対する不安と恐怖は更に深まっていると言っているようである。そして空虚感をも。パトリシアの横のベッドに座つて何も言わない女は、リロイ夫婦とは対象的に現実の中で生きる氣力を失なつた者の典型として描かれているのだ。そしてこの作品に描かれているものは、同時に日本の精神状況であることは言うまでもない。

プロフィール

早稲田大学卒及び同大学院修士課程修了。愛知学院大学助教授、江戸川女子短期大学教授を経て、現在駒澤大学・立正大学・東洋大学講師。主要著書「一つのアメリカ演劇論」「非業の人・渡辺崋山」他にエッセイ多数

戯曲公募 『新世紀に向けて』 選考を終えて

関西芸術座 亀井 賢二

関西芸術座では、昨年初めから「新世紀に向けて」戯曲を一般公募を実施しましたが、9月末締切で27編の作品が寄せられました。当初はどれだけの反応があるか大変不安でしたが、予想以上の成果に改めて戯曲創作への関心の広がりを感じました。

作者の年齢層は30代から70代と幅広く、作品の傾向も現代社会に視点を据え、家庭崩壊、老人問題・医療・介護問題、かつての戦争と現代、また、自分さがし、伝説を素材にしたもの、歴史的な事件と人間、など多岐にわたっていました。

残念ながら今回は直ちに劇団として上演しうる入賞作品はありませんでしたが、最終選考に残った10作品

から次の3編が佳作として選ばれ、1月27日（土）恒例の「ざ・びらき」席上で受賞者出席のうえ授賞式が行われました。

（佳作賞金、各10万円、選外になった応募者には図書券若干を進呈）

◎佳作（戯曲到着順）

【遠い空】 野上 卓

【念佛吉次】 小山茂仁

【わりかん】 津々見俊丈

（各氏はそれぞれ、川崎市、宇治市、東京都に在住）

創作劇はいうまでもなく劇団の顔であり、その資質は劇団の命脈を左右するといつても過言ではありません。

これまで劇団と親交のあつた劇作家の方々はもちろん、今回新たに応募して下さった作家の方々とも今後連絡を取りつながらを深めていきたいと考えています。応募された皆さん、ありがとうございました。

全リ演議長団（東西合同）会議の報告

2月3、4日、名古屋

1. 『演劇会議』ピンチ

機関誌『演劇会議』が財政的なピンチに陥っています。各劇団の劇団員の減少に伴いこの数年間で300部以上の減になっていること、編集費・印刷費が増えていることなどによるものです。

検討した結果、読者をふやす手だてとして、ホームページを開設して宣伝する、各地域で地元の図書館に購入してもらおうよう働きかける、北海道演劇集団に加盟している劇団の読者が少ないのであらためて働きかける、などの方針を立てました。また、現在、120〜130頁となっているが100頁以内におさえて経費節減を図ることにしました。

た。広告をとって収入をふやしていくことも考えていくことにしました。

2. 編集長候補に後藤陽吉氏

早川昭二氏が逝去されたことにより、次の編集長をだれにするか話し合いました。情報集まる東京在住の人、名前がある程度知られている人などが条件としてあげられ、青年劇場の後藤陽吉氏（現議長団）がすいせんされ、劇団とご本人に相談することになりました。

また、掲載戯曲の選択をだれに依頼するかも検討しましたが、東は瓜生正美氏（青年劇場）、西は栗原省氏（いこら）の名前が上がり、交渉してみることになりました。

3. 次回のフェスティバル

昨年8月に岩手県湯田町で行われた第8回全日本演劇フェスティバルは、財政的にも赤字を出さずに済んだし、地元でも大変喜ばれたとの報告が中野健議長からありました。

次回は2003年8月となりますが、愛知県長久手町が候補地として上がりました。同町は町民劇団を持ち、年間600万円の予算を計上していること、湯田町とも親交があることでも知られていました。

4. 3人が個人加盟

島田たろう氏（名古屋）、川島柳一氏（千葉）、藤原重孝氏（山口市）の3氏が全リ演に加盟されることになりました。

一方、劇団トラムは活動休止のやむなきに至り全リ演を

しばらく休会することになり、個人会員の岩坂博氏は死亡による退会となりました。

5. 全リ演の理念を見直す

若い人たちに全リ演のことをもっと知ってもらうことが必要となっていますが、西会議では若い人たちだけで実行委員会をつくり、全リ演の集いを企画中です。

全リ演の名称もリアリズム演劇会議でいいのかどうかも含め、発足の理念といったものを今後時間をかけて見直ししていくことにしました。

6. 仲武司議長に記念品

仲武司議長は昨年全リ演議長を勇退されましたが、1962年の西リ演発足当時から実に38年間、事務局長や議長を務められました。こうした功績を讃え、ささやかな記念品を贈りました。

西会議

「次世代企画会議」を開く

西会議では、これからの全リ演をどうするのかを次世代層に問いかける「次世代企画会議」を開きました。次世代を担う20代から40代の若者劇団員が新しい感覚で今年夏の演劇ゼミナールを企画してみ



ようというものです。折しも、大阪では合同公演「1995こうべ曼陀羅」の稽古真っ最中。にも関わらず、山口、島根、大阪、和歌山、京都、神戸から10劇団、11人が参加しました。

あまり顔を合わせたことのないメンバーもいて、互いの近況報告や劇団紹介にたっぷり時間をかけました。その後、「全日本リアリズム演劇会議はもうなくしてもいいのでは？」と劇団大阪の熊本氏から爆弾発言。ひたすら、全リ演を愛するが故に本音を聞き出すための演出だったのです。

● 全リ演によって、みんな支えられてきのは事実。あった方がええに決まってる。● ぐちゃりあうことが多く、演

劇の創造性にどう生かされるのか？

● 「演劇会議」は入団と共に購読となっているが、決まったところ（グラビアか自分の劇団について書いてあるところ）しか見ない。

● 劇団が消滅しそうになった時、全リ演の仲間が支えてくれて今日がある。無くしては、情報も交流もなくなってしまう。

● 劇団の中でほとんど話題にならないのが問題。

● 「IT革命」と言われ、この先ますますコミュニケーションが貧困になるだろう。だからこそ、ああでもない、こうでもないとい顔を合せて議論することが大事な時代になるのではないかと「リアリズム」ということばが若者を遠ざけているのではないか？

● ネーミングをみんなのイメージで変えてみないか？

などなど、話すうちに1回目は終わってしまいました。

2回目は1月7日。前回から1週間ちよつとの間だったので、すぐに続きの話ができました。いよいよゼミナールについて、創造活動を共に体験することを主目的に、具体的にどのような形で持つかを議論しました。おのおの夢は限りなく拡がっていくが縮小、拡大を繰り返しながら何とかひとつの企画が出来あがりました（裏表紙下段参照）。

年に1度の総会では、話について行けない次世代層にこうして活発な意見交換できる場が与えられたことに感謝します。これからも劇団の顔が見える交流を進展させ、みんなの親しみやすい全リ演を実現させていきたいと思いました。

（劇団あしぶえ 有田美由樹）

西日本劇作家の会第17回総会

話題作ぞろいで議論沸騰の「作品研究」

栗原 省（西日本劇作家の会）世話人代表）

会場・大阪天満橋「あい傘」
とき・2001・2月17日
(夜)から18日3時まで
出席・井上満寿夫、東川宗彦、久語孝雄、楠本幸男、栗原省、熊本一、清水巖、清水章代、谷内豊、林田時夫、長谷川伸二、広島友好、芳地隆介、和田澄子、赤松比洋子、栗田倫右、杉本進、木田昌秀、三輪智津子、森本景文(司会・栗原)

月の道後温泉総会で論議され、以後「ドラマの森」(第3集)選考委員会や昨年6月の東西合同劇作家会議でも話題になり、今回21世紀冒頭の大阪新劇団合同公演レバに取り上げられ、それも久々の森本景文演出、スタッフも役者も熱気わき立つ舞台になった。17日は一同観劇後の興奮が醒めぬまま、感想を語りあい、18日朝から作品研究。

問題提起の阿部好一さんは清水巖さんの旧作「寛容の時代」や、井上ひさしが学生時代にした太宰治の「惜別」の中で、おぼれた水夫が灯台の灯をみて救いを求めようとしたが、灯台守がちやうど一家団欒中であるのを見て、その団欒をこわすまいと海中に



沈む話を挙げ「だれもみていない知られない宝石を見つけた」の文芸ではないか」と書いてある文章(昨年11月朝日新聞「いつもそばに本が」下)を引用しながら、「清水作品には高い倫理性、圧倒的に高貴なる精神を感じる。『こ

うべ曼陀羅』も、あの大地震の中で輝きを失わなかった人間の高貴さ、人間の魂の美しさが清水さんならではのことで語られた、今日希有の作品ではないか」と感動的に報告。

この点、清水さんは「ドラマの森(第3集)」の作品後書きで「全く抵抗できない大きな災厄の一撃で打ち倒された時、各人の中に眠っていた人間の根源にあるものが目覚めたみたいなのです。……人の深奥にある実在はもつと見事なもので、没我的で献身的で凄いのだと感じました。少なくとも震災当初の話の中には、その凄いののがピカリピカリと光っているのです。……これを書きながら、自分はいま聖なるものを冒瀆しているのではないか、巨大な内容のものを矮小化しているのではないかというおそれに悩まされていました」と書いている。

■「こうべ曼陀羅」は一昨年10

一見記録劇風な出だしが、圧倒的な人間讃歌のドラマに昇華した作品、という評価が大方の出席者の感想。今回の公演の実行委員長でもある杉本進さんの「当初、もつと一揆的な作品をやりたいかったが、演出の森本さんに、阪神



大震災は平成の一大揆だ、といわれ納得した」という話に爆笑。震災に対する行政の姿勢が書かれていない、もつと自然災害に挑んでいく積極的な人間像がほしかった、という意見もあった。

■広島友好「那須野の大地」プロとして一本立ちした広島さんの第一作で西那須野市の委嘱作品。市民公募(らくりん座協力で昨年9月公演)。

問題提起者阿部好一氏は「広島さんの傑作の一つではないか。『昂』が昨年11月に演じた『怒りの葡萄』とよく似ているが、これの方がいい。『怒りの葡萄』でも『次の時代』に引き継いでいくのは女だ」というメッセージがこめられていたが、これも、母が幽霊になってまで伝えたものをりんとする主人公が引き継ぎ、娘に伝えていく物語。喜衛門の人物設定も成功してい

る」と報告。

りんの苦労話をこれでもかこれでもかと、よくこれだけ重ねて読ませる力量はすごい(楠本)取材ネタに近い。作ろうとしなかったことが成功の原因では? 役者が作ることを作ってやるのがプロでもあるから(芳地)ストイックな面と野放図な面がバランスよくこれは天性かも。「鉾は武器じゃねえ」というセリフなど印象的(井上)亡霊がしゃべりすぎないか(清水章代)等。

■和田澄子「茜色のとき」

問題提起者栗原。「車椅子の夫。幼少時代家族の愛情を知らなかった看護婦の妻、母に捨てられた少女、期待した子に裏切られた無念さがはなれない父親。それぞれがコンプレックスを持ちながら家族を作っていく」とする話、今日家族崩壊劇が多い中で、人

間の善意を女ならではのセリフでまとめた佳作(「演劇会議」104号掲載作品)。

新派でやつたらおもしろい作品(芳地隆介)行動がないのでは?(広島)邦夫に共感(東川)など。

■清水章代「風にのれ、プッピー」問題提起者広島友好。「とべない鳥プッピーが、もぐらやいたちやむくどりの親の助けで飛ぶ話。セリフがみずみずしくプロローグの状況設定がすばらしい。飛べないプッピーが飛ぶというテーマがイライラとのドラマでいくのか中途半端では」

イメージが豊かで普遍性がある作品(楠本)着想が凄。『ブンナよ……』よりおもしろい(和田)。

作者はこれを被災体験から書いた。現在四紀会「家族劇場」で巡回中。総会は井上満寿夫氏を世話人に。他は留任。

ブロック	劇団名	〒	住 所	電 話	F A X
関	演劇集団石るつ	134-0088	東京都江戸川区西葛西3-15-8-701 いとうエリコ方	03-3804-0507	
	演劇集団土くれ	120-0003	東京都足立区東和5丁目12-7-103 石塚方	03-3629-3286	同左
	劇団阿修羅	157-0062	東京都世田谷区南鳥山2-33-15 川崎方	03-3309-8633	
	京浜協同劇団	212-0052	川崎市幸区古市場2-109	044-511-4951	044-533-6694
東	劇団蒼生樹	220-0046	横浜市西区西戸部町2-192-14	045-242-3584	同左
	三浦半島劇団梅	238-0102	三浦市南下浦町菊名56	0468-88-3142	
	劇団やまなみ	400-0867	甲府市青沼1-8-5 梅津方	0552-33-9556	
	劇団静芸	420-0871	静岡市昭府町1丁目10-37	054-273-0604	
山	劇団からっかぜ	431-0201	浜松市藤原町21505	0534-49-0937	
	劇団火の鳥	420-0941	静岡市松富3-60-30-3 泉地守方	054-273-0718	
	岡崎演劇集団	444-0016	岡崎市元欠町3-10-3 浅井方	0564-21-2614	
	劇団名芸	468-0011	名古屋市天白区平針1丁目1808 (急ぎ、小包類は 457-0016 名古屋南区汐田町11-8 (栗木))	052-803-2922 052-821-3691	052-821-3691
中	名古屋演劇集団	451-0016	名古屋市西区住内通4-16-3	052-524-5975	
	劇団名古屋	456-0018	名古屋市熱田区新尾頭町2-2-19	052-682-6014	
	劇団上野市民劇場	518-0873	上野市丸の内 共同ビル3F	0595-23-5252	0595-24-6444
	劇団すがお	511-0943	桑名市森忠睦美丘1058	0594-31-4210	同左
部	劇団夜明け	508-0022	中津川市北野町丸山	0573-65-4937	同左
	劇団はぐるま	500-8882	岐阜市西野町1-11	058-265-1852	058-265-1652
	劇団たけぶえ	915-0857	武生市四郎丸町2-2	0778-23-0147	0778-23-4095

全日本リアリズム演劇会議 住所録

東 会 議

ブロック	劇団名	〒	住 所	電 話	F A X
北 海 道	劇団さっぽろ	063-0053	札幌市西区宮の沢3条4-14-8	011-663-6259	011-663-8198
	劇団新劇場	007-0871	札幌市東区伏古11条2-396-47	011-784-9908	
	ドラマシアターども	067-0074	江別市高砂町37-90 安全智康方	011-384-4011	
	劇団弘演	036-8183	弘前市品川町1 ブラジル内	0172-35-4670	
奥	劇団支木	030-0822	青森市中央2丁目4-6	0177-77-4677	同左
	黒石演劇研究会	036-0305	黒石市乙徳兵衛町51 加賀谷方	0172-52-4097	
	劇団やませ	031-0841	八戸市鯉町字下松苗場14-184 証谷方	0178-33-3850	
	劇団未来半島	035-0053	むつ市緑町26-2 船丸二物産内 仁木方	0175-24-1189	
東 北	劇団山形	990-2423	山形市東青田町5丁目8-5	0236-32-4105	
	劇団だいこん座	997-0832	鶴岡市青柳町43-32 たんぼぼ保育園内	0235-24-1688	
	仙台小劇場	980-0022	仙台市青葉区五橋1丁目5-13 平和友好会館2F	022-264-2340	同左
	劇団群馬中芸	371-0101	群馬県勢多郡富士見村赤城山大河原626-498	0272-88-2700	
関	劇団崎芸	362-0032	上尾市日の出町4-508-1	048-777-4430	同左
	劇団久喜座	346-0003	久喜市中央1-3-13 江原方	0480-21-0664	
	青年劇場	160-0022	東京都新宿区新宿2-9-20 関川ビル4F	03-3352-6922	03-3352-9418
	劇団錦輝	174-0064	東京都板橋区中台1-1-4	03-3937-1101	03-3937-1103
東	東京芸術座	177-0042	東京都練馬区下石神井4-19-11	03-3997-4341	03-3904-0151
	劇団展望	166-0004	東京都杉並区阿佐谷南3-3-32	03-3393-2739	

ブロック	劇 団 名	〒	住 所	電 話	F A X
中 国	劇団演劇街	753-0075	山口市中国町1-3 やの舞台美術内	0839-24-0075	
	山口事務所	753-0056	山口市湯田温泉6-3-28 柳沢方	0839-20-2379	同左
山陰	劇団あしぶえ	690-2105	島根県八束郡八雲村平原481-1 しいの美シアター	0852-54-2400	0852-54-2411
四国	劇団こじか壺	790-0821	松山市木屋町4-35-1 酒井方	0899-24-3415	同左
九 州	福岡現代劇場	810-0022	福岡市中央区薬院1-6-5-410	092-751-7982	092-831-1696
	劇団生活舞台	815-0083	福岡市南区高宮1-4-12-201 松尾方	092-531-1166	
	劇団道化	818-0116	太宰府市太宰府2629-10	092-922-0737	
	劇団テアトルハカタ	810-0004	福岡市中央区渡辺通5-20-1	092-737-7685	092-737-7689

個 人	氏 名	〒	住 所	電 話	F A X
加	桜井 裕子	921-8157	金沢市山科3-6-10 早川方	0762-44-2802	
	大橋 喜一	211-0006	川崎市中原区丸子通2-682-604	044-733-0627	
盟	岡田 和義	176-0003	東京都練馬区羽沢2-12-8	03-3991-1723	
	こうじ谷 一郎	924-0805	松任市若宮町2-4	0762-75-2755	
人	大原 穰子	215-0004	川崎市麻生区万福寺2-14-5	044-966-8125	
	小松 徹	662-0947	西宮市宮前町8-8 ネオハイッ宮前町401	0798-36-8841	
加	栗原 省	643-0111	和歌山県有田郡吉備町庄684-32	0737-52-5963	0737-52-6099
	又川 邦義	673-0883	明石市中崎2-4-1-1310	078-913-6629	
盟	阿部 好一	565-0851	吹田市千里山西3-30-16	06-6385-3330	
	松永 英樹	753-0067	山口市赤妻町1-67	0839-22-6071	
人	東川 宗彦	581-0865	八尾市服部川9-48	0729-41-0554	
	藤原 重孝	753-0041	山口市東山2-9-10	0839-22-0393	
加	川島 柳一	270-2251	千葉県松戸市金ヶ作57-57	0473-84-6207	
	島田 たろう	476-0002	愛知県東海市名和町中首羅8-71	052-609-4554	

西 会 議

ブロック	劇 団 名	〒	住 所	電 話	F A X
大	関西芸術座	557-0042	大阪市西成区岸ノ里東2-10-2	06-6661-2112	06-6661-2060
	劇団潮流	557-0034	大阪市西成区松1-6-17 橘モータープール内	06-6658-2315	06-6656-4121
阪	劇団未来	536-0007	大阪府城東区成育1-4-25	06-6939-5777	同左
	劇団きづがわ	551-0031	大阪市大正区泉尾4-2-7	06-6551-3481	同左
京	劇団大阪	542-0012	大阪市中央区谷町7-1-39 新谷町第2ビル103	06-6768-9957	同左
	劇団コロロ	546-0024	大阪市東住吉区公園南矢田2-4-7	06-6695-6401	06-6695-6405
都	人形劇団クラルテ	559-0015	大阪市住之江区南加賀屋3-1-7	06-6685-5601	06-6686-3461
	大阪府職劇研	540-0008	大阪市中央区大手前2-1-59 大阪府職労4F書記局内	06-6941-3130	
神	劇団息吹	578-0913	東大阪市中野224-14 かまち勤労会館内	0729-64-4441	同左
	劇団京芸	612-8279	京都市伏見区納所北城堀31-18	075-631-2609	同左
都	人間座	606-0865	京都市左京区下鴨東高木町11	075-721-4763	同左
	劇団自立の会	620-0016	大津市比叡平2-35-5	077-529-8057	同左
和歌山	演劇集団和歌山	641-0022	和歌山市和歌浦南1-1-14	0734-45-4537	
	劇団四紀会	650-0022	神戸市中央区元町通2-9-1-612	078-392-2421	078-392-2422
神	劇団とろろ	652-0803	神戸市兵庫区大開通7-4-7 谷垣ビル4F	078-576-6488	同左
	神戸職演連	650-0011	神戸市中央区下山手通9-9-7 西藤ビル	078-351-6969	同左
戸	劇団かすがい	660-0881	尼崎市昭和通1-17-1 石和久ビル3F	06-6489-8984	同左
	神戸ドラマ館ボレロ	650-0011	神戸市中央区下山手通9-9-7 西藤ビル2F	078-361-9870	同左
中	劇団月狂会	730-0851	広島市中区榎町4-27 岩井方	082-234-9656	同左
	劇団若者座	755-0003	宇部市則貞3-12-5	0836-32-7424	

劇 団 名	〒	住 所	電 話	F A X
演劇集団未踏	121-0816	東京都足立区梅島1-9-1	03-3880-0034	
演劇サークル麦の会	133-0051	東京都江戸川区北小岩7-3-20	03-3659-8704	
川崎演劇塾	214-0005	川崎市多摩区寺尾台2-8-1-12-504	044-951-9819	
劇団津演	514-0027	津市大門31-28 仏教会館内 岸武雄方	0592-26-1089	
演劇研究所	420-0948	静岡市秋山町2-1715	054-271-0177	
劇団はにわ	461-0042	名古屋市東区矢田町3-9 アーバン・ドリーム矢田町401 下高原方		
演劇集団瞬(とき)	602-0000	京都市上京区芦山寺通り千本東入ル北玄番町51-7 山脇方	075-414-8624	
人形劇団京芸	611-0022	宇治市白川鍋倉山35-20	0774-21-4080	
演劇集団あり	683-0037	米子市昭和町23-2 宮倉方	0859-33-9302	
劇団いこら	643-0111	和歌山県有田郡吉備町庄684-32 栗原省方	0737-52-5963	0737-52-6099

〈休会中〉

劇 団 名	〒	住 所	電 話	F A X
演劇阿波っ子	770-0023	徳島市佐古三番町8-17 船越智子方	0886-23-5670	
岡山劇場演劇集団	719-1144	総社市富原480-3 岩城方	0866-92-4325	
座わだち	572-0045	寝屋川市東神田町22-21 安田幸二方	072-828-1349	
演劇サークルトラム	753-0041	山口市東山2-9-10 藤原方	0839-22-0393	

議 長 団 名	劇 団 名	〒	住 所	電 話	F A X
こばやし ひろし	劇団はぐるま	501-0104	岐阜市寺田852 円成寺	0582-51-0490	0582-52-3694
後藤 陽吉	青年劇団	184-0014	小金井市貫井南町5-12-13	0423-81-1590	
中野 健	劇団支木	030-0822	青森市中央2-4-6 劇団支木内	0177-77-4677	同左

友好劇団

劇 団 名	〒	住 所	電 話	F A X
アートステージくしろ	085-0816	釧路市貝塚1-6-19 加藤たけはる方	0154-42-8009	
劇団新芸	047-0261	小樽市銭函町3-23-162 鹿角優一方	0134-27-3746	
劇団河童	090-0036	北見市幸町8-3-4 扇谷国男方	0157-25-8348	
劇団湖(うみ)	068-2161	三笠市本郷町578-9 加藤元方	0126-2-3044	
釧路演集	085-0026	釧路市寿2-5-1 中山知征方	0154-23-6551	
劇団ベルソナ	062-0934	札幌市豊平区平岸4条12-8-4 秋元博行方	011-811-9036	
函館創芸	041-0844	函館市川原町2-5 長谷川潔方	0138-53-7520	
劇団海鳴り	094-0006	紋別市潮見町2-3-40 我孫子正好方	01582-3-3238	同左
劇団うみねこ	047-0042	小樽市末広町1-10 吉川勝彦方	0134-32-0607	
劇団波	045-0031	北海道岩内郡共和町梨野舞納 駒形勝博方	0135-62-3797	
劇団にれ	047-0263	小樽市美晴町10-14 柴山良宏方	0134-62-4507	
劇団シアターⅡ	060-0005	札幌市中央区北5条西27-3-5-503	011-643-8238	
札幌ろうあ劇団舞夢	063-0802	札幌市西区24軒2条6丁目 身体障害者福祉センター聴覚障害者協会	011-642-8010	
劇団風の子北海道	001-0033	札幌市北区北33条11丁目	011-726-3619	
劇団川	067-0056	江別市美原1695 春日基方	011-384-6064	
劇団彦群別	048-2335	北海道余市郡仁木町銀山3-163 関孝心方	0135-33-5257	
劇団なよろ	096-0065	名寄市大橋90-1教員住宅21 松岡義和方	01654-3-1049	
釧路演劇集団	085-0026	釧路市寿町2-5 中山友征方	0154-23-6551	
繁次郎劇団	043-0052	北海道釧路市江差町字茂尻町71 江差町文科会館内	01395-2-5115	01395-2-5594

☆演劇会議・誌は財政的ピンチをかかえるようになり、その主な原因が部数の減少にあります。したがって今号からはしばらく、100頁をメドとした編集に変えざるを得ません。そして、さらに機関誌、雑誌としての内容の充実化に努力し、読者の広がり求めていきます。また各劇団から新しい発想や意見を寄せていただき、誌面の刷新に協力をお願いします。

☆劇団通信は原則として、500字以内にまとめていただくことを望みます。地域の動きや取り組み（イベント）などはおもしろい内容であれば、情報BOXなどに掲載できます。

☆「デジタル劇団員入門」「文化行政のアンケート」は、総頁数などの関係で、次号にまわさせていただきます。

☆3月4日、激しい雨で、肌寒い日でしたが、午後から晴天になりました。この日、元編集長の萩坂桃彦氏の七回忌が

編集後記

川崎の専念寺で行われました。こばやしひろし・城谷護両氏と私が呼ばれて萩坂さんの墓前に線香を上げてきました。

①戯曲は、境野修次または、栗原省へ。
②劇団通信および舞台写真は、〒547-0027

「原稿の送付について」

・次号（7月号）の締切は5月20日です。
戯曲などは作品ができたとき、すぐに送ってください。また、劇評なども各劇団で依頼して上演が終わり次第送ってください。

③それ以外の原稿は、東会議は東京連絡所 境野 修次
西会議は大阪連絡所 赤松比洋子
大阪市平野区喜連5-1-45
株シーム内「演劇会議」編集部 担当者 石田 章
TEL 06 (6707) 38888
FAX 06 (6799) 38888

栗原 省
〒643-0111
和歌山県有田郡吉備町庄684-32
TEL 0737-52-5963
FAX 0737-52-6099

境野 修次
〒272-0136
千葉県市川市新浜1-23-5-103
TEL&FAX 047-356-7217
(職場) 〒136-0073
東京都江東区北砂1-17-4
ネットワークゆめ工房
TEL 03-3644-6773
FAX 03-3644-8768

赤松比洋子
〒663-8141
兵庫県西宮市高須町1-1-11-859
TEL&FAX 0798-45-3307

演劇会議 105号 2001年4月7日発行 定価 700円 (送料240円)

編集委員 境野修次 石垣政裕 山崎三郎 栗原 省 赤松比洋子 楠本幸男
発行所 〒212-0052 神奈川県川崎市幸区古市場2-109 京浜協同劇団
TEL/044-511-4951 FAX/044-533-6694

誌代振込先（郵便振替）口座番号00200-4-78639

全日本リアルリズム演劇会議事務局（〒212-0052 神奈川県川崎市幸区古市場2-109 京浜協同劇団・城谷護）

議 長	団 名	〒	住 所	電 話	F A X
藤沢 薫	劇団芸芸	615-8152	京都市西京区堀原内垣外町25-1-4403	075-391-5039	同左
梶 武史	劇団四紀会	673-0844	明石市東野町1-5-1009	078-911-1513	同左
猿渡 公一	福岡現代劇場	814-0033	福岡市早良区有田2-2-9	092-831-1696	同左

顧問

仲 武司	関西芸術座	675-0104	加古川市平岡町土山953-8	078-944-5013	
------	-------	----------	----------------	--------------	--

事務局	劇 団 名	〒	住 所	電 話	F A X
城谷 護	京浜協同劇団	211-0952	川崎市幸区東古市場9-21 (事務局長)	044-544-3737	同左
浅野 真理子	劇団はぐるま	500-8882	岐阜市西野町1-11 劇団はぐるま内	0582-65-1852	058-255-1652
熊本 一	劇団大阪	630-0135	生駒市南田原1230-60 (西会議事務局長)	07437-8-2558	同左
田中 実	劇団息吹	581-0081	八尾市南本町2-6-32 (西会議事務局次長)	0729-99-9437	同左
清原 正次	劇団大阪	570-0079	守口市金下町1-12-13 (西会議事務局次長)	06-6993-3113	同左
編集委員					
境野 修次	演劇集団石るつ	272-0136	千葉県市川市新浜1-23-5-103	047-356-7217	同左
石垣 政裕	仙台小劇場	981-1105	仙台市太白区西中田5-23-1	022-241-1396	022-241-6138
山崎 三郎	劇団静芸	420-0886	静岡市大岩2-19-10	054-245-5758	
栗原 省	劇団いこら	643-0111	和歌山県有田郡吉備町庄684-32	0737-52-5963	0737-52-6099
赤松 比洋子	劇団きづがわ	663-8141	西宮市高須町1-1-11-859 古川方	0798-45-3307	同左
楠本 幸男	演劇集団和歌山	640-8391	和歌山市加納271-14	0734-73-7589	同左